

<sup>い</sup>伊 <sup>ぼ</sup>保 遺 跡

<sup>ね</sup>根 <sup>がわ</sup>川 3 号 墳

<sup>さか</sup>坂 <sup>ぐち</sup>口 遺 跡

<sup>たか</sup>高 <sup>どい</sup>樋 遺 跡

1993

# 序

豊田市及び東加茂郡旭町は、愛知県の北側、西三河地方北部に所在し、この位置は愛知県の山間部を形成する三河高原の先端部にあたっています。この三河高原をほとぼしる水は、いくつかの水系を形成しながら各地域を潤しておりますが、その水系の一つである矢作川は、三河高原の中心から北側を迂回しながら、太平洋（三河湾）へと向かって流れています。この矢作川の流れが山間部から平野部へと移行する場所が、旭町から豊田市にかけての地域であり、太古の昔より水系の上・下流域からのさまざまな影響を受けた生活が営まれてまいりました。

このたび愛知県土木部道路建設課によって、豊田市東保見町地内に県道加納東保見線建設・東加茂郡旭町大字池嶋地内に県道島崎豊田線拡幅・豊田市坂上町地内に県道坂上花沢線建設の各工事が行われることとなりました。この各工事予定地には愛知県遺跡分布地図に記載の「根川古墳」（遺跡番号63075）・「伊保遺跡」（遺跡番号63074）・「坂口遺跡」（遺跡番号69022）・地図には無記載ながら試掘調査によって存在が確認された「高樋遺跡」があります。（財）愛知県埋蔵文化財センターでは愛知県教育委員会を通じて愛知県土木部からの委託を受けて、各工事に先立ち事前調査を行いました。その結果、縄文・弥生・古墳時代などの遺構、遺物を検出することができ、この地域の歴史に新たな資料を提供できることになりました。

各調査にあたりましては、愛知県教育委員会、愛知県土木部道路建設課、豊田市教育委員会、旭町教育委員会をはじめとする関係諸機関、地元住民の皆様から多大の御協力をいただきましたことに深く感謝申し上げる次第であります。

最後に本書が地域史の理解、埋蔵文化財研究の一助となれば幸いと存じます。

平成5年3月

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

理事長 高木 鐘三



伊 保 遺 跡  
根 川 3 号 墳

# 例 言

1. 本編は愛知県豊田市保見町・東保見町に所在する伊保遺跡、及び東保見町根川に所在する根川3号墳の調査報告である。
2. 調査は県道加納東保見線建設に伴う事前調査として実施し、愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成2年6月(1990)～平成4年(1992)8月まで財団法人愛知県埋蔵文化財センターが行った。
3. 調査は北村和宏(調査研究員、現岡崎西高等学校)・真鍋雅治(主査、現松陰高等学校)・岡本直久(嘱託員、現(財)瀬戸市埋蔵文化財センター)・鷺見豊(主査、現西春小学校)・赤塚次郎(調査研究員)・鬼頭剛(調査研究員)が担当し、水野拡子氏の御協力を得た。
4. 調査にあたっては次の各関係機関の御協力を得た。  
愛知県教育委員会文化財課・愛知県埋蔵文化財調査センター・愛知県豊田土木事務所・豊田市教育委員会
5. 本編の執筆は第Ⅱ章1と第Ⅲ章1を加藤安信(調査課長)が、その他と編集を赤塚次郎が担当した。
6. 遺物整理において国立智美・高田恵理子両氏の御協力を得た。
7. 調査区に使用した座標は国土座標第Ⅶ系に基づくものである。
8. 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターに保管。

# 目 次

## 〈伊保遺跡〉

I 調査概要	2
1 経緯	2
2 環境	4
II 遺構	6
1 旧石器時代	6
2 弥生時代後期から古墳時代初頭	6
3 室町時代	9
III 遺物	10
1 旧石器時代	10
2 弥生時代後期から古墳時代初頭	13
3 室町時代	18
IV まとめ	21

## 〈根川第3号墳〉

根川第3号墳	24
別表	27

## 挿図目次

第1図 調査進行図	3
第2図 調査区位置図	3
第3図 伊保遺跡と周辺の遺跡	5
第4図 石器分布	7
第5図 石器出土地点	7
第6図 基本層序	7
第7図 90区南部	8
第8図 91B区北部	9
第9図 石器出土位置関係	11
第10図 石器	12
第11図 動物型土製品	14
第12図 その他の遺物	14
第13図 NR02出土土器	15
第14図 SD03出土土器	16
第15図 NR01・SD05・SD08 出土土器	17
第16図 SK03・SK02・SK01 出土土器	19
第17図 SK05・SK04他出土土器	20
第18図 伊保柵口期	23
第19図 根川古墳群	24
第20図 根川3号墳出土須恵器	25
第21図 根川古墳群位置図	26
第22図 SX01	26
第23図 調査区位置図	26

## 図版目次

図版1 伊保遺跡主要遺構	1:500
図版2 伊保遺跡 90区・90区NR02	
図版3 伊保遺跡 SD03・SB01・NR03	
図版4 伊保遺跡 NR02・SD03出土遺物	
図版5 伊保遺跡 出土遺物	
図版6 根川3号墳 1:200	
図版7 根川3号墳	
図版8 根川3号墳出土器台・伊保遺跡出土石器	

# 伊 保 遺 跡

# I 調査概要

## 1 概要

伊保遺跡（遺跡番号63074）<sup>1)</sup>は愛知県豊田市保見町から東保見町にかけて広がる遺跡であり、北緯35° 30' 東経137° 8' 30"に位置する。

伊保遺跡の発掘調査は、昭和44年（1969）県営圃場整備事業に伴ない実施されたのが嚆矢であり、翌昭和45年（1970）において第2次調査が行なわれた。調査主体は「猿投遺跡調査会」であり、その調査成果はすでに『伊保遺跡』報告書として刊行されている<sup>2)</sup>。それによると遺跡の範囲は、伊保川が流れる谷間である「伊保谷」西部を東西に長く広がることが確認されている。出土遺物はおおよそ3世紀の遺物群と5世紀末から6世紀前半にかけての2つに大きくまとまる傾向が認められる。そのうち最も注目され、かつ「伊保遺跡」の名を著名にしているものとはいえば、第2次調査における柵口地区溝状遺構出土土器であろう。その遺構は幅1m・深さ0.3mほどの小規模なものであるが、その第2層より大量の土器が出土し、そしてその主体を占めていた甕のほとんどが、平底タタキ甕であった。こうしたタタキ甕を主体とする土器群の在り方は、現在においても西三河地区、いや伊勢湾沿岸部においてさえも他に類例を見ないものである。その意味からも伊保遺跡柵口地区のもつ重要性が窺い知れるのであるが、残念なことに出土土器が今だ公表されず、そのため研究の進展がほとんど見られない。さらにタタキ甕だけが遺跡から遊離し、多くの研究者によって様々な推論が発表される結果となっているのが現状である。特に「タタキ甕すなわち畿内系」という図式に基づく土器交流に言及する機会が多いようである。

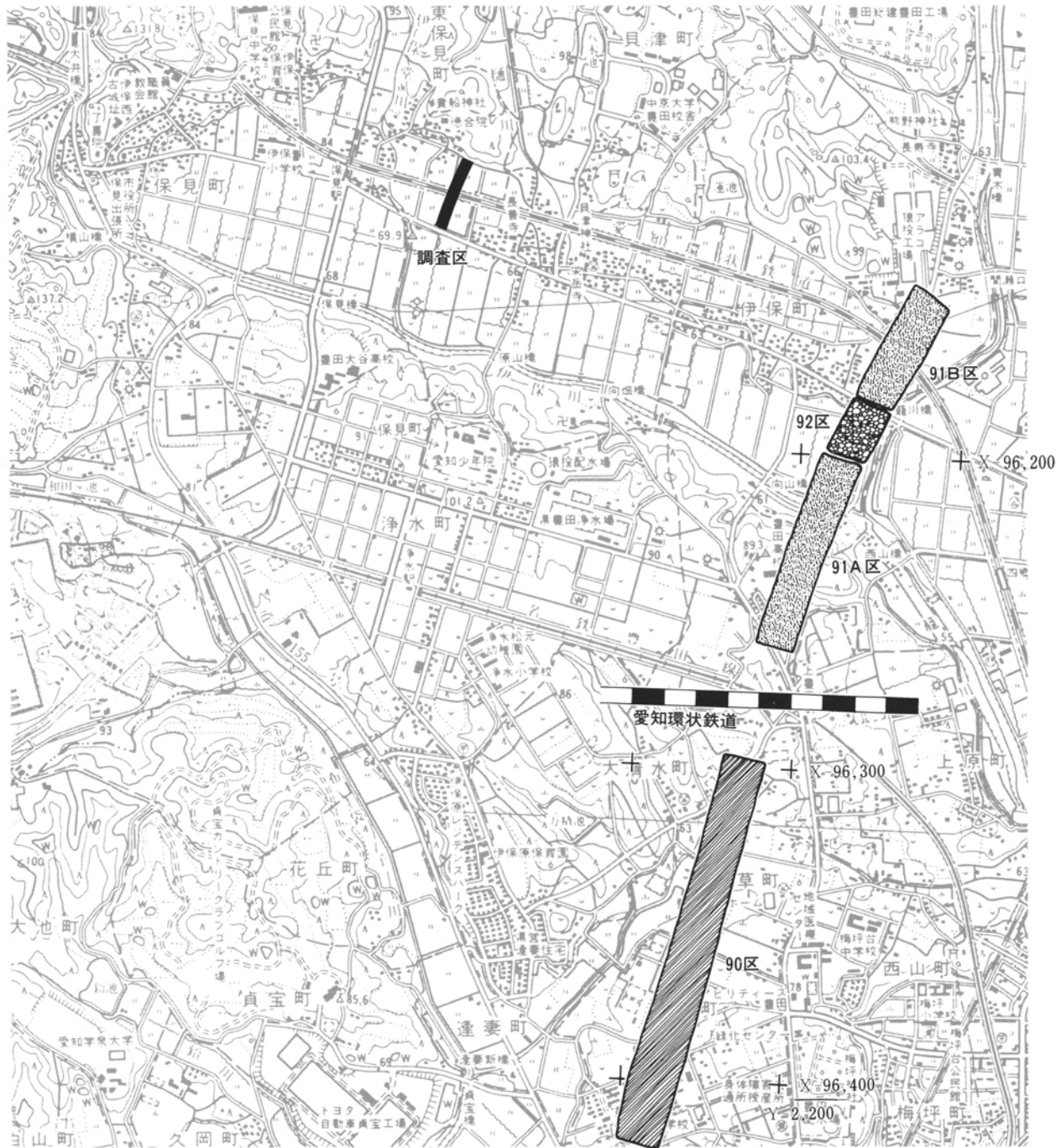
さて今回は県道加納東保見線建設予定地において調査区を設定することができた。愛知環状鉄道を挟んで南北に長い調査区であり、その中をおよそ2地点に区分して考えることができる。まず愛知環状鉄道より南の90区において、3世紀前半を中心とする遺物の出土が確認できたが、これらの多くは残念ながら2次的な遺物の堆積状況であった。しかし北部地区（91B区）では室町時代の建物の発見が見られ、中世期の遺構の展開が想定できるような新たな知見も得られている。さらに90区北では旧石器時代の石器分布が小範囲ではあるが確認でき、当初予想もしない尖頭器の発見も見られた。

〔注〕

- 1) 愛知県教育委員会 1988 『愛知県遺跡分布地図（Ⅱ）知多・西三河』
- 2) 大橋 勤他 1974 『伊保遺跡』 猿投遺跡調査会

1990				1991								1992年															
9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
90区				2,192m <sup>2</sup>								(調査担当) 鷺見豊・岡本直久															
(調査担当) 真鍋雅治・岡本直久				91A・B区								1,750m <sup>2</sup>															
												92区															
												500m <sup>2</sup>															
												(調査担当) 赤塚次郎・鬼頭剛															

第1図 調査進行図



第2図 調査区位置図

(地図 1 : 25000 豊田市全図より、調査区設定図 1 : 200)

## 2 環境

伊保遺跡は豊田市北方、旧猿投町の伊保谷に所在する。伊保谷は西及び南北が低丘陵に囲まれ、谷は急速に南傾してその端には伊保川が東流する。伊保川は谷の出口部で亀首谷を流れる籠川と合流し、さらにその南でただちに矢作川と合流する。現在の伊保遺跡周辺は、遺跡の中央部を県道名古屋豊田線と愛知環状鉄道が東西に通り、その南には水田が広がっている。愛知環状鉄道保見駅が遺跡のほぼ中央に位置し、北部の丘陵地は保見団地によって大きく開かれ、市街地としての景観が整いつつある。ところで伊保遺跡から西へ向かうと現在の国道155号にそって瀬戸に通じることになる。この道は古来より、拳母（豊田）から瀬戸を通り多治見に抜ける道として、重要な役割を担ってきたものと思われる。

伊保谷はおおよそ標高70mの等高線をさかいにその上部が洪積台地面を形成しており、その台地面全域がほぼ伊保遺跡の範囲と推定することができる。その台地面やや東寄りに伊保堂川が流れ、谷の南で伊保川と合流する。調査成果からこの伊保堂川沿いに古墳時代初期の集落が展開していたものと推定することができよう。

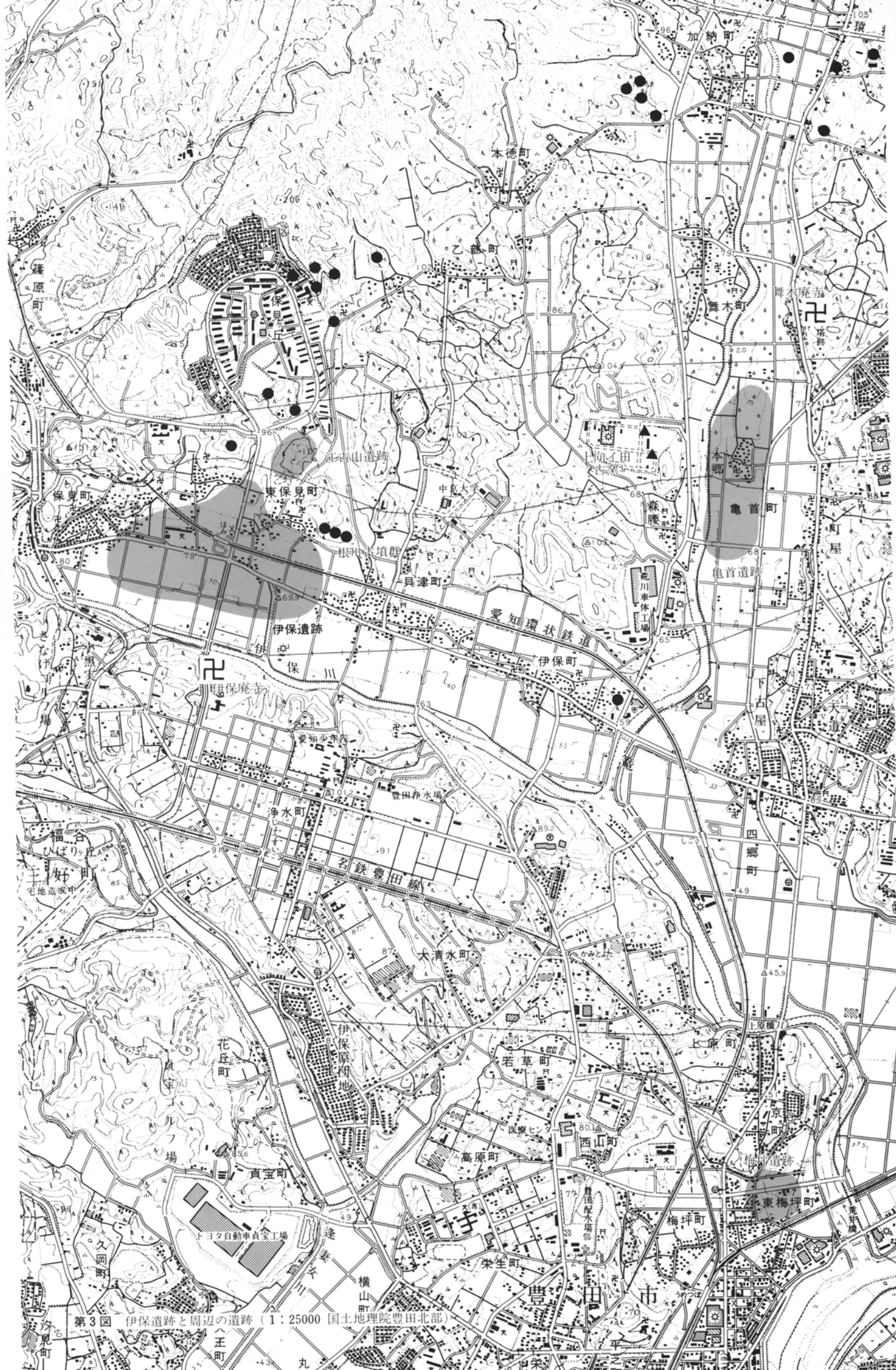
伊保遺跡の北丘陵上には近年豊田市教育委員会が調査した江古山遺跡が所在し、やはり弥生時代後期から古墳時代にかけての墳丘墓が発見されている。また埴輪を使用した小規模な古墳も造営されており、伊保遺跡との強い関係を推測させるものである。2・3世紀の集落遺跡として伊保遺跡と同様な性格をもつものとしては、亀首谷入り口に所在する、亀首遺跡や籠川が矢作川と合流する地点に位置する梅坪遺跡が見られる。亀首遺跡は調査がほとんど行なわれておらず不明瞭であるが、梅坪遺跡は市教育委員会によって数次にわたる調査が実施されている。それによると弥生時代後期から古墳時代にかけての極めて注目すべき遺跡であることが明らかになりつつある。このようにこの時期各小河川を単位に1つの拠点的な集落が点在する点は改めて留意する必要がある。

ところで古墳時代後期になるとまず伊保谷に埴輪を使用した新しい古墳造営が開始されていく。それが伊保遺跡北東の丘陵上に存在する根川古墳や江古山遺跡に代表される動きであろう。それに呼応する形で伊保遺跡が再び大きく集落を形成することになる。なお亀首遺跡西丘陵部には須恵器・埴輪兼用窯である上向イ田古窯が営まれた。その後亀首谷には6世紀後半から7世紀にかけて大型の横穴式石室を採用した古墳が造営され、1つのまとまった力の台頭を類推させる。それは池田1号墳・藤山1号墳に代表されるものであり、やがて舞木廃寺の建立につながる。なお伊保遺跡南方にも伊保廃寺が所在する。これらの地域はやがて西加茂郡「伊保郷」として文献に登場することになる。

### 参考文献

伊藤稔 1976 「古代の豊田」『豊田市史1』 豊田市教育委員会





第3図 伊保遺跡と周辺の遺跡 (1:25000 国土地理院豊田北部)



## Ⅱ 遺構

今回の調査区では大きく3つの時期に区分して考えることができる。まず石器の分布が確認された尖頭器を主体とする時期。次に2世紀後半から3世紀初頭に中心を置く時期。最後に14世紀後半に中心を置く時期である。

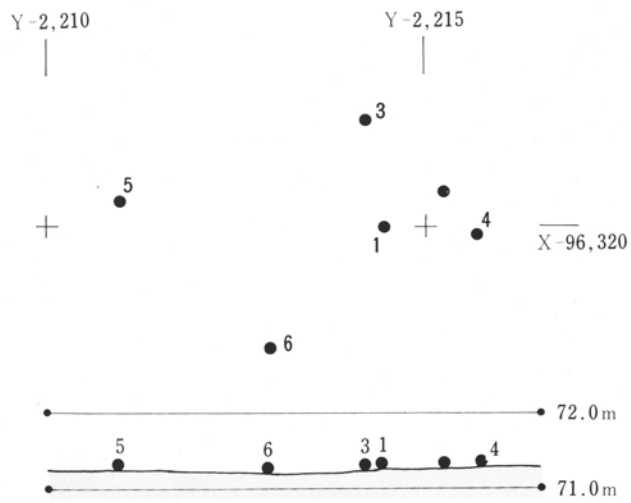
### 1 旧石器時代

90A調査区北端近くから、旧石器時代の槍先形尖頭器4点、剥片2点、チップ1点が出土した。出土地点は愛知環状鉄道用地の南側に当たり、石器は国土座標第Ⅶ系のX=-96.320、Y=-2.217を中心にした径約5メートルの範囲内に分布していた。出土レベルは、71.3メートル前後。いずれも淡赤褐色を呈する基盤（三好面の三好層）直上から発見された。石器分布範囲及びその周辺から、関連するとみられる遺構は発見されなかった。また、各石器間に接合関係も認められず、出土地点が石器製作跡であるのかどうか、断定できない。

### 2 弥生時代後期から古墳時代初頭

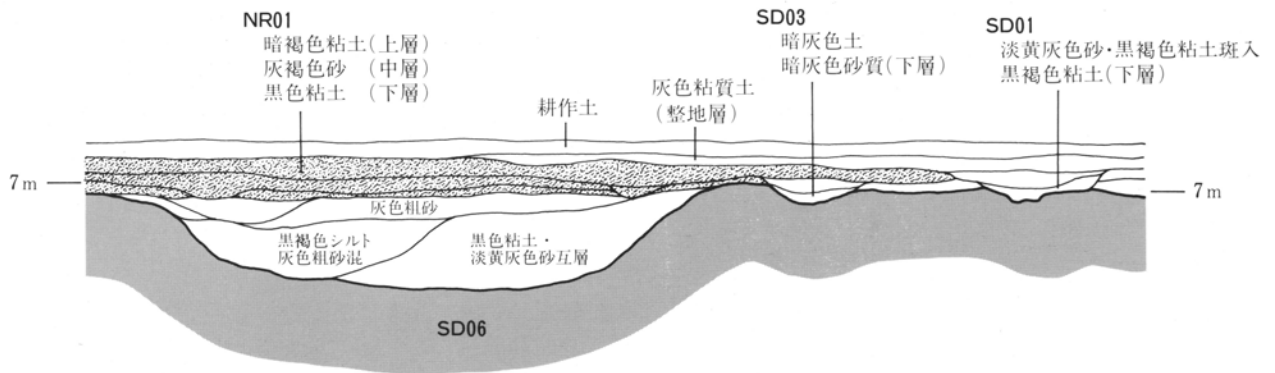
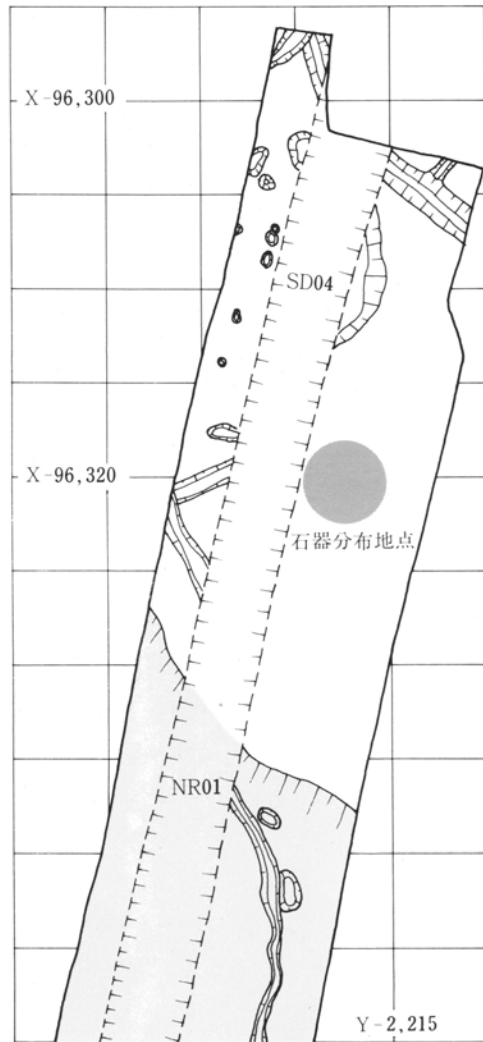
明確な遺構としては90区南部で検出したSD03が存在する。調査区を東西に横断する小溝で、幅1m・深さ0.1mを測り、ややまとまった土器の出土が見られた。またSD03に沿うかたちでSK06が掘削され、やはり同様に古墳時代初頭の土器が包含されていた。また90区南端のSD08は幅0.5m・深さ0.15mの小規模な溝であり、この溝からの出土遺物は山中式後期に併行する可能性がある。

その他には明確な遺構は確認できていない。ただ90区中央部で検出されたNR01の砂礫・粘土の堆積層中からは、2次堆積ではあるが土器の包含が認められた。さらに調査区南端のNR02北掘り形において、山中式後期に併行する土器が出土している。なおNR01とした砂礫の堆積範囲は幅50mにも及んでおり、その上流部での弥生時代後期～古墳時代の集落遺構の展開が推定でき、それらの遺構群を襲った小河川の氾濫が、NR01における土器堆積と推定できよう。



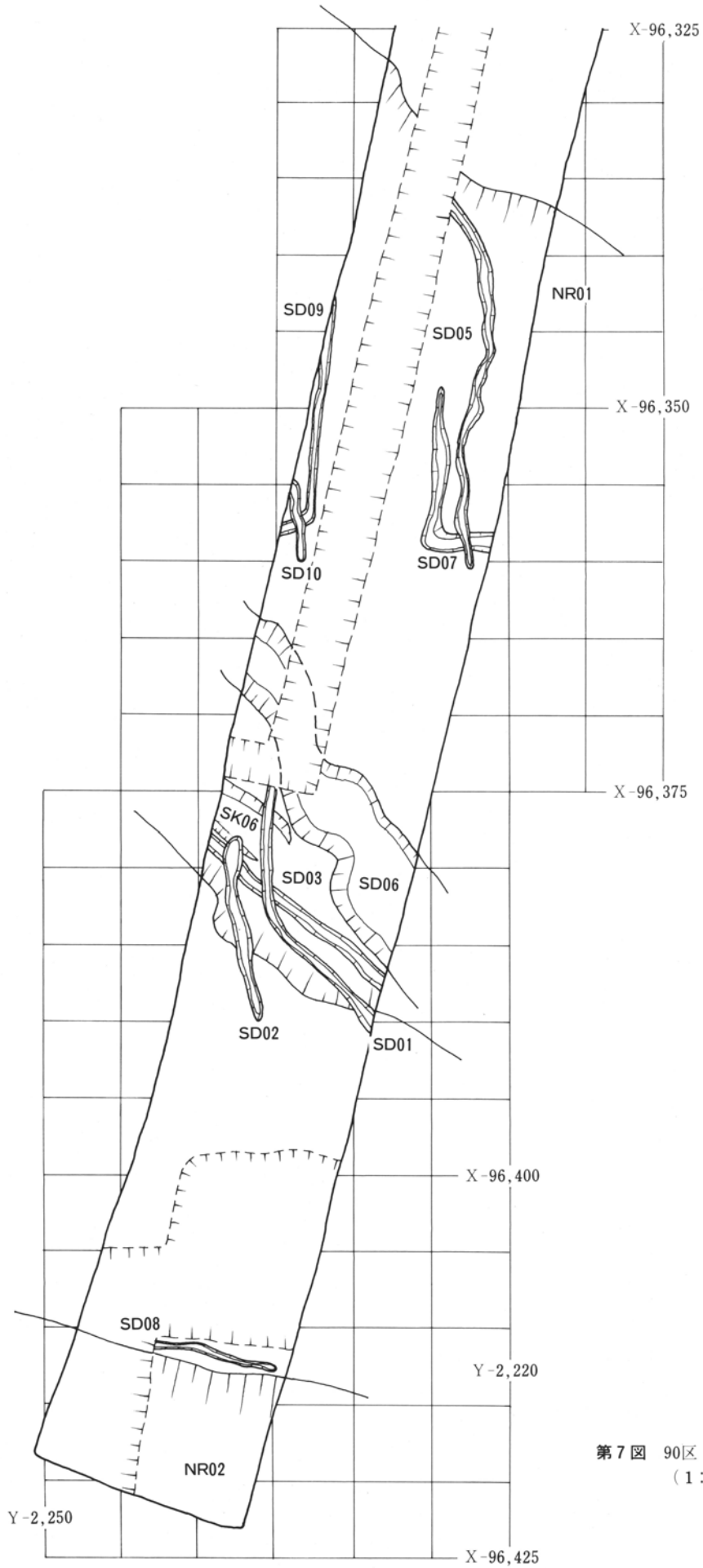
▲ 第4図 石器分布 (1:10)

第5図 石器出土地点  
(90区 北部 1:400) ▶



第6図 基本層序 (1:100)

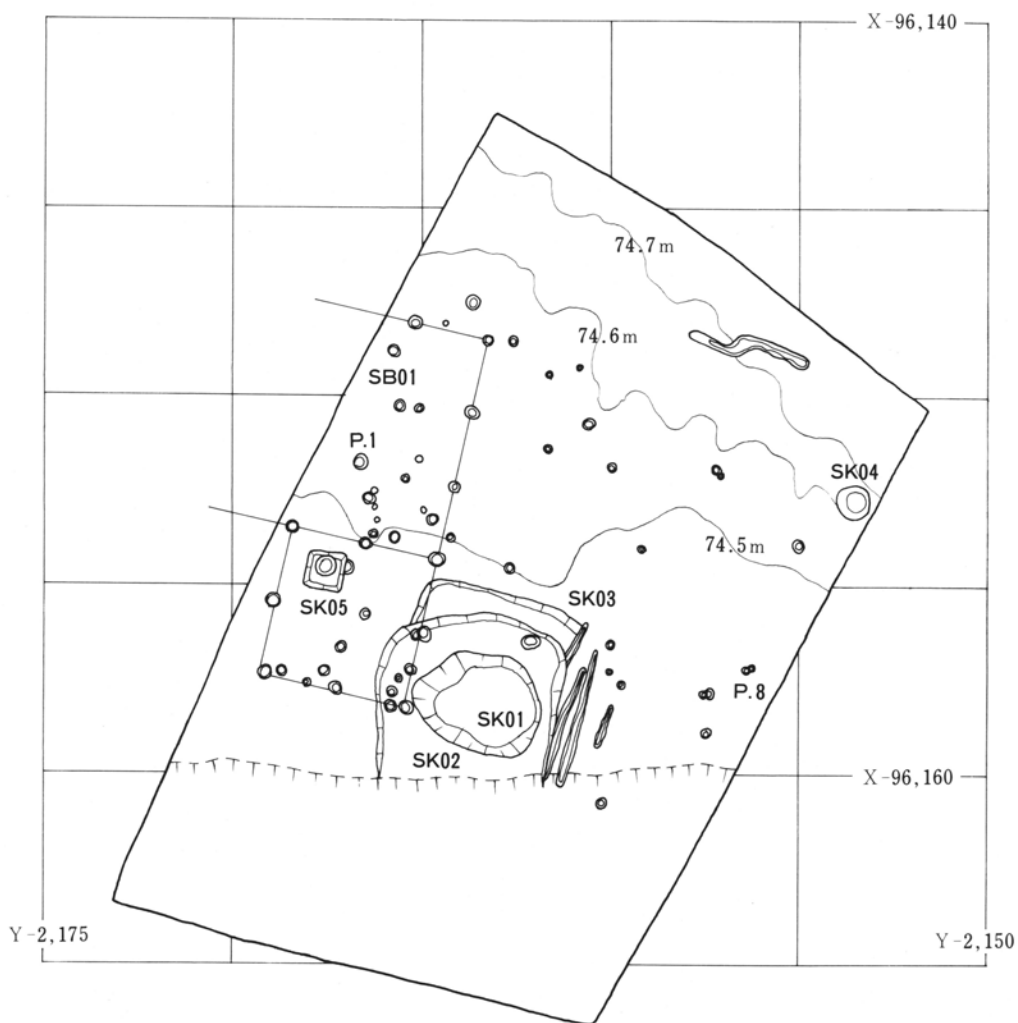
伊保遺跡



第7図 90区 南部  
(1:400)

### 3 室町時代

91B区北端において室町時代の遺構を確認することができた。検出面での標高は74.5mを測り、遺構が立地する場所は、すぐ北には丘陵部が迫り急速に南に向かって下降する斜面となる。掘立柱建物SB01は調査区北西隅に存在し、南北3間・東西3間以上で南東隅に2間×2間の方形部が取り付け、その内部には1m四方の土坑SK05が掘削されている。SB01は桁・梁行ともほぼ2m等間である。また方形部の柱間も2m等間となる。柱穴の残存状況は比較的良好であり、中には柱根及び礎板が残るものも認められた。SB01に重複する形で方形土坑SK02・03が営まれている。またSK02は中央部に不整形土坑SK01が存在する。SK02内より灰釉系陶器がややまとまって出土している。SK03→SK02→SB01と変遷が窺われ、出土遺物からも14世紀代、藤澤編年Ⅳ段階を中心とする変化が認められる。その他調査区北東隅の円形土坑SK04は、径4.8m・深さ0.14mを測り、中より重ね焼き状態で加工を加えた灰釉系陶器碗（図版16-176）が出土している。



第8図 91B区 北部 (1:200)

## Ⅲ 遺物

### 1 旧石器時代 (第10図)

7点の石器は、古墳時代の包含層掘削中に発見された1点(2)を除き、基盤面における古墳時代遺構精査中に出土した。尖頭器4点、剥片2点、チップ1点に分類される。石材はいずれもチャートである。

#### (1) 尖頭器

4点の尖頭器は、すべて両面調整された木葉形・広葉形の槍先形尖頭器で、長さ10センチメートル以下の中・小形品。形態から次の2類に分類される。

1類……小形で、長さに対して幅が広く、ずんぐりしている形態(1・2)

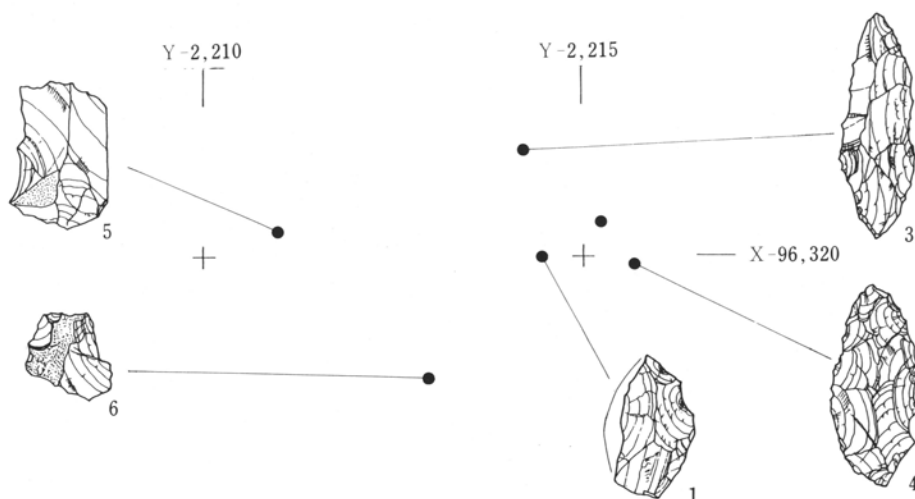
1は、縦方向に割れて、概ね半分が欠損している。製作途中で半分に割れてしまったものとみられる。基部周辺には未加工の節理面が残る。両面共に剥離は粗く、周縁に細部調整は施されていない。最大幅は中央部にあり、その断面形は偏平三角形状。推定長幅比は0.64。2も基部に一部節理自然面を残し、未加工または欠損部分をもつ。両面共に粗い剥離で整形されながら、均整に整えられている。剥離は、正面・裏面とも左側部分が先、右側部分が後に行われている。正面では、先端部分に細部調整が加えられて、先端部が鋭くされている状況が窺われる。最大幅は中央部にあり、その断面形は1と同様に偏平三角形状である。推定長幅比は0.60。

2類……中形で、細長い形態(3・4)

3のみ小豆色を呈するチャートで作られている。正面左側には先端から縦方向に長さ4センチメートルほどの大きな槌状剥離が認められ、左右非対称の形状をなしている。この剥離は製作途中の偶発的な産物ではなく、最も古い段階の岩宿Ⅲと仮称される東内野型尖頭器に特有の剥離面と考えられる。両面共に粗い剥離のままであるが、基部周辺には一部リタッチが認められる。最大幅は下半部にあり、その断面形は両面凸レンズ状を示す。長幅比は0.35。4も3と同様完形品であるが、先端部と基部との区別がやや不明瞭な資料。ここでは未加工面が一部残る方を基部とした。先端角度は約90度と鈍い。両面共に周縁からの粗い剥離が目だつが、先端部近くの側縁には細部調整が施されている。最大幅は概ね中央部にあり、その断面形は両面凸レンズ状を呈す。長幅比は0.41。

#### (2) 剥片・チップ

5は急角度の稜線をもち、断面形が偏平な三角形状をなす縦長剥片である。正面に一部自然面が残る。横に折れていて、打面は欠損している。幅が2.3センチメートルもあり、や



第9図 石器出土位置関係 (1:10)

や幅広の縦長剥片とみられる。6は両面加工の不定形な小形剥片。先端が折れ、片面の中央部分に自然面を残す。打面は剥取されている。チップは長さ3.0センチメートル、幅1.6センチメートル、厚さ0.7センチメートル。両面に節理面がみられ、加工途中で節理面に沿って剥がれて飛び散ったものとみられる。

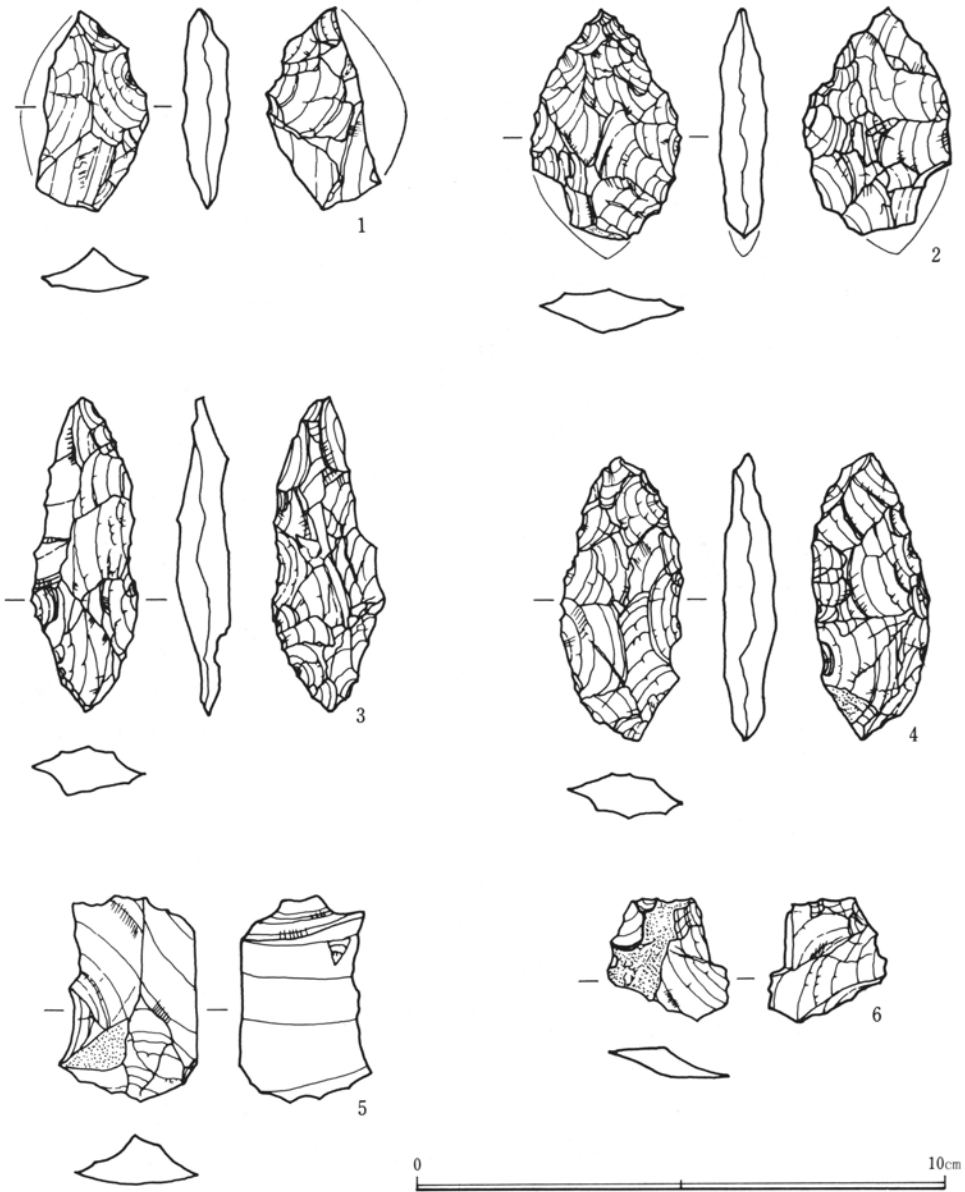
### (3) まとめ

1. 旧石器時代に属する槍先形尖頭器の出土は、今回の伊保遺跡の発掘調査の成果のうちでも特筆に値する事項である。尖頭器4点と剥片類の間には接合関係は認められなかったが、径5メートル以内の狭い範囲で、しかも基盤直上の同一レベルにおいて出土した状況からみて、それらは一括性が高く、一つのブロックを構成していると考えられる。ただし、剥片・チップの類が量的にみて余りにも少量であり、かつ石核や素材が出土していない状況からして、当該地点を石器の製作場所とする積極的な根拠は見あたらない。

2. 尖頭器4点のうち、先端部に一条の槌状剥離面をもつ3は、東日本地域に分布する東内野型尖頭器に分類される形態である。したがって、他の3点の尖頭器もそれと同一の時期に製作されたものと考えられる。尖頭器を主体とする文化の最も古い段階から出現する東内野型尖頭器は、本県での出土はこれが初例であり、近隣では、静岡県沼津市広合遺跡休場層からの出土が知られている。同例も大きさは中形品であるが、形態が最大幅を中央部やや上半に取る菱形に近い点で、伊保遺跡の資料とは異なっている。

しかし、今回の東内野型尖頭器の出土によって、尾張・三河地域、少なくとも三河地域へは、尖頭器を主体とする文化の最も古い段階から、その製作技術が伝わってきていることが判明した。また、併せて、その段階から、長幅比0.5以上の広葉形で荒い剥離により整形された長さ5センチメートル以下の小形製品が同時に作られていることも明らかとなった。

3. 石器素材に用いられたチャートは、基盤をなす三好層中に円礫として多量に含まれている。したがって、尖頭器類は、出土地点またはその付近において素材を採取し、製作されたものである。



第10図 石器

番号	器種	出土区	出土年月日	出土レベル (m)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	長幅比	石材	色調	備考
1	尖頭器	90A NH4q	910214	71.309	3.8	(3.1)	0.8	(58)	(0.64)	チャート	10Y4/2	半分欠損
2	尖頭器	90A NH6q	910129	表採	(4.3)	2.8	0.8	(103)	(0.60)	チャート	10Y4/1	基部欠損
3	尖頭器	90A NH4q	910128	71.324	6.1	2.1	1.0	96	0.34	チャート	7.5R3/2	
4	尖頭器	90A NH5r	910128	71.325	5.4	2.3	1.0	102	0.41	チャート	10GY4/1	
5	剥片	90A NH4q	910128	71.322	(3.9)	2.6	0.9	(74)	—	チャート	N 6/0	半分欠損
6	剥片	90A NH5q	910214	71.277	(2.3)	2.3	0.5	(32)	—	チャート	5G2/1	
	チップ	90A NH4r	910128	71.324	3.0	1.6	0.7	24	—	チャート	5GY5/1	

注1. 長幅比 幅/長さ

注2. 色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』による。

注3. ( ) は残存長

## 2 弥生時代後期から古墳時代初頭

弥生時代後期に所属するものはSD08及びNR02北掘り形の資料に認められる他は存在せず、調査区最南端に集中する傾向が見られる。一方、古墳時代初頭に所属する資料は90調査区中央部のNR01全体に散在し、特にSD03からまとまって出土している。

### NR02（第13図）

8～20は有段高杯で、8～14は脚部であるが10は中実で、8・9には横線文・刺突文の組み合わせが施される。9は透孔を3方向に穿ちその上部に1ヶ所のみ穿孔するものが組み合わせられる。こうした組み合わせは山中式後期から廻間Ⅰ式前半期にかけて見られる特色でもある。16・17は有段高杯の杯部で、外面タテミガキを施すものである。一方、15・18・19・20は杯部外面にヨコナデ調整を施し、19・20には波状文が見られる型式で、口縁端部には擬凹線を施す明確な面をもつ。22は器台の可能性が高い。25～30は甕ないし鉢と考えられる。27は穿孔があり、内面ケズリ調整。33は赤彩波線文を施す壺の体部であるが、横線文が確認できない。37は口縁部に幅広の平坦面をつくる広口壺で、平坦部から口縁外面にかけて赤彩塗布。38・39・40は口縁端部に文様を施す広口壺で、内外面に羽状文をもつものと竹管文40の違いが認められる。12・14・33・36を除いた多くは濃尾平野における山中式後期に併行する時期に所属するものと推定されようが、基本的には高杯における類似性のみに基づくものである。

### SD03（第14図）

42～57は有段高杯。脚部において横線文を施しやや柱状脚を残す資料42・43・44・45・48と、杯接合部よりただちに大きく開く46・47・50の2種が見られる。また同様に杯部においても外反する51～56と、外傾する57の2種が共伴する。甕は69・71・72の端部に刺突文をもち内面ケズリ調整をもつもの、70・73の「く」字状口縁をもつものの両者が主体を占めるようであり、その他として内彎口縁75・有段口縁68・跳ね上げ口縁74が見られる。なお74は鉢の可能性を残す。65は幅広の口縁端部に擬凹線を施し、口頸部内面に赤彩塗布が認められる。66・67は直口広口壺。

SD03出土資料の特色はまず高杯脚部の透孔が全体に1/2以上に穿かれる。甕口縁に多様な種類が登場する。壺に直口広口壺が存在する。甕台部に79のような内彎が認められる。壺底部が完全に突出する。こうした特色は廻間Ⅰ式前半期に類似するようである。ただ高杯杯部の傾向はやや古相の特色を残し、地域的な問題であるものかもしれない。

### NR01（第15図）

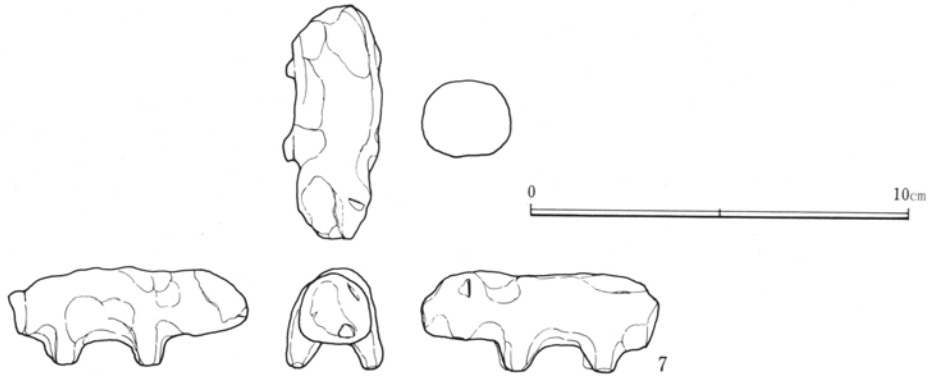
81は広口口縁をもつ台付甕で、口縁端部に刺突文が見られる。85・86はおそらく同一個体と思われるもので、内彎直口の中型壺であり、外面ミガキ調整を施す。83・88・91は有段高杯で、90は口縁内面に瘤状突起をもつ。81・90は西三河地域の土器の特色を残すものと考えられ、他の特色からは廻間Ⅰ式前半期と併行する資料と考えられよう。

なお動物型土製品（第11図）がNR01上層より出土している。



S K06は、透孔が上部に穿かれた高杯脚部があり、直口広口壺が見られることより廻間I式前半期の資料と考えられよう。S D08は、透孔が中央部に穿かれ、さらに外反する脚部が見られる高杯が存在し、こうした特色は山中式後期のものに類似する。

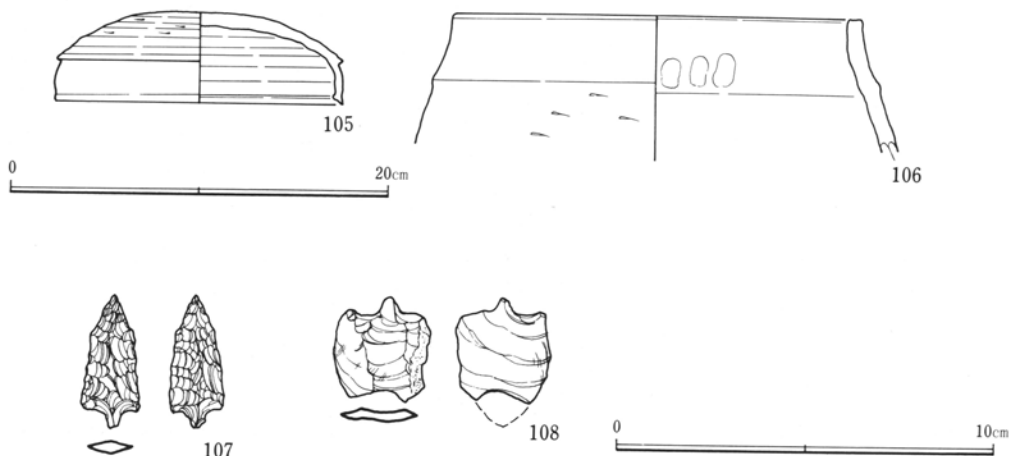
以上をまとめると、S D08及びN R02南掘り形部より出土した資料はおおむね濃尾平野での山中式後期の特色を残すものと理解できよう。そしてS D03は有段高杯にやや問題を残すものの、N R01・S K06を含めて廻間I式前半期の中で捉えておいて大きな誤りはない。なお矢作川上流部の地域的な特色として考えられるものとしては、まずN R02の甕口縁部と、壺では羽状文に代表される文様の施し方にある。次にS D03では広口口縁甕・瘤状突起を有する壺、全体的に古相を残存させる有段高杯とその影響と思われる脚部横線文の多用を加えておきたい。なおパレス壺・器台・内彎口縁を有する各種の中型壺は基本的に欠損し、地域的な様式を表しているものと考えられる。



第11図 動物型土製品 (1:2)

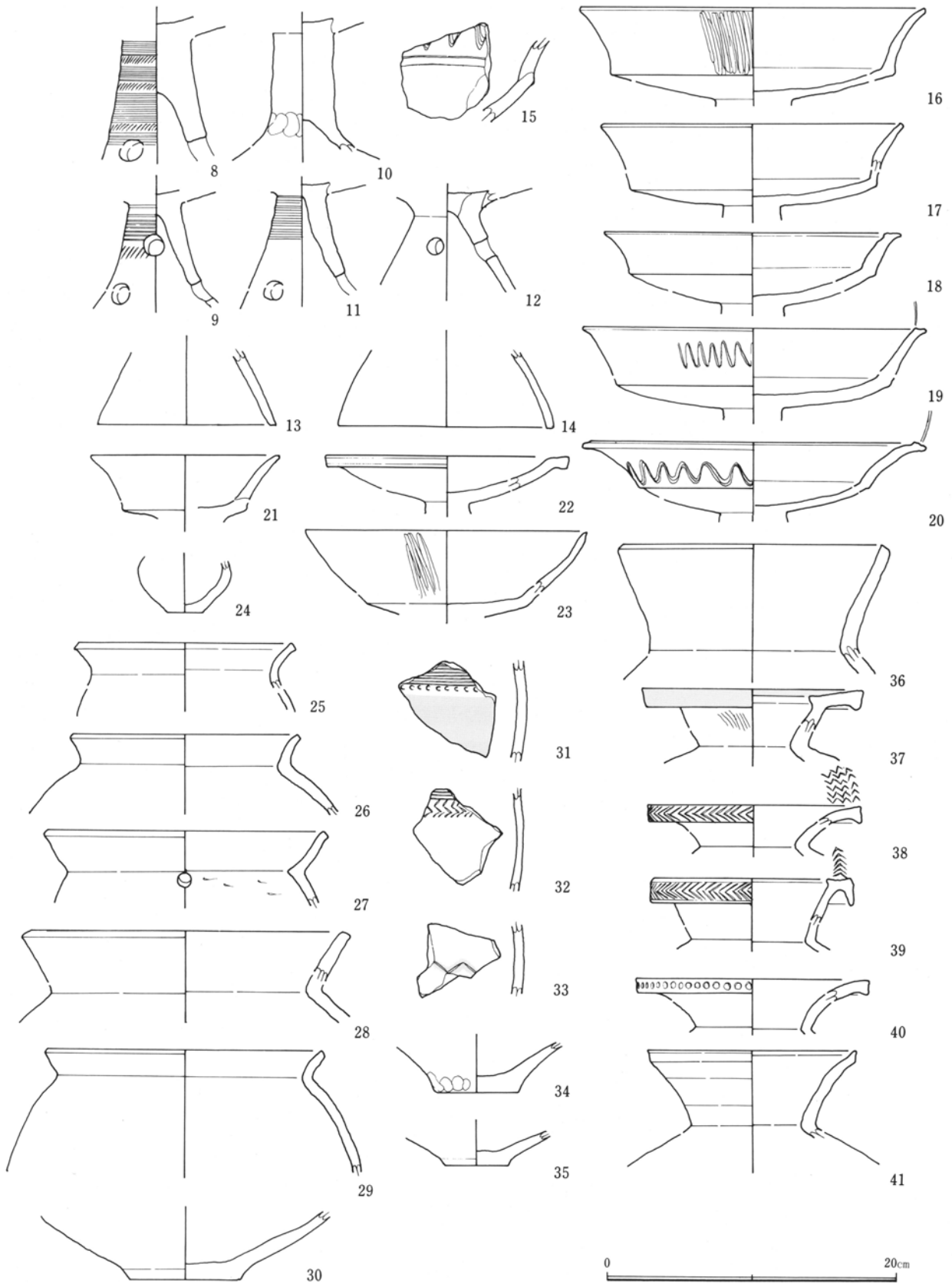
その他の遺物

105はN R02上層より出土した須恵器杯蓋で、口径15.6cm・器高4.7cmを測る。6世紀前葉の形態を留める。106は口径21.7cmの縄文晩期の鉢で、N R01上層より出土した。107は91A区北側で出土した石鏃。有茎5角形を呈し、鏃長35mm・幅16mm・厚さ4mm、チャート。108は90区で出土した縦長剝片。上部に加工痕があり石鏃の未製品とも考えられる。チャート製で下部を欠損。



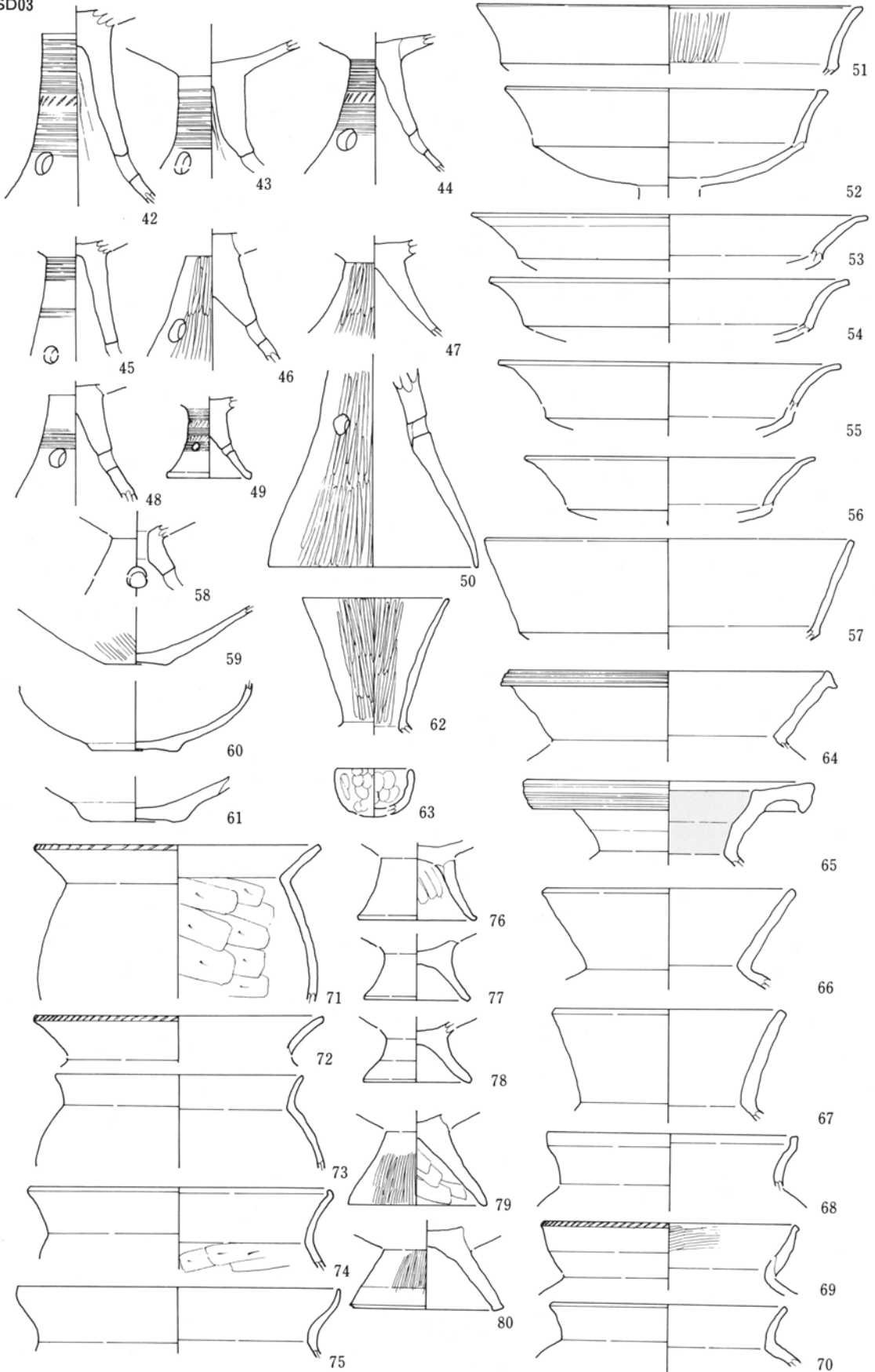
第12図 その他の遺物

NR02



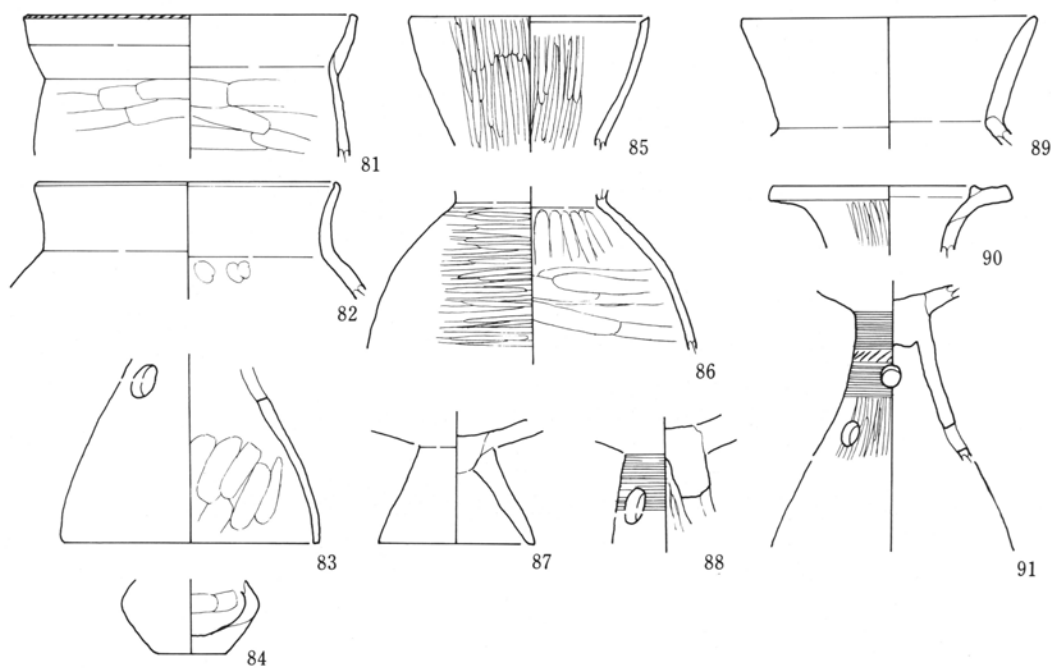
第13図 NR02 出土土器 (1:4)

SD03

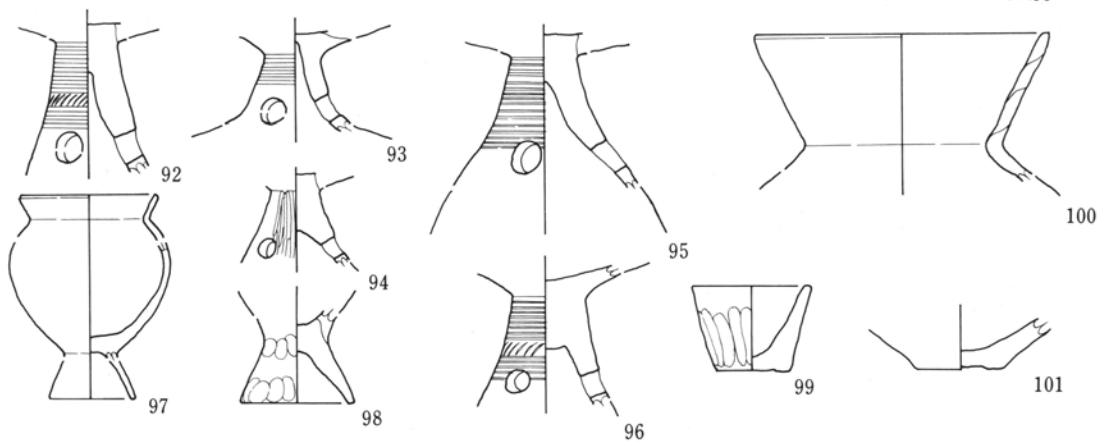


第14図 SD03 出土土器 (1:4)

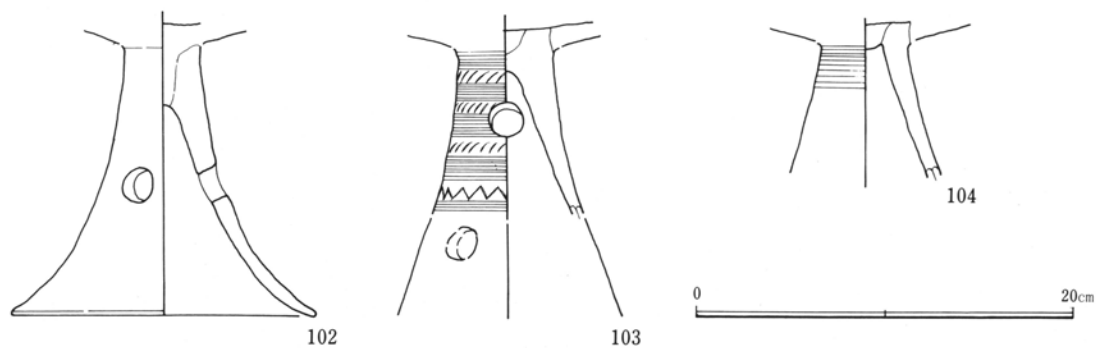
NR01



SK06



SD08



第15图 NR01·SD05·SD08 出土土器 (1:4)

### 3 室町時代

#### SK01・SK02・SK03（第16図）

S B01東に接して検出された土坑内より比較的まとまって灰釉系陶器が出土している。検出された遺構の重複関係に基づくと、SK03にはこの内では古い様相のものが認められる。椀は直線的に外傾するものが多く、端部には明確な面取りを行なうものが多数を占める。底部は剝落した高台痕が目立ち、明確に高台を残す資料はSK03の110一点である。胎土には砂粒が多く、長石粒の噴き出しが目立つ。皿は128以外は全て同一の器形で、大きな底部から屈曲して小さく外反する口縁部をもつ。ヨコナデによる段が残るものも存在する。端部は明瞭な面を整える資料が多い。なお底径が5cm前後のもので、器高が2cm以下が多数を占める。椀と皿はほとんどが瀬戸地域における生産物と考えられ、東濃産は認められない。

118・119・140・141は陶丸で、加工円盤は認められない。147は球体に小孔を穿つ陶錘。138は鉢口縁部で、端部が肥厚し、丸みをもち1条の沈線が施されてるこの時期通有の特色を留めるものである。139は常滑産の甕で、口径23.5cmを測り、N字状の玉縁口縁となる。113・127は土師器皿の底部で、両者は糸切底であるが、113は突出底状を呈する。145・146は土師器皿で糸切底。142は「伊勢型鍋」で、内彎折り返し口縁をもつものである。新田分類6類に相当しよう。全体として甕以外は瀬戸産の灰釉系陶器のみで占められ、藤澤編年の「山茶碗第Ⅳ段階」に所属する資料と考えられる。

#### SK04（第17図 172～176）

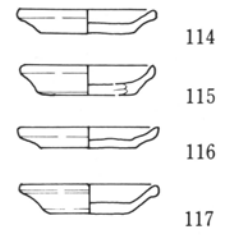
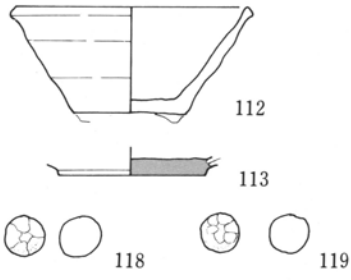
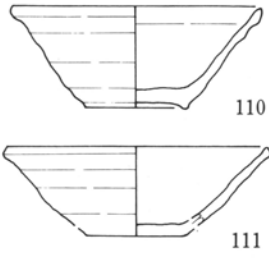
172は口径13.2cm・器高4.8cmで、無高台の椀。175は皿で、両者は瀬戸産と考えられるが、173は東濃Ⅲ期に所属する精製椀。器壁が薄く大きく外傾する東濃産。174は土師器椀で、口径11.7cm・器高3.7cmを測る。なお底部には糸切痕跡が残る。176は椀の重ね焼き状態の資料で、古窯跡から多く出土する資料と同様なものである。ただ外面には2次的な加工と思われる打ち掻き痕が認められる。

#### SB01（第17図 154・155・156・158・159）

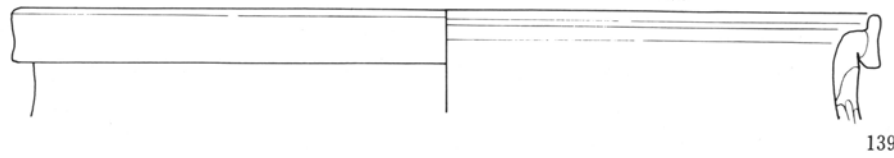
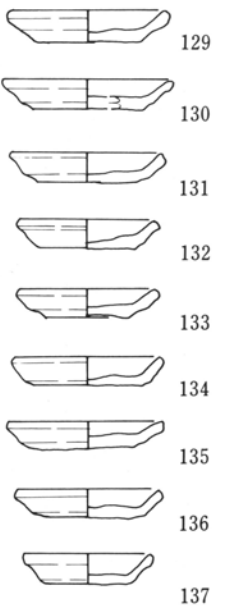
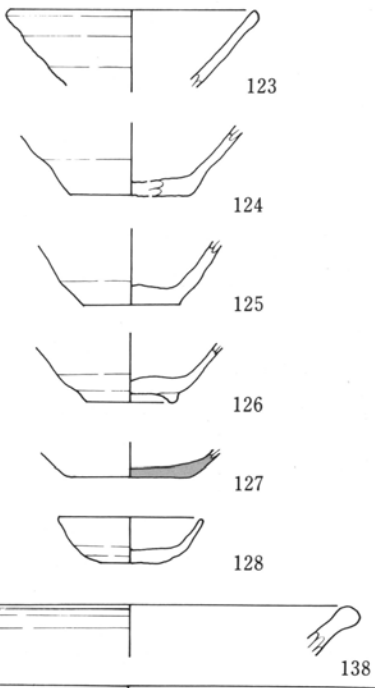
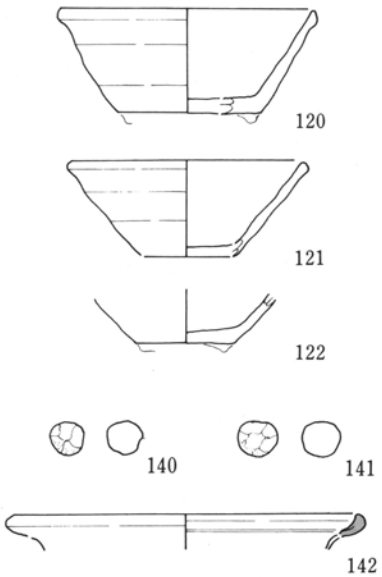
154・155はSB01東柱列北第4柱穴より出土した資料で、無高台で大きく外傾した形状を見せ、端部は肥厚する椀。156も同様な灰釉系椀で、北柱列東第2柱穴から出土している。158・159は東柱列北第2柱穴から出土し、159は常滑産甕底部。以上の資料からSB01は藤澤編年第Ⅳ段階に所属するものと考えられよう。

総合すると、土師器・甕を除くと一部の資料以外は全て瀬戸産と考えられる。それは伊保遺跡の位置的な問題に還元できるようなのであるが、濃尾平野における14世紀代の東濃産の圧倒的流入現象とは大きく異なる。また土師器の形態も異にすると考えてよい。しかし鍋は伊勢型が広く使用されていることは変わりがない。灰釉系椀の特色から14世紀中葉から後葉にかけてに中心を置く時期を想定できる。

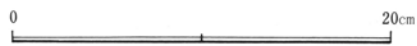
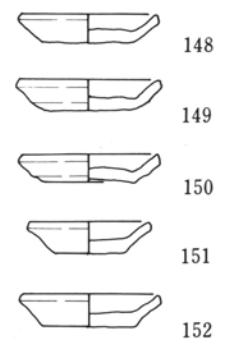
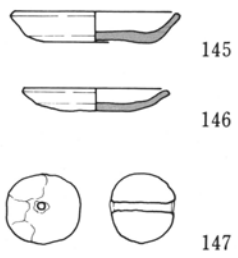
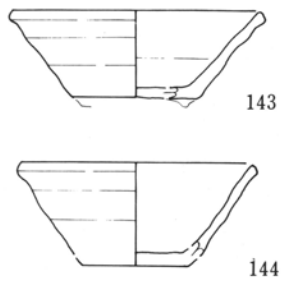
SK03



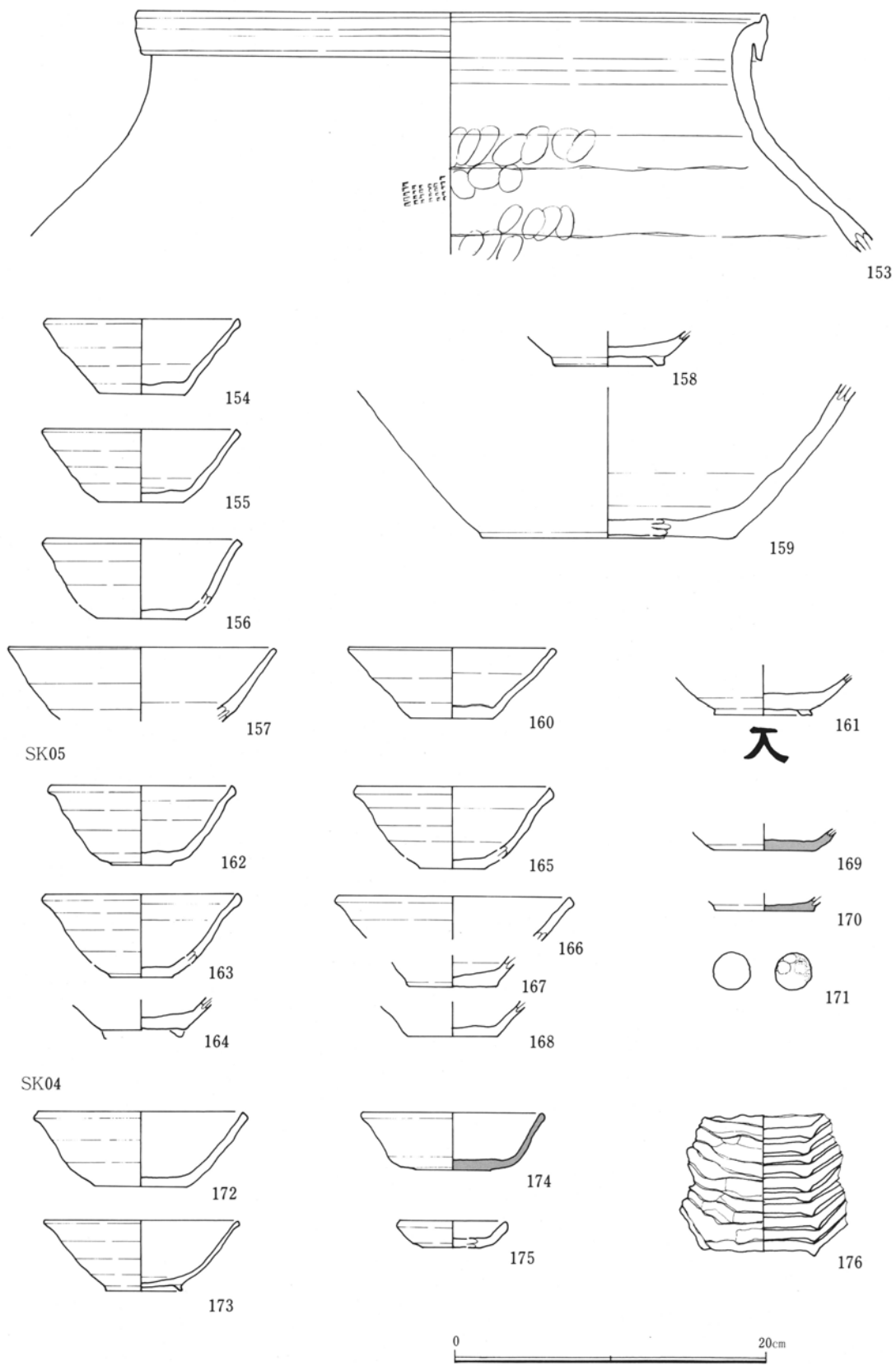
SK02



SK01



第16図 SK03・SK02・SK01 出土土器(1:4)



第17図 SK05・SK04 他出土土器（1：4）

## IV まとめ

### 調査成果

今回の調査において以下の結果を得ることができた。

- 1 今回新たに90区北側にて尖頭器等の出土が見られた。明確な遺構は確認できていないが、径5 cm以内の範囲で石器の分布が確認でき、さらに尖頭器4点の内1点は東内野型尖頭器で県内初例となった。
- 2 従来の伊保遺跡出土遺物からは、古墳時代初頭（廻間Ⅰ式期併行）から始まる遺跡であるという認識であったが、今回の調査区より弥生時代後期（山中式後期併行）の遺物がSD08周辺から出土し、遺跡の開始時期が若干遡ることとなった。
- 3 遺物の中心は古墳時代初頭、濃尾平野における廻間Ⅰ式前半期併行にあり、従来の柵口地区出土土器（廻間Ⅱ式期併行）との間にやや開きが見られる。それは遺跡内での地区別の主要遺構の消長を表わすものと思われる。
- 4 調査区内では古墳時代初頭を中心とした遺構は極めて希薄であり、また出土遺物のほとんどが自然流路状の2次的な堆積土からであった。したがって今回の調査区は遺跡の東端に相当するものと推定することができる。
- 5 昭和44・45年調査では、柵口地区以外から古墳時代後期の遺構・遺物が多く発見されているが、今回は確認できていない。
- 6 91B区より柱根が残存する掘立柱建物1棟と各種の土坑が検出された。これらは出土遺物より14世紀後半の室町時代初頭に中心を置く遺構群である。根川古墳群が存在する丘陵部下に当該期の集落遺跡の展開を類推させるものである。
- 7 91B区遺構内より出土した灰釉系陶器は、一部の器形を除き全て瀬戸産の椀・皿を中心とするものであった。これは濃尾平野の14世紀における東濃産の圧倒的流入と大きく異なるものである。

ませぐち

### 柵口地区溝状遺構と伊保遺跡概観

伊保遺跡を全国的に著名にしているものは、柵口地区溝状遺構出土のタタキ甕であろう。そこでここでは今回の伊保遺跡の調査成果を踏まえて、伊保遺跡全体の集落景観をまずは推定してみたい。ただしタタキ甕を初めとする第1次調査資料は公開されておらず、詳細な検討は不可能な状況である。



## 1 伊保遺跡における古墳時代時期区分とその性格

出土遺物によって大きく3つに区分できる。

**A期** 濃尾平野における山中式後期から廻間Ⅰ式期に併行する時期。遺構としては今回のNR01・02、第1次の四反田地区5・6・7・20号住居、六反田地区包含層等がある。遺構の広がりには最も広く、ほぼ遺跡全域にわたって遺物が分布する。集落の中心は確認できていないが、今回の調査区のNR01の在り方から、現在の東保見集落を中心とする丘陵裾部である可能性が高い。

**B期** 廻間Ⅱ式併行期である3世紀後半の時代。遺構としては柵口地区溝状遺構に代表され、その他に同地区井戸状遺構・排水路が所属しよう。遺構・遺物の確認はおおむね伊保遺跡内では柵口地区周辺に限定される。伊保堂川上流である東保見集落から東保見団地に向かう谷地形を主要な生産域とした集落景観が推定できる。

**C期** 5世紀末から6世紀前半期にかけての時期。遺構としては四反田地区の各住居を始め六反田地区では埴輪の出土が見られる。おおむね伊保堂川右岸の標高75mほどの盆地傾斜面に広く分布し、集落は伊保小学校の南を中心に展開しており、おそらくその東側である伊保堂川縁辺部には小規模な墳墓が形成されていたものと推定したい。それは須恵器系埴輪の出土に象徴されよう。なお須恵器には尾張型須恵器が見られる。

## 2 柵口地区<sup>ませぐち</sup>溝状遺構

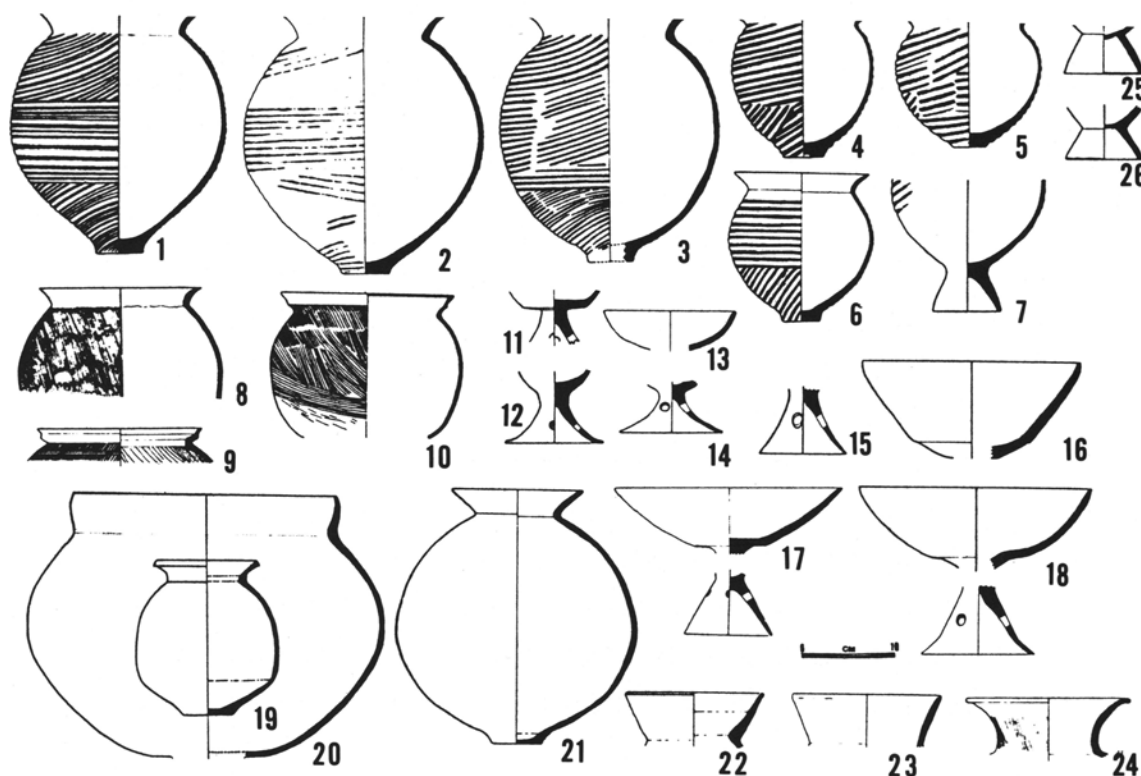
まず遺構の在り方であるが、溝状遺構は幅約1m・深さ約0.3mほどを測り、約30mにわたって東西に確認された。またその南50mほどの地点では「井戸状遺構」「排水路」が検出されている。「井戸状遺構」とされているものは木組を伴う土坑状の施設で、内部より出土したものは鋤鎌類の未製品を含めた木製品が多く、時代が異なるものの勝川遺跡等に見られる未製品貯蔵施設の可能性が高い。これらの遺構からは伊保遺跡B期に所属する資料が出土しており、集落周辺部に展開する古墳時代初頭の生産遺跡を考慮しておいてよいであろう。

溝状遺構は第2層より多くの出土遺物が見られ、その内ほぼ半数近くが甕であり、他は高杯・壺となるようである。

所属時期の問題であるが、高杯は杯部が大きく外傾し、さらに深さが低い形状を呈する。また脚部は低く直線的で「八」字状になる。こうした特徴は濃尾平野における有段高杯の変化と異なる。S字甕はB類に所属するものが図化されている。大型壺は頸部から大きく屈曲して低く開く形状を呈する。甕は平底タタキ甕が主体を占め、有段口縁甕（西三河型）・「く」字甕が混在する。こうした各形式の特徴と組み合わせは濃尾平野・東三河の土器型式と異なるものである。高杯・壺の形状からみても廻間Ⅰ式期や欠山式土器に類似点を求めることは不可能であろう。さらにその形状はこれらの形式より新しいものといわざるをえない。それはS字甕B類の存在や西三河型有段口縁甕によっても傍証できよう。やはり廻間Ⅱ式併行を考慮する必要がある。総合すると廻間Ⅱ式併行期（Ⅱ式後半期に中心

をおく庄内式末期)に位置づけておくことにしたい。東三河・西遠江の欠山式土器が、その中心を廻間Ⅰ式後半期に置くことから、その後統期に併行する土器群と考えてよからう。

土器型式の特徴としては平底タタキ甕を主体におき、直線脚有段高杯をもち、中型壺・パレス壺が欠損し、さらに器台を欠く。こうした土器組成を持つ廻間Ⅱ式併行期の当地域の土器群を「伊保柵口期(B期)」としてまずは考えておきたい。すると伊保柵口期の特徴をもつ土器が出土する範囲はおおむね矢作川中流域である岡崎市北部から豊田市にかけての西加茂郡一帯となる可能性が高い。因みに岡崎市高木遺跡30号土坑は伊保柵口期の内に位置づけて考えてもよく、少なくとも廻間Ⅱ式期においてタタキ甕が当地域内に定着していることが想定できる。ただしこうした畿内系の技法は甕のみにみられる現象であり、他の形式には認められない。つまり甕以外は矢作川流域の土器型式を基本的には踏襲した内での変化ということになる。直接的な畿内系土器の導入を論ずる前に、こうした諸点を見直す必要がある。



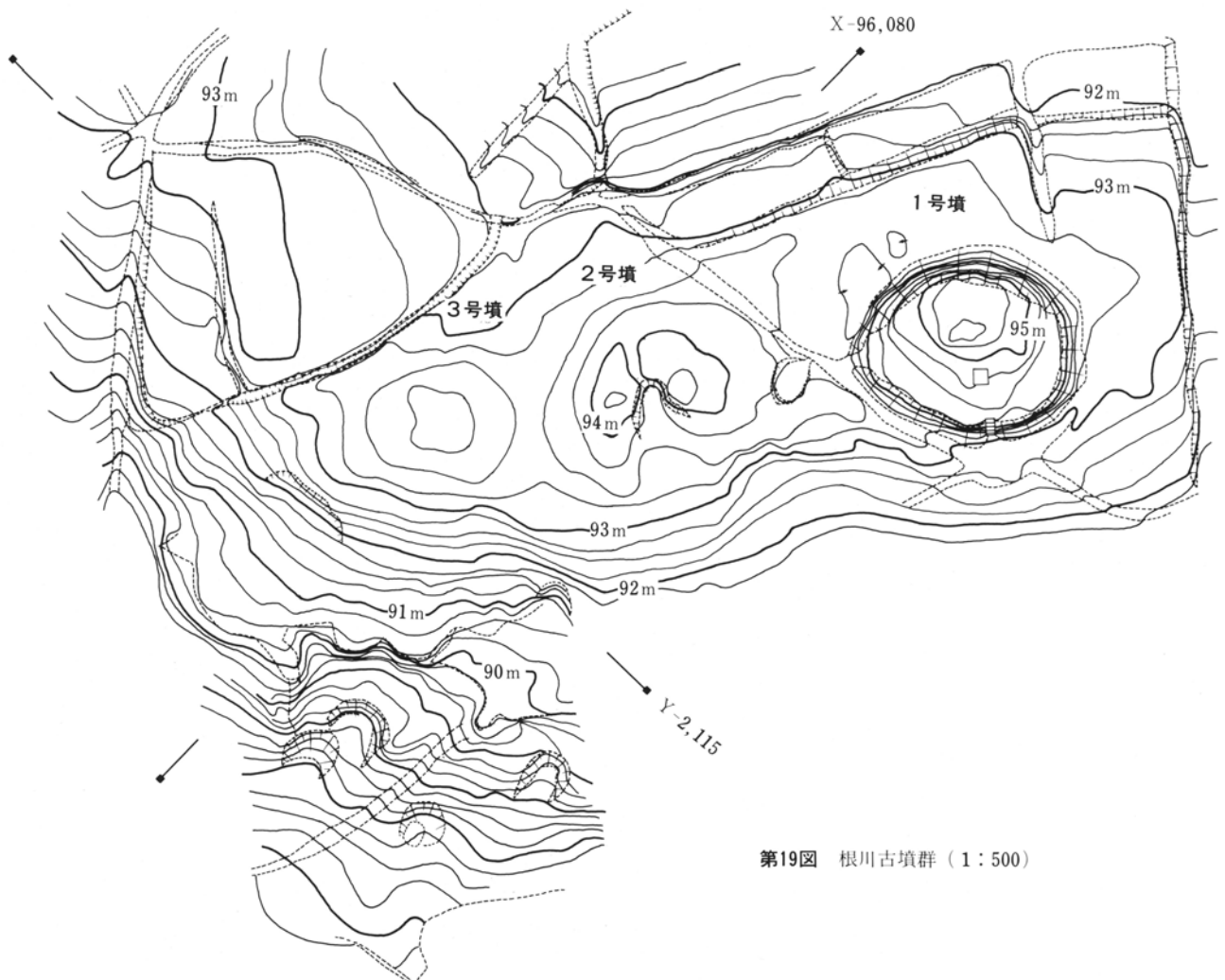
第18図 伊保柵口期(柵口地区溝状遺構出土土器、報告書より 1:8)

# 根川 3 号墳

## 調査概要

根川 3 号墳は豊田市東保見町根川に所在し、調査は県道加納東保見線建設に伴う事前調査として、1990年 6 月～ 8 月にかけて実施した。その結果、径 13m ほどの円墳である根川 3 号墳の存在を確認することができた。なお東に所在する根川古墳（根川 1 号墳）は早くからその存在が知られており、明治 18 年に勾玉・管玉・剣・鉄鏃・馬具・須恵器の出土が報告されている。現状では径 16m ほどの円墳状を呈し、埴輪片が散在している。しかしながら墳丘裾部は後世の改変をうけており正確な形状を留めているとは考えられないのであり、南斜面の状況からはむしろ西側の 2 号墳を含めて前方後円墳の可能性も否定できない。すると墳丘長 40m の規模を想定することも可能である。なお 2 号墳は東西 18m ほどを測り、中央部には盗掘穴を確認できる。

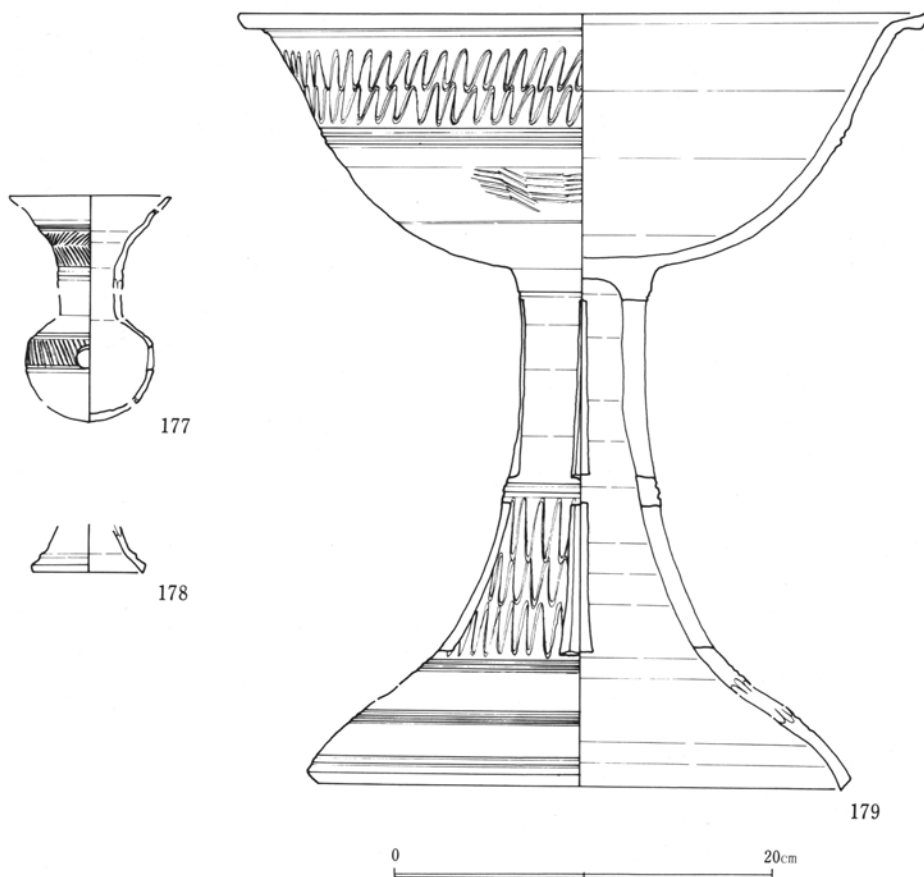
根川 3 号墳が所在する丘陵下には伊保遺跡が広がり、その比高差は約 20m を測る。北には江古山遺跡ほか数基の古墳が点在している（第 3 図）。



第19図 根川古墳群（1：500）

## 根川 3 号墳

根川古墳（根川 1 号墳）の西に所在する古墳で、墳丘の流出が著しく、残存状況は極めて悪い。調査成果によれば、径13mほどの円墳と考えることができる。西側では幅3m・深さ0.3mの堀割り状の遺構が弧状に6mほど検出された。これを墳丘の西裾部とすると、現状では1mほどの高さを留めるのみとなる。墳丘は地山を成形して整えるのではなく、ほぼ盛土で構成されている。内部構造を知る手掛かりはなく、すでに消失したものと考えられる。ただ墳丘北斜面において小規模な土壌SX01を確認することができた。長さ1.2m・幅0.6mの長方形状を呈し、深さ0.3mを測る。検出面より0.2mほどで土壌全体に粘土・炭化物層の船底状の広がりが見られた。出土遺物は認められない。その他の遺物の出土としては、北東斜面から10m×4mにわたって土器細片の分布が見られた。極めて細かく砕かれており、後世の開墾等による攪乱を想定することもできようが、むしろ意図的な破棄行為を類推することも可能である。器台・椀・壺・高杯が確認でき、その内図化できたものは第20図である。179は器台で、脚部の一部を除いてほぼ全形を復元できた資料である。高さ41cmを測り、口径36cm・底径28cm。大きく開いた杯部にやや細く大きく開く脚部がつけられており、脚部には2段4方透孔が穿たれる。杯部には2段の波状文が施され、端部は側方に拡張し、平坦部をつくる。脚部には下段に3段の波状文が施された文様区画が残る。椀は小型品で、口径部は細く大きく口縁に向かって外反する。頸部と体部には刺突文が施される。こうした形状は6世紀中葉段階の須恵器にその特徴を見ることができ、3号墳の造営をその時点に求めることができよう。

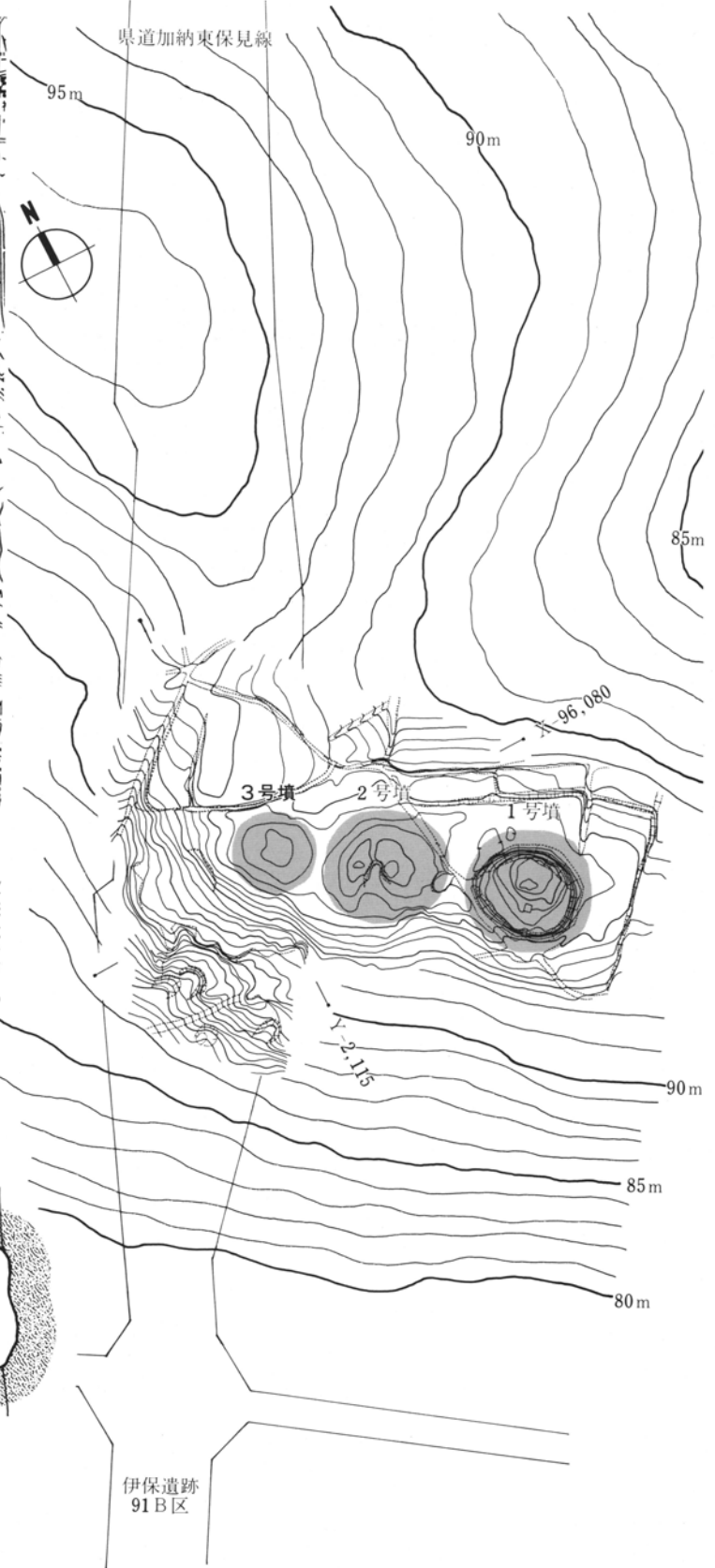


第20図 根川 3 号墳出土須恵器（1：4）

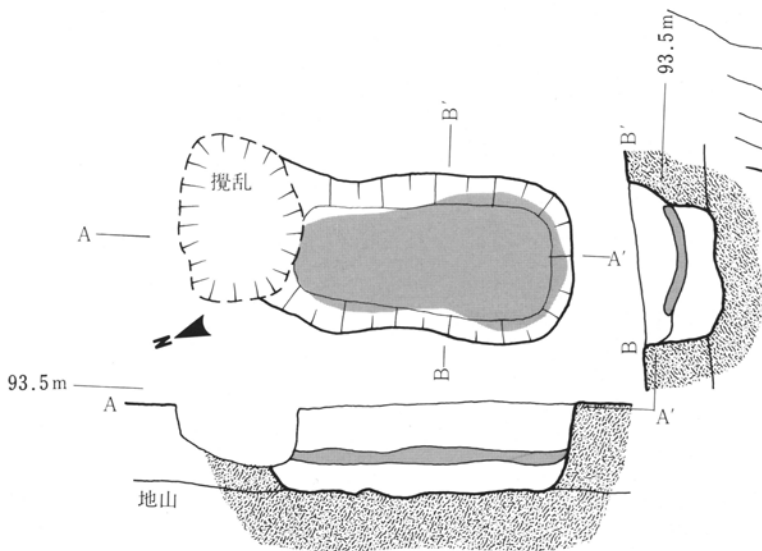
根川3号墳



第21図 根川古墳群位置図 (1:25000)



第23図 調査区位置図 (1:1000)



第22図 SX01 (1:30)

## 別表

## 遺構一覧

遺構番号	登録番号	大きさ	備考
SB01	91B区 SB01		3間×(3間)以上
SK01	91B区 SK01	1m×1m 深0.46m	内部に円形Pit
SK02	91B区 SE01	0.9m×0.85m 深0.25m	
SK03	91B区 SX01	3.2m×2.6m 深0.21m	
SK04	91B区 SB02	4.8m 深0.14m	
SK05	91B区 SB03	4.5m 深0.06m	
SK06	90区 SD05	— 深0.25m	
SD01	90区 SD01	幅0.9~0.6m 深0.20m	L字に屈曲
SD02	90区 SD02	幅1.2m 深0.11m	
SD03	90区 SD03	幅1.0m 深0.10m	
SD04	90区 SD04	— 深0.10m	
SD05	—	幅0.7~0.5m 深0.05m	L字に屈曲
SD06	90区 SD06	幅4.5~4.0m 深0.90m	
SD07	—	幅1.2m 深0.25m	L字に屈曲
SD08	90区 SD08	幅0.5m 深0.15m	
SD09	—	幅0.7~0.4m 深0.11m	
SD10	—	幅0.6m 深0.25m	
SD11	—	幅1.8m 深0.60m	
NR01	90区 NR01	幅46~50m 深0.50m	
NR02	90区 NR02	—	
NR03	91A区 NR01	幅6.0m 深1.80m	

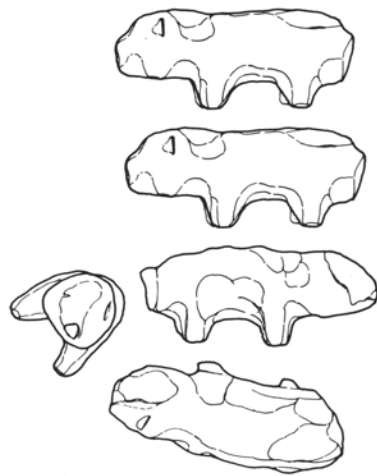
## 挿図掲載遺物一覧

No.	登録番号	器種	口径cm	器高cm	底径cm	備考
1	S_7	尖頭器	3.8	3.1		チャート
2	S_1	尖頭器	4.3	2.8		チャート
3	S_3	尖頭器	6.1	2.1		チャート
4	S_2	尖頭器	5.4	2.3		チャート
5	S_6	剝片	(3.9)	2.6		チャート
6	S_5	剝片	(2.3)	2.3		チャート
7	E_203	動物型土製品	6.3	2.6		NR01上層
8	E_166	高杯				
9	E_168	高杯				
10	E_167	高杯				
11	E_169	高杯				
12	E_171	高杯				
13	E_173	高杯			12.5	
14	E_174	高杯			14.8	
15	E_170	高杯				口縁外面波状文
16	E_189	高杯	12.2			杯部外面ミガキ
17	E_181	高杯	10.4			
18	E_193	高杯	18.6			口縁端部に面
19	E_190	高杯	23			口縁外面波状文・
20	E_192	高杯	23			端部1条擬凹線
21	E_175	小型高杯	13.2			口縁波状文・端部
22	E_176	器台	17.0			1条擬凹線
23	E_199	高杯	19			
24	E_184	小型壺				
25	E_182	甕	14.8			
26	E_179	甕		16		
27	E_180	甕		19.4		
28	E_177	甕		21.8		
29	E_178	甕		18.2		
30	E_183	壺				外面ミガキ
31	E_185	壺				体部下位赤彩
32	E_186	壺				
33	E_200	壺				赤彩波線文
34	E_201	底部			5.5	
35	E_191	底部			4.5	
36	E_194	壺	9.5			
37	E_195	壺	15.6			口縁端部赤彩
38	E_196	壺	14.5			
39	E_198	壺	13.8			
40	E_197	壺	17			口縁端部竹管文
41	E_172	壺	14.5			口頸部高5cm
42	E_106	高杯				
43	E_108	高杯				
44	E_105	高杯				
45	E_100	高杯				
46	E_103	高杯				
47	E_101	高杯				
48	E_102	高杯				
49	E_107	小型高杯				脚高4.5cm
50	E_109	高杯				脚部径14cm

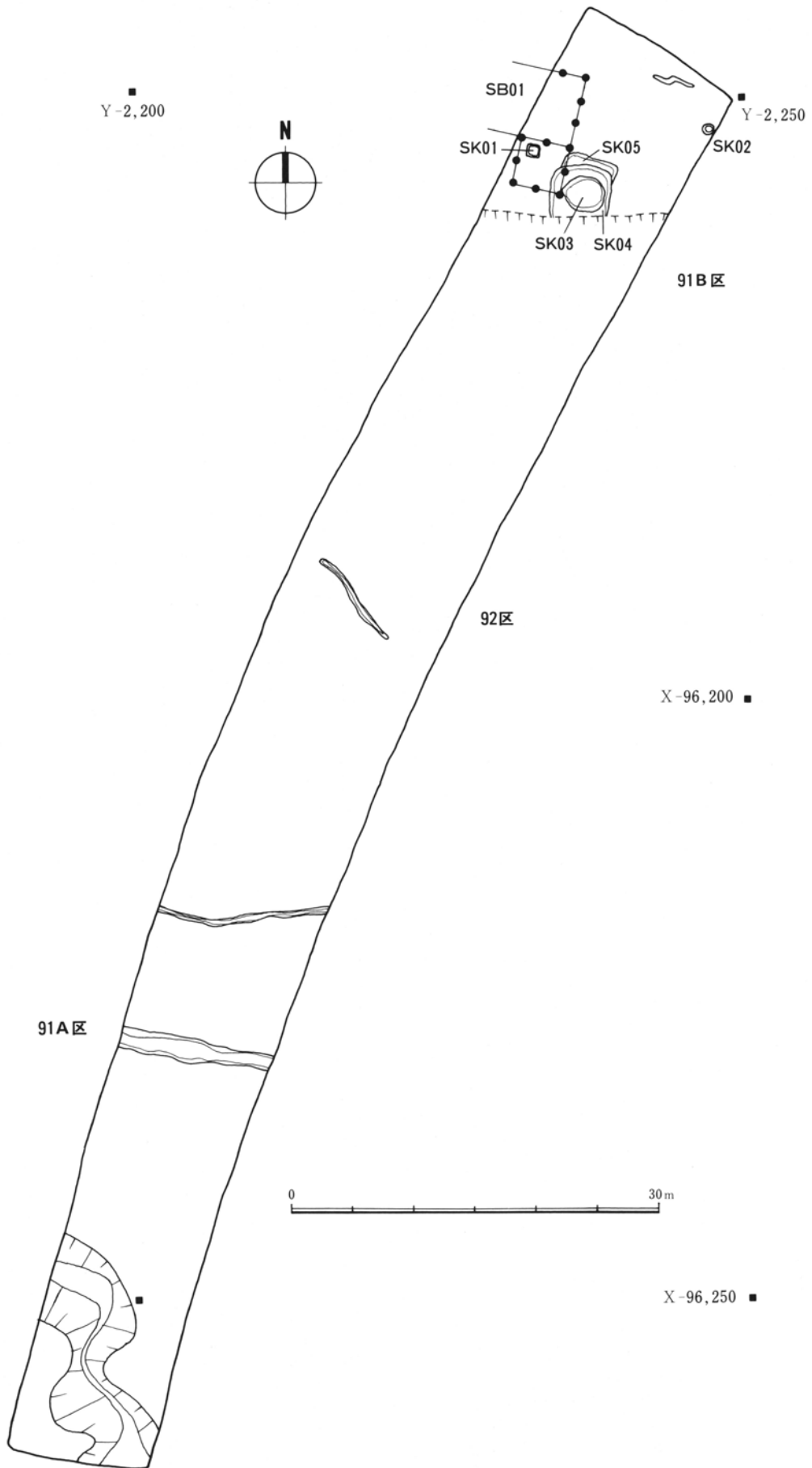
別表

No.	登録番号	器種	口径cm	器高cm	底径cm	備考	No.	登録番号	器種	口径cm	器高cm	底径cm	備考
51	E_110	高杯	26.6				116	E_35	灰釉系皿	7.8	1.2	5	
52	E_111	高杯					117	E_36	灰釉系皿	7.6	1.6	4.3	
53	E_112	高杯	27				118	E_71	陶丸	2			
54	E_113	高杯	24.6				119	E_42	陶丸	2			
55	E_115	高杯	23.6				120	E_30	灰釉系碗	13.6	5.5	7.5	剝落高台
56	E_116	高杯	20				121	E_33	灰釉系碗	13	5	5	
57	E_114	高杯	25.4				122	E_63	灰釉系碗			5.3	
58	E_104	器台					123	E_32	灰釉系碗	13.6			
59	E_124	底部			4.5		124	E_62	灰釉系碗			6.5	
60	E_126	壺			6.0		125	E_31	灰釉系碗			5.2	
61	E_127	壺			6.0		126	E_64	灰釉系碗			5.4	
62	E_128	長頸壺	10			口頸部高8.5cm	127	E_65	土師器			6	底部糸切り
63	E_129	小型鉢	5.2	(3.3)		手づくね	128	E_68	灰釉系皿	7.6	2.3	3	
64	E_117	広口壺	21.5			口頸部高4.7cm	129	E_24	灰釉系皿	8.6	1.8	5	
65	E_118	広口壺	20			口頸部高5cm・赤彩有	130	E_26	灰釉系皿	9.2	1.6	5.8	
66	E_119	広口壺	17			口頸部高5.4cm	131	E_25	灰釉系皿	8	1.6	5	
67	E_120	広口壺	16			口頸部高6.5cm	132	E_20	灰釉系皿	8	1.5	5	
68	E_121	有段甕	17.2				133	E_21	灰釉系皿	8	1.5	4.5	
69	E_122	甕	17.6			端部刺突文	134	E_22	灰釉系皿	8	1.5	5.5	
70	E_123	甕	16.2				135	E_23	灰釉系皿	8	1.5	5	
71	E_130	甕	19.6			端部刺突文	136	E_27	灰釉系皿	7.6	1.6	1.5	
72	E_131	甕	19.8			端部刺突文	137	E_19	灰釉系皿	7.4	1.6	1.6	
73	E_132	甕	15.8				138	E_66	灰釉系鉢	23.5			
74	E_133	鉢	20				139	E_34	灰釉系甕	46.8			
75	E_134	甕	22				140	E_28	陶丸	1.8			
76	E_135	甕台部				台部底径8.2cm	141	E_29	陶丸	2			
77	E_136	甕台部				台部底径7.2cm	142	E_67	土師器鍋	18			伊勢型
78	E_137	甕台部				台部底径7.4cm	143	E_56	灰釉系碗	13	4.6	6.2	剝落高台
79	E_138	甕台部				台部底径9.6cm	144	E_58	灰釉系碗	12			
80	E_139	甕台部				台部底径10.6cm	145	E_50	土師器皿	9.2	1.6	6	底部糸切り
81	E_142	甕	18			端部刺突文	146	E_49	土師器皿	8	1.2	4	底部糸切り
82	E_149	甕	16				147	E_57	陶鍾	3.8			
83	E_143	高杯			14		148	E_54	灰釉系皿	7.6	1.5	4.8	
84	E_152	小型壺					149	E_55	灰釉系皿	8	1.7	5	
85	E_144	内彎直口壺	13			口頸部高7cm	150	E_53	灰釉系皿	7.8	1.5	5	
86	E_145	壺				E_144の体部か	151	E_52	灰釉系皿	6.8	1.7	3.8	
87	E_151	甕台部				台部底径8.4cm	152	E_51	灰釉系皿	7.8	1.7	5	
88	E_146	高杯					153	E_4	灰釉系甕	40.6			
89	E_148	広口壺	16			口頸部高5.5cm	154	E_5	灰釉系碗	12.5	4.8	5.5	
90	E_150	広口壺	12.8			円形浮文	155	E_6	灰釉系碗	12.5	4.7	5.4	
91	E_147	高杯				上段1穿孔	156	E_8	灰釉系碗	13			
92	E_153	高杯					157	E_7	灰釉系碗	17.6			
93	E_154	高杯					158	E_9	灰釉系碗			7.3	
94	E_157	高杯					159	E_10	灰釉系甕			16.4	
95	E_155	高杯				内彎脚	160	E_11	灰釉系碗	13.2	4.5	5.2	
96	E_159	高杯					161	E_18	灰釉系碗			6	墨書
97	E_156	小型甕					162	E_12	灰釉系碗	11.7	5.1	4	
98	E_158	甕台部					163	E_14	灰釉系碗	12.3			
99	E_160	小型鉢	6.2	4.5			164	E_16	灰釉系碗			5.5	剝落高台
100	E_161	広口壺	15.5			口頸部高6cm	165	E_15	灰釉系碗	12.5			
101	E_162	壺底部					166	E_13	灰釉系碗	15.8			
102	E_162	高杯			16		167	E_17	灰釉系碗			6	
103	E_164	高杯				上段1穿孔	168	E_60	灰釉系碗			5.7	
104	E_165	高杯					169	E_69	土師器			6.2	底部糸切り
105	E_72	杯蓋	15.6	4.7		須恵器	170	E_61	土師器			6.2	底部糸切り
106	E_202	鉢	21.7			縄文土器	171	E_59	陶丸	2.2			
107	S_9	石鏝	3.6	1.6		チャート・有茎	172	E_47	灰釉系碗	13.2	4.8	5.8	
108	S_8	剝片				チャート・石鏝未製品	173	E_45	灰釉系碗	12.9	4.5	4.8	東濃産
110	E_39	灰釉系碗	13.5	5.5	5.4		174	E_46	灰釉系碗	11.7	3.7	4.9	
111	E_40	灰釉系碗	13.7	(5)			175	E_43	灰釉系皿	8.4	1.7	4	
112	E_41	灰釉系碗	12.2	5.7	6.0	剝落高台	176	E_44	灰釉系碗				重焼跡再加工品
113	E_70	土師器			7.8	底部糸切り	177	E_2	須恵器				
114	E_37	灰釉系皿	7.6	1.3	5		178	E_3	須恵器高杯			6	
115	E_38	灰釉系皿	7.4	1.6	5		179	E_1	須恵器器台	37	41	28	

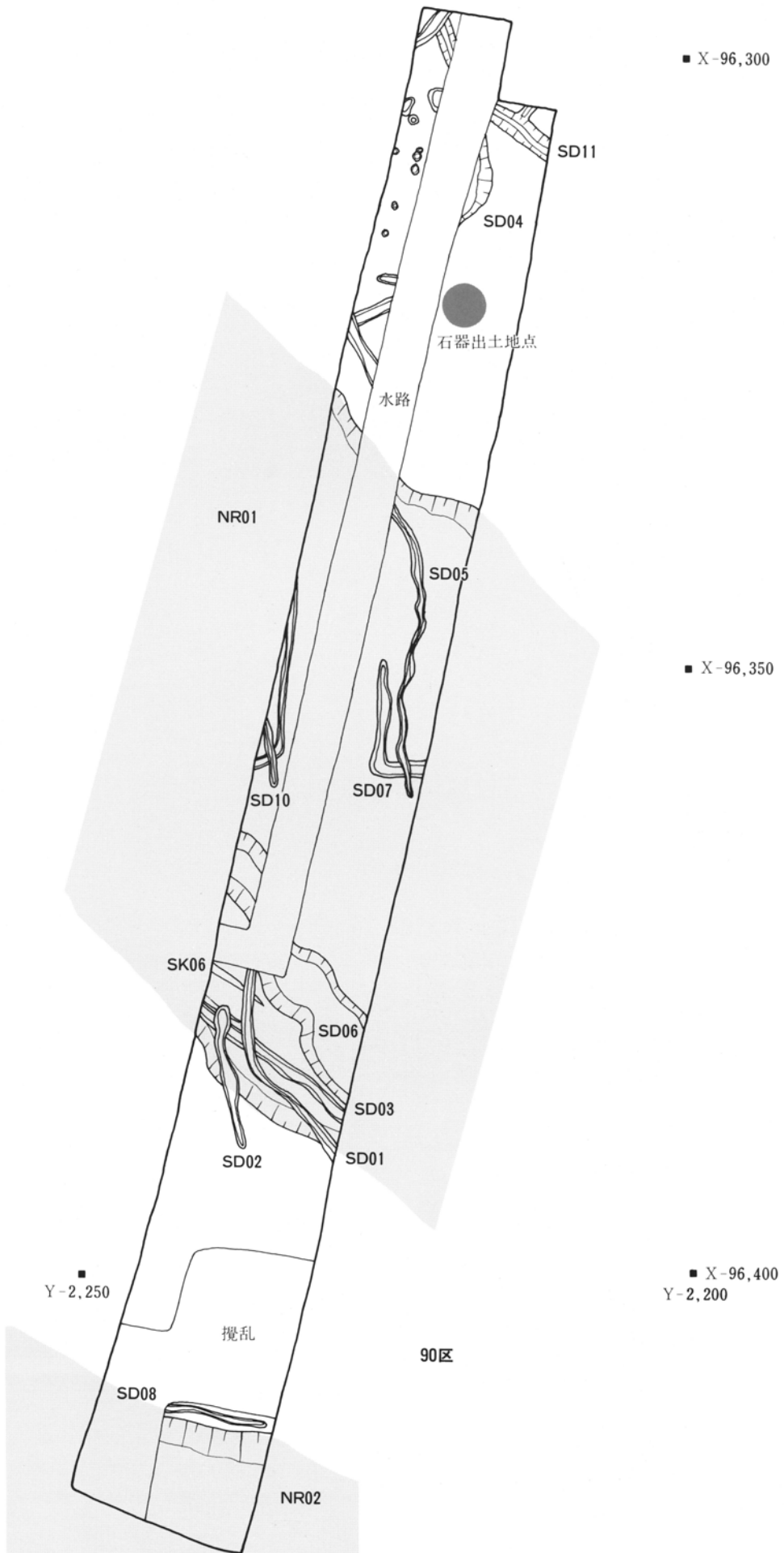
# 図 版







図版1 伊保遺跡主要遺構 1:500





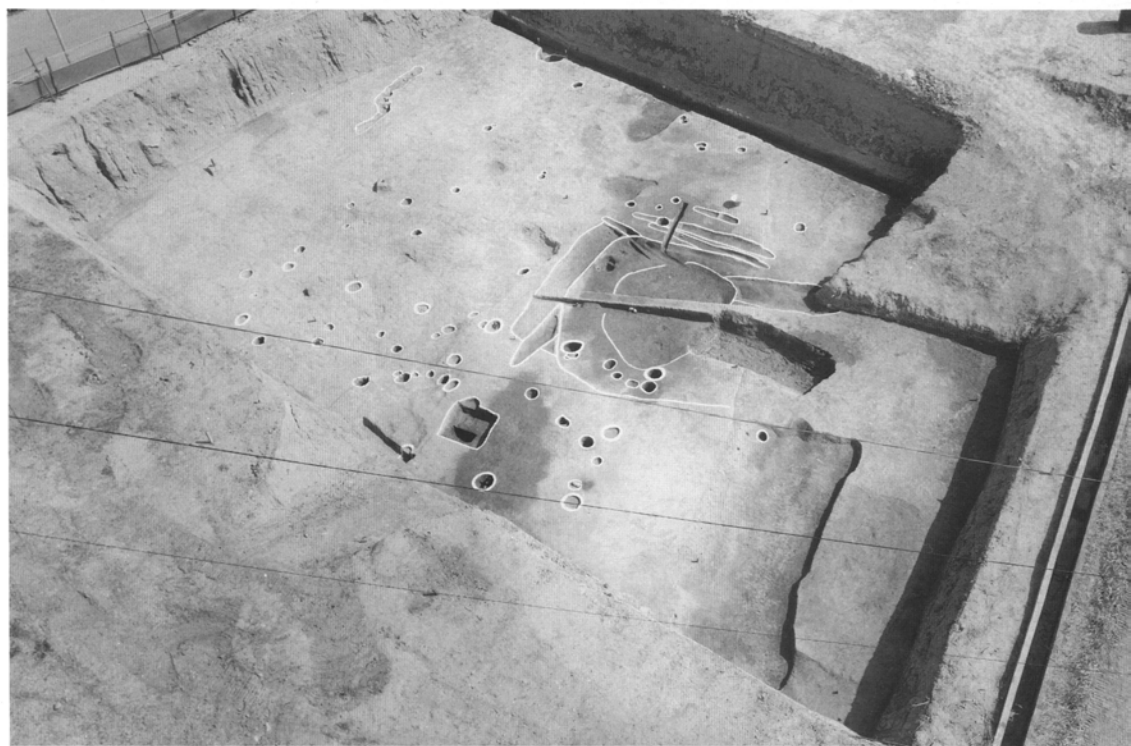
90区



90区 NR02 (西から)



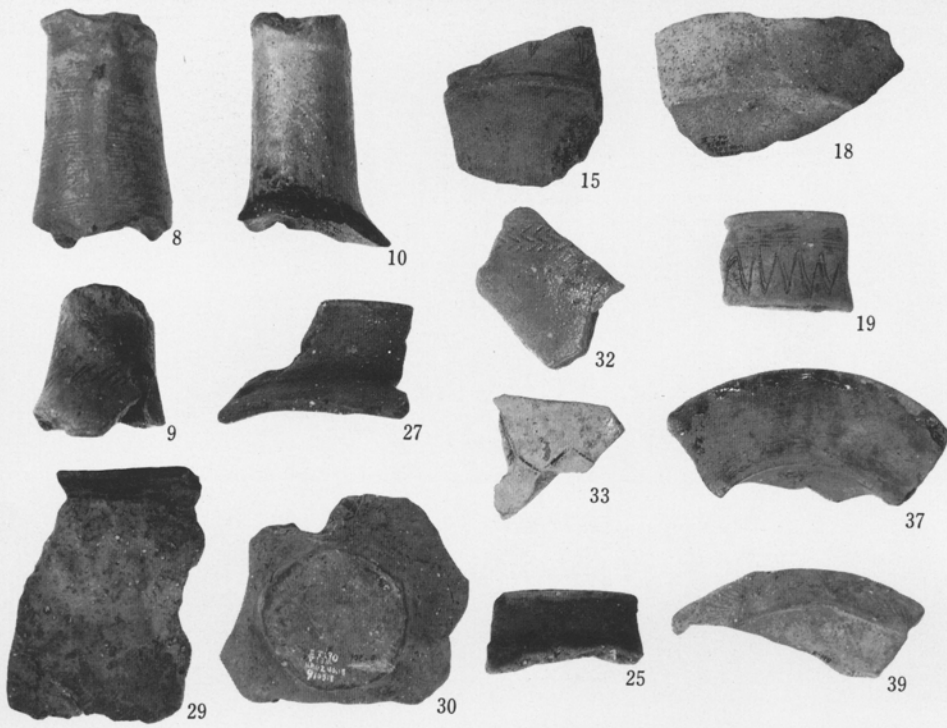
90区 SD03  
(南から)



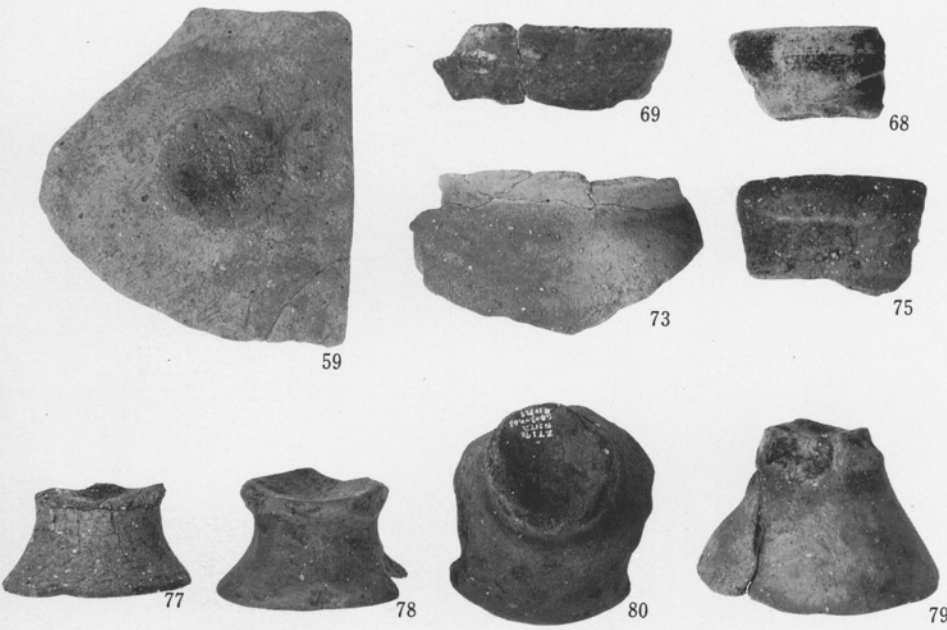
91A区 NR03  
(西から)



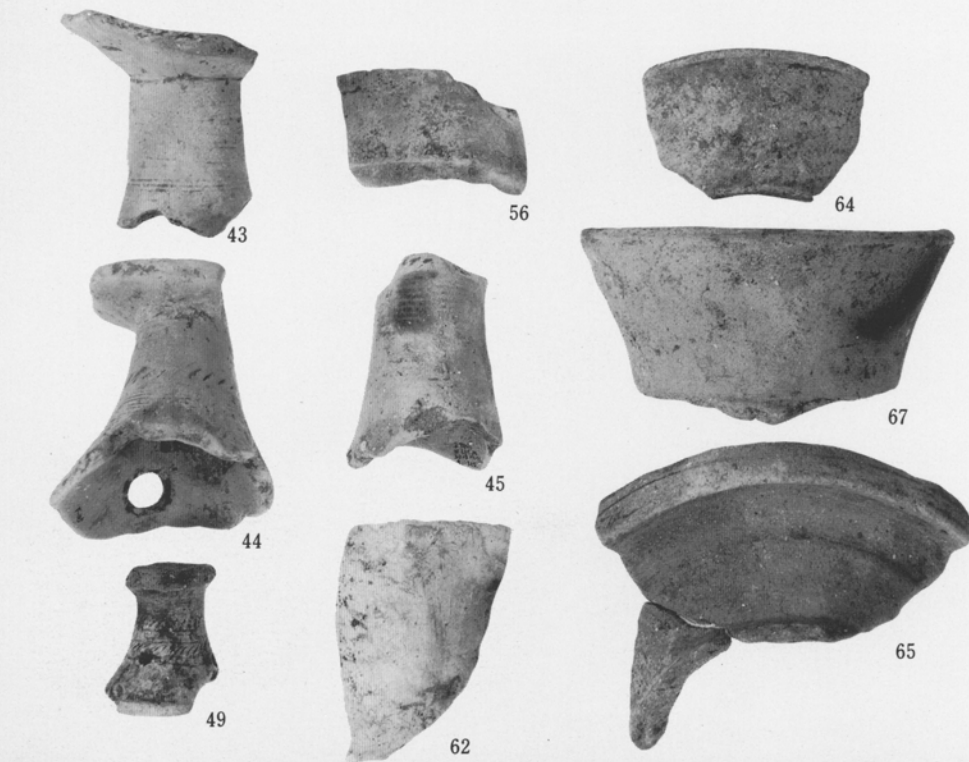
NR02



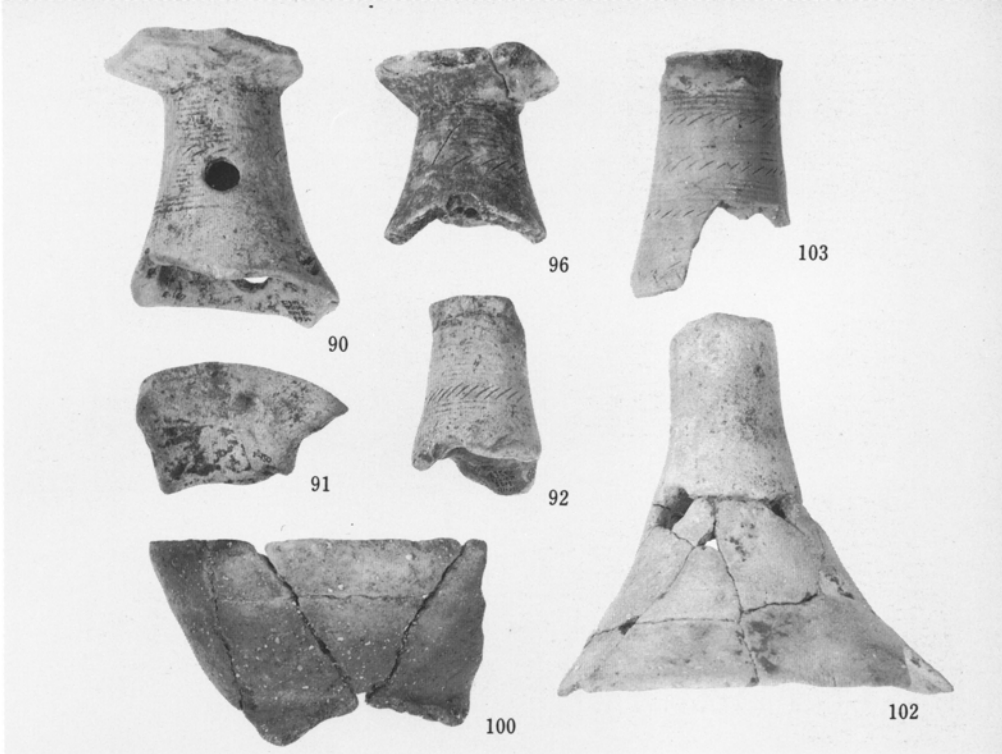
SD03



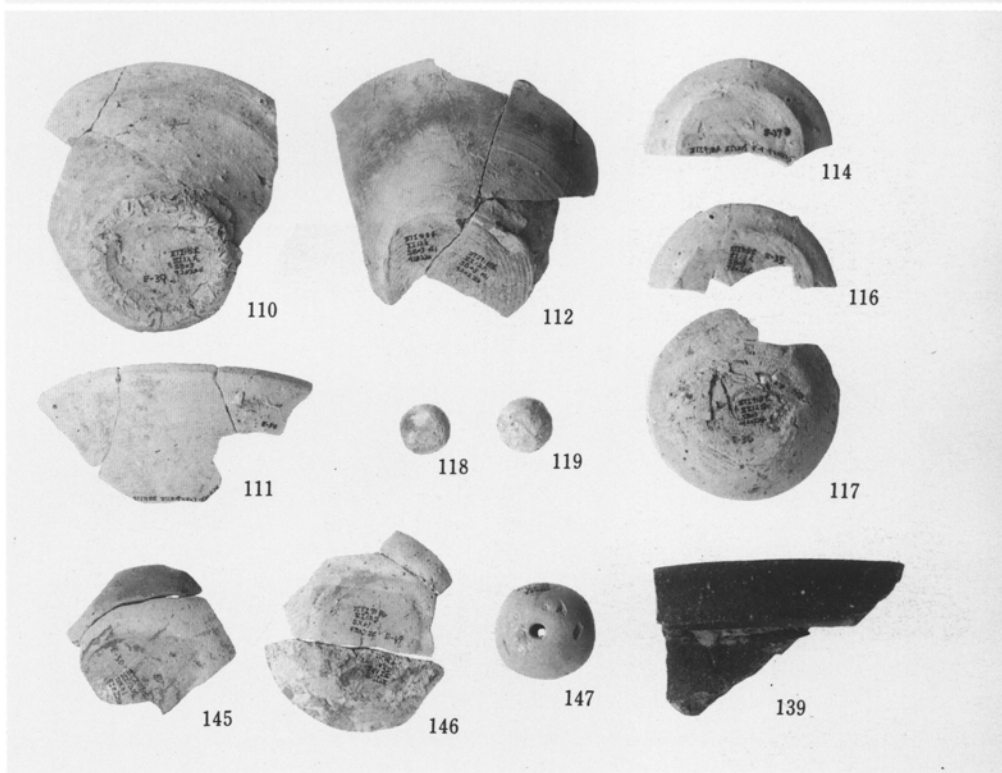
SD03



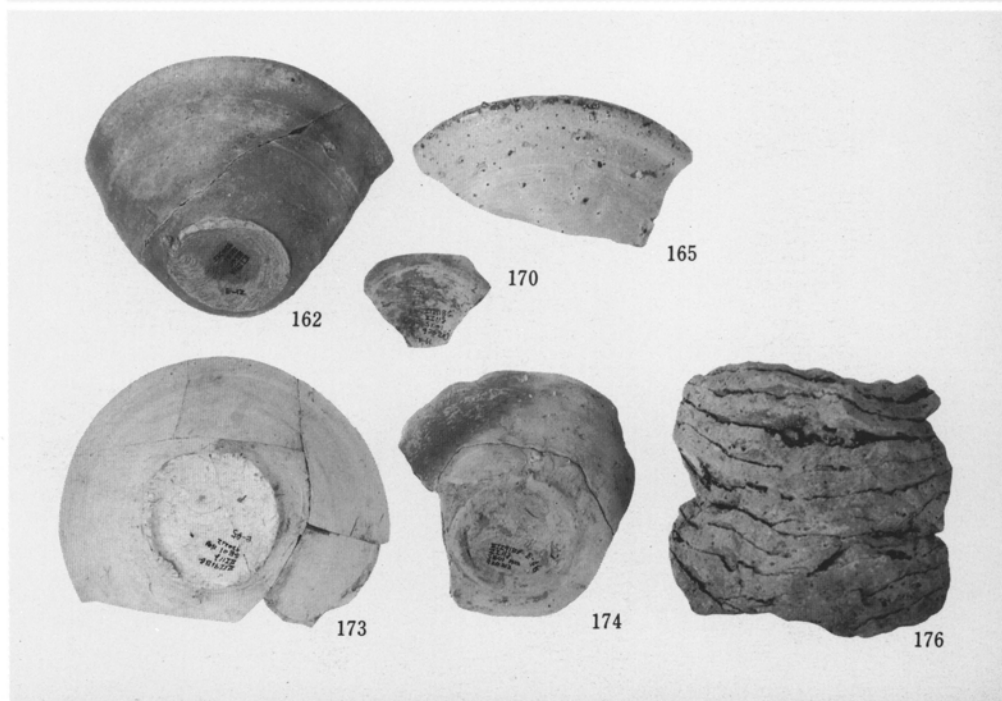
NR01 (90・91)  
SK06 (92・96・100)  
SD08 (102・103)

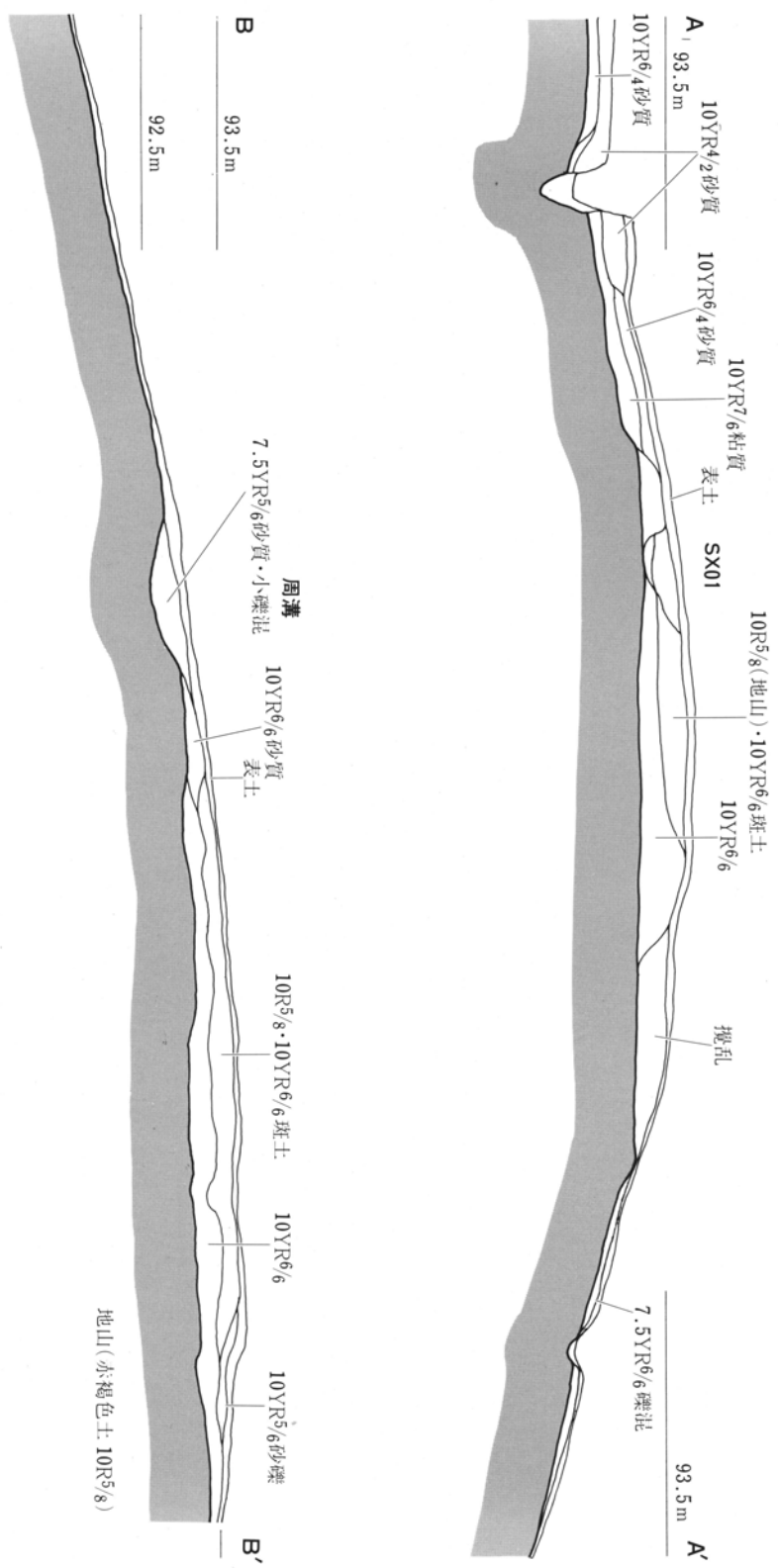


SK03 (110・111・112  
114・116~119)  
SK02 (139)  
SK01 (145・146・147)

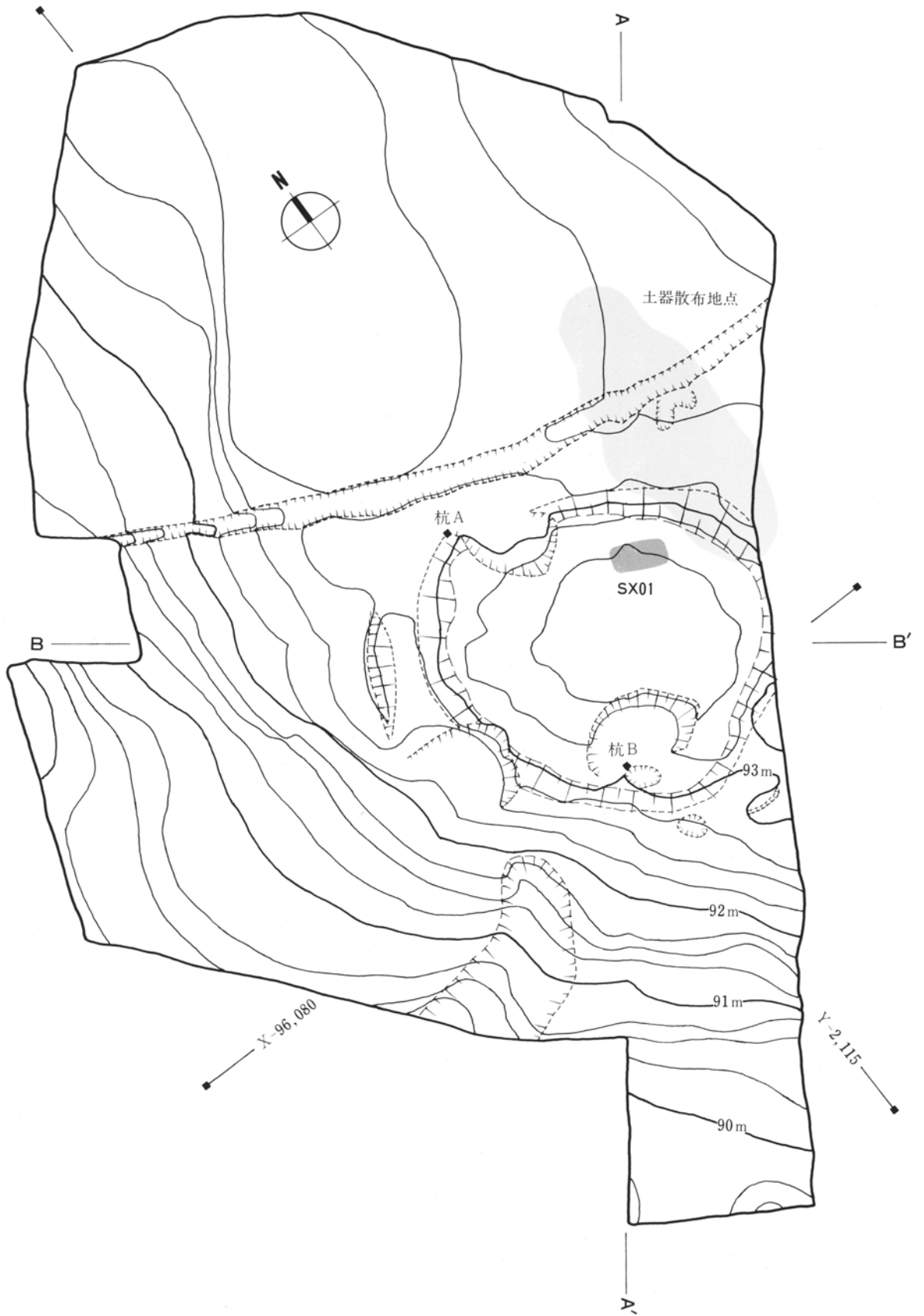


SK05 (162・165・170)  
SK04 (173・174・176)





根川 3号墳断面図 (1:100)







表土除去



墳丘

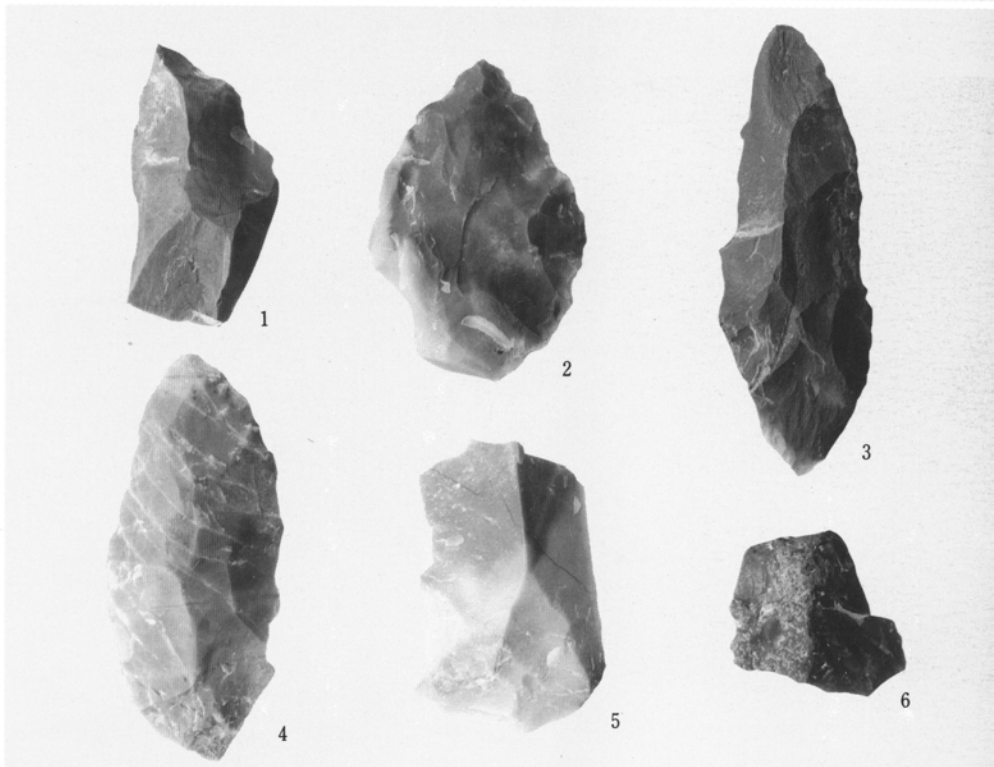


SX01

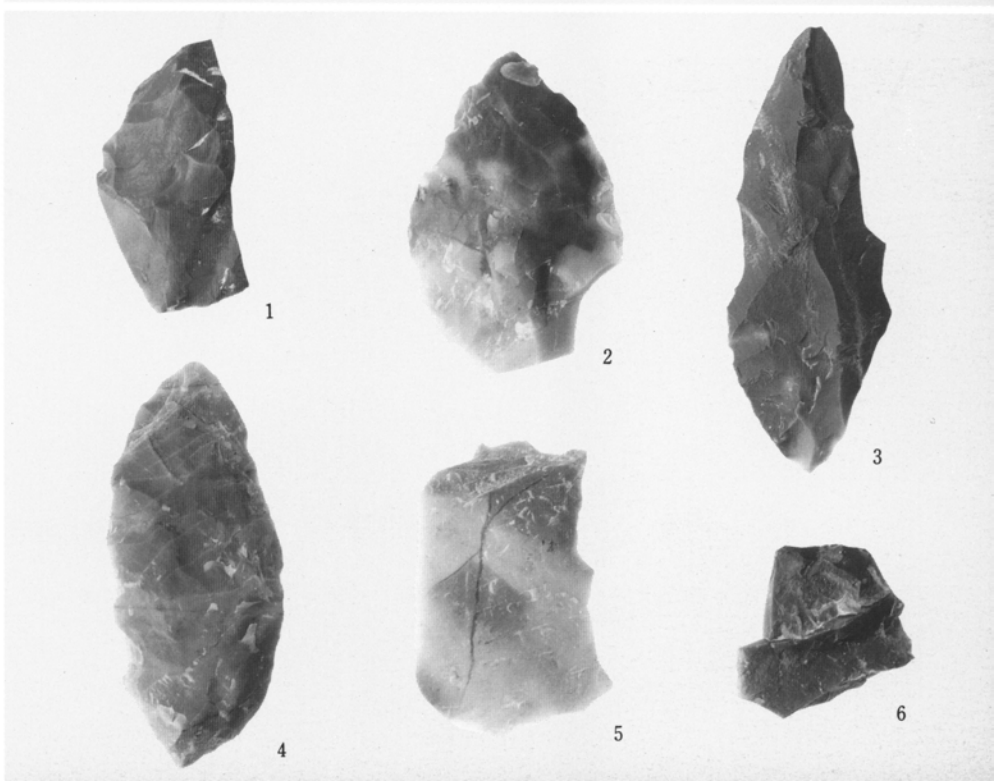
根川3号墳  
器台  
1:5



伊保遺跡  
石器 1:1  
(表面)



(裏面)



# 坂口遺跡

# 例 言

1. 本編は愛知県東加茂郡旭町大字池嶋字坂口に所在する、坂口遺跡の発掘調査報告である。
2. 調査は、愛知県土木部道路建設課による県道島崎豊田線拡幅工事に伴う事前調査として、財団法人愛知県埋蔵文化財センターが愛知県土木部から愛知県教育委員会を通じた委託を受け、平成3年10月から平成4年1月・平成4年4月から8月にかけて行った。調査面積はそれぞれ366㎡・455㎡である。
3. 現地調査は、地元住民の方々の参加を得て、本センター調査課主査野本欽也、同都築暢也、調査研究員松田 訓が担当した。
4. 調査にあたっては、次の各関係機関の御協力を得た。  
愛知県教育委員会文化財課、愛知県埋蔵文化財調査センター、愛知県土木部道路建設課、旭町教育委員会
5. 本編の編集は、松田 訓が担当し、執筆分担は次のとおりである。  
I～II-1・III～V・VI 松田 訓  
II-2 都築暢也  
VI 杉山真二（パリノ・サーヴェイ株式会社）  
服部俊之（本センター調査研究員）  
なお、遺構、遺物の写真撮影は松田 訓が行った。
6. 遺物整理作業については次の方々の協力を得た。  
柵木えみ子、藪田久子、山本章子、西山朋子、中島由美子
7. 本編に示す座標数値は、建設省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠する。また、本編に示す海拔表記は、東京湾標準（T. P.）の数値である。
8. 遺物の整理番号と登録番号の対照は、表として本文中に示した。
9. 調査記録、出土遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管する。
10. 本編の執筆にあたり次の諸機関、諸氏に御指導・御助言をいただいた。記して感謝したい。（敬称略）  
内野 正、梅村清春、大参義一、斎藤基生、立松 宏、寺内隆夫、中井さやか、永井宏幸、野口哲也、平林 彰  
旭町教育委員会、東京都埋蔵文化財センター、長野県埋蔵文化財センター

# 目 次

第Ⅰ章 調査の経緯	
1 調査に至る経緯 .....	1
2 調査の経過 .....	1
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	
1 遺跡の位置 .....	2
2 歴史的環境 .....	4
第Ⅲ章 調査の概要	
1 調査区 .....	6
2 調査の方法 .....	6
第Ⅳ章 遺 構	
1 基本層序 .....	7
2 遺 構 .....	10
第Ⅴ章 遺 物	
1 土器・土製品 .....	14
2 石 器 .....	30
第Ⅵ章 自然科学的分析 .....	34
第Ⅶ章 まとめ .....	39
付 表 .....	40



# 第Ⅰ章 調査の経緯

## 1 調査に至る経過

坂口遺跡は、愛知県遺跡分布地図に散布地として記載された遺跡（遺跡番号69022）で、東加茂郡旭町大字池嶋字坂口地内に所在する。この記載範囲内に愛知県土木部道路建設課によって、県道島崎豊田線拡幅工事が行われることとなった。この地は既に愛知県教育委員会文化財課及び旭町教育委員会が、土地改良総合整備事業に先立ち、予定地内の埋蔵文化財の包蔵状況、遺跡の広がりを確認するための調査を、平成元年9月20～25日に行っており、試掘坑からは縄文土器片などの出土をみた。この調査時に確認された遺跡範囲内に県道拡幅予定地が入っていたため、事前に発掘調査が必要と判断された。

（財）愛知県埋蔵文化財センターではこのような事前協議を経て、愛知県土木部から愛知県教育委員会を通じて委託を受け、旭町教育委員会の協力のもと、平成3年10月から発掘調査を実施した。

## 2 調査の経過

調査区は県道の南側の拡幅予定地に、一括して設定した。この調査区に平成3年10月から表土剥ぎを実施し、資材搬入を行い、発掘作業を開始したのは10月7日であった。調査地には80～100cmという予想以上の厚さで黒色土が堆積しており、こうした包含層の掘り下げに時間を要した。調査期間は3ヶ月強を要し、測図、写真撮影、補足調査を含めて1月10日に現地調査を終了した。この調査の結果、調査区の西側に続く拡幅予定地にも遺跡の広がる可能性が認められた。このため試掘調査を実施して遺物包含層の広がり確認し、この部分についても発掘調査が必要と判断されたため、平成4年4月20日より調査を開始し、8月14日に終了した。

出土遺物の整理作業は、調査終了後、洗浄・注記作業を本センター西尾事務所で行い、引続き同三河事務所において、調査報告書作成までの作業を行った。

	平成3年 10月	11月	12月	平成4年 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
ⅢAS91	■■■■										
ⅢAS92							■■■■■■■■■■				

第1表 調査日程表

## 第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

### 1 遺跡の位置



第1図 愛知県位置図

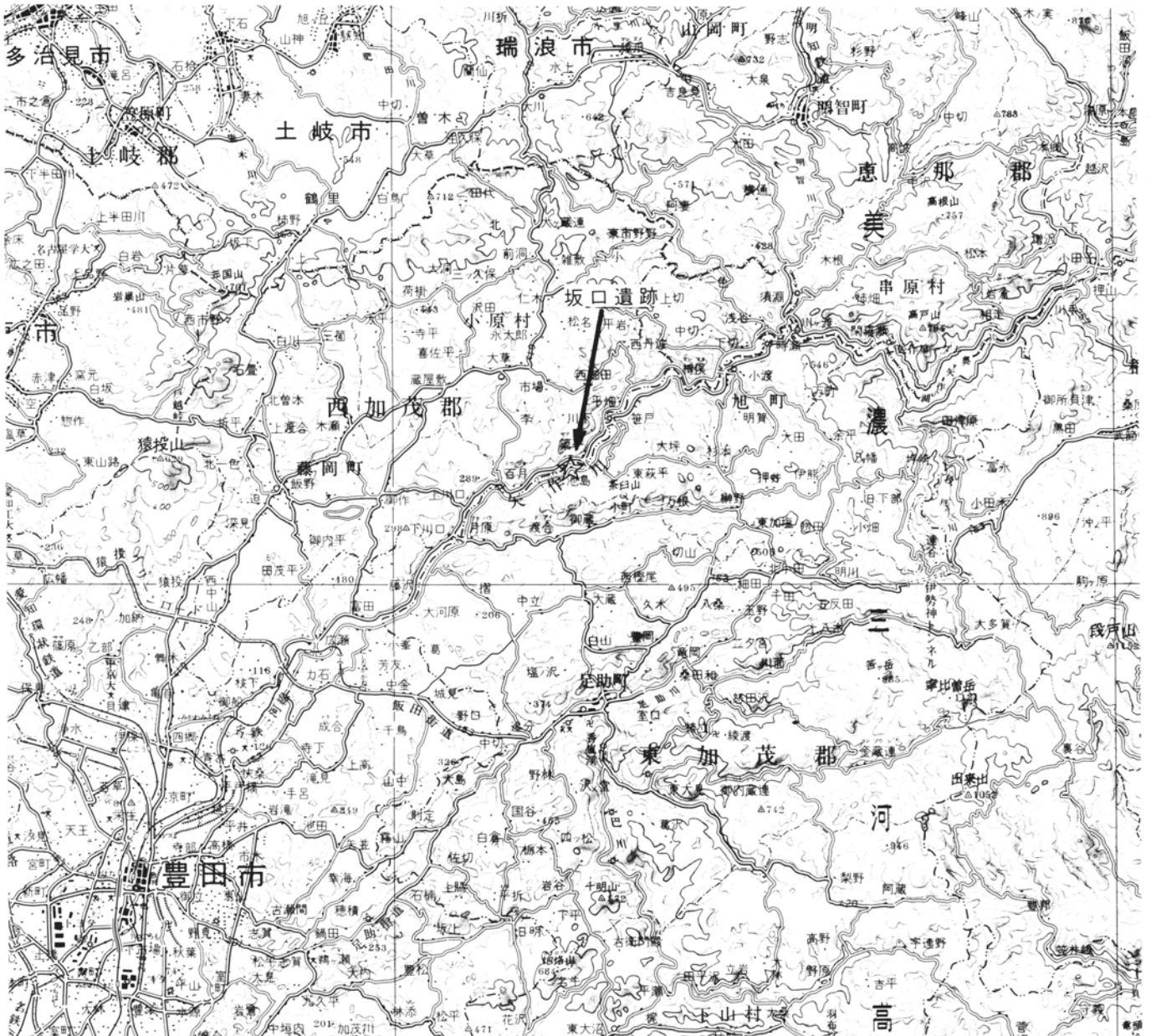


第2図 旭町位置図

愛知県は日本列島のほぼ中央、太平洋側に位置する。坂口遺跡の所在する東加茂郡旭町は、愛知県の北端、矢作川上流部に属し、その東境は北設楽郡稲武町、南境は東加茂郡足助町、西境は西加茂郡小原村、北境は岐阜県恵那郡明智町・同郡申原村と接する。これら山間部に所在する三河高原は、日本を代表する大断層である中央構造線の内帯にあり、この大断層に斜交していくつかの小断層が走り、複雑な地質構造を形成している。したがって河川によって形成された谷地形も複雑な様相を呈しているが、これらは矢作川水系に属している。遺跡の立地する池嶋地区周辺は、地質構造からは古期沖積世の下位堆積層に属し、矢作川上流からの土砂の堆積と、南側の山地から崩れ落ちた土砂の堆積によって生まれた地形である。

遺跡は矢作川が右岸の急峻な斜面に当たって大きく蛇行する右側（左岸）に発達した河岸段丘上に立地し、周辺には幾筋もの沢が矢作川に向かって流れ落ちている。この地は旭町の中では矢作川の最下流に位置するため、同町内でも最も標高が低い。調査地は標高約114メートルを測り、矢作川との比高差は約10メートルで、周囲は杉、檜を中心に、植林が丁寧に施されている。調査地のある矢作川左岸は北向きの緩斜面であるが、この傾斜が南側の山裾まで広く続いているため陽当りは比較的良好である。右岸では川岸から急な斜面が続くため、左岸の北向き緩斜面に集落が形成されたと思われる。さらにこの地の東西には沢が幾筋も展開していることから、生活するための条件は比較的良好であったと思われる。





第3図 遺跡周辺地形図（国土地理院 1/20万地勢図「豊橋」）

る。こうした立地から、調査地の旧態は畑地として利用され、野菜、穀類、植木が栽培されていた。

坂口遺跡の所在する東加茂郡の気候は、表日本式気候に属しているとはいえ山間部にあたるため、名古屋、豊橋など県内の平野部と比べるとやや冷温である。しかし降水量に関しては山間部特有の地形性降雨はあまり見られないようで、年間の降水量は名古屋市のそれとほぼ同じである。暖候期には南から南東向きの斜面では、海からの湿った空気が巻き込むために地形性降雨が起りやすいのであるが、平野部に近いことからこうした降水量に留まっているものと思われる。

## 2 歴史的環境

『愛知県遺跡分布地図（Ⅱ）－知多・西三河－』によれば、矢作川本流上流部（行政区で言えば藤岡町・足助町・小原村・旭町）に分布する縄文時代の遺跡は、22ヶ所が確認されている。加えて、矢作川の支流部及び丘陵部には、地域によって分布調査の粗密はあるが、数多くの遺跡が分布している。

本項ではこの地域の縄文期の遺跡を中心に概観してみよう。草創期の遺跡はいまだ発見されてはいないが、桑凹・小渡広畑遺跡などでは礫石器、越田和遺跡では尖頭器が検出されている。押型土器を出土する遺跡は、榊野広見・大水口岩陰・御堂遺跡など各所で確認されている。続く前期の遺跡は、遺跡数は増加するが、遺物の検出状況からみて、早期の遺跡と同じく、基本的にキャンプサイトのな短期間に断続的に存続した遺跡と考えられる。それに対し、中期から後期にかけての遺跡は、定住傾向を示す安定した遺跡となる。大砂・番城垣内・万場垣内・久保田遺跡（以上中期）・寺ノ下遺跡（後期）からは、1棟から数棟の竪穴住居跡が検出され、遺物の量も豊富に出土することがそれを示している。また、同時期は、石棒・石剣などの遺物も含め、当時の精神世界を窺わせるような遺構が明らかになっている。大砂遺跡（中期）・水汲遺跡（後期）の円形配石遺構がそれである。続く晩期は前半と後半では様相が異なる。前半の半截竹管文の土器を検出する遺跡は後期から継続するのに対し、次の条痕文の土器を出土する遺跡は断絶し、かつ遺跡の規模も小さくなる傾向が見られるが、これは愛知県下全域と同じ傾向である。

### 引用・参考文献

愛知県教育委員会 1988 『愛知県遺跡分布図（Ⅱ）－知多・西三河－』

旭町教育委員会 1981 『旭町誌』

足助町誌編纂委員会 1975 『足助町誌』

	遺跡名（県遺跡番号）	時期						遺跡名（県遺跡番号）	時期					
		先	早	前	中	後			晩	先	早	前	中	後
1	坂口遺跡 (69022)	○	○	○	○	○	21	市場遺跡 (67023)						
2	屋ヶ原遺跡 (69023)				○	○	22	木用遺跡 (67022)					○	○
3	竹ノ下遺跡 (69013)				○	○	23	森下遺跡 (67021)					○	○
4	桑凹遺跡 (69073)	○			○		24	大貝津遺跡 (67020)						
5	涼堂遺跡 (66035)				○		25	畑中遺跡 (67017)					○	
6	宇内戸遺跡 (—)						26	長沢遺跡 (67016)						○
7	小樽遺跡 (69011)					○	27	寺ノ下遺跡 (67013)					○	○
8	島崎遺跡 (69012)			○	○	○	28	東田面遺跡 (67008)						○
9	南貝津遺跡 (69010)					○	29	西田面遺跡 (67009)						○
10	小渡広畑遺跡 (69080)	○					30	ヤゲ西遺跡 (67010)				○	○	○
11	船戸遺跡 (69007)				○		31	井ノ元遺跡 (67006)					○	
12	小渡藪下遺跡 (69079)	○					32	御堂遺跡 (67005)				○	○	○
13	大砂遺跡 (69037)				○	○	33	川畑遺跡 (67003)				○		
14	滝の上遺跡 (69004)						34	水汲遺跡 (65081)						○
15	下洞遺跡 (69005)					○	35	高土屋遺跡 (65097)					○	
16	上万場遺跡 (69032)		○	○	○	○	36	大倉遺跡 (66030)						○
17	ホンゴ遺跡 (69015)					○	37	馬場遺跡 (66020)					○	
18	大水口岩陰遺跡 (—)		○	○		○	38	大福寺遺跡 (66019)						○
19	榊野広見遺跡 (—)		○	○	○		39	宮口遺跡 (66021)						○
20	池田遺跡 (69030)						40	大田遺跡 (66028)						○

第2表 周辺遺跡一覧表（縄文時代）



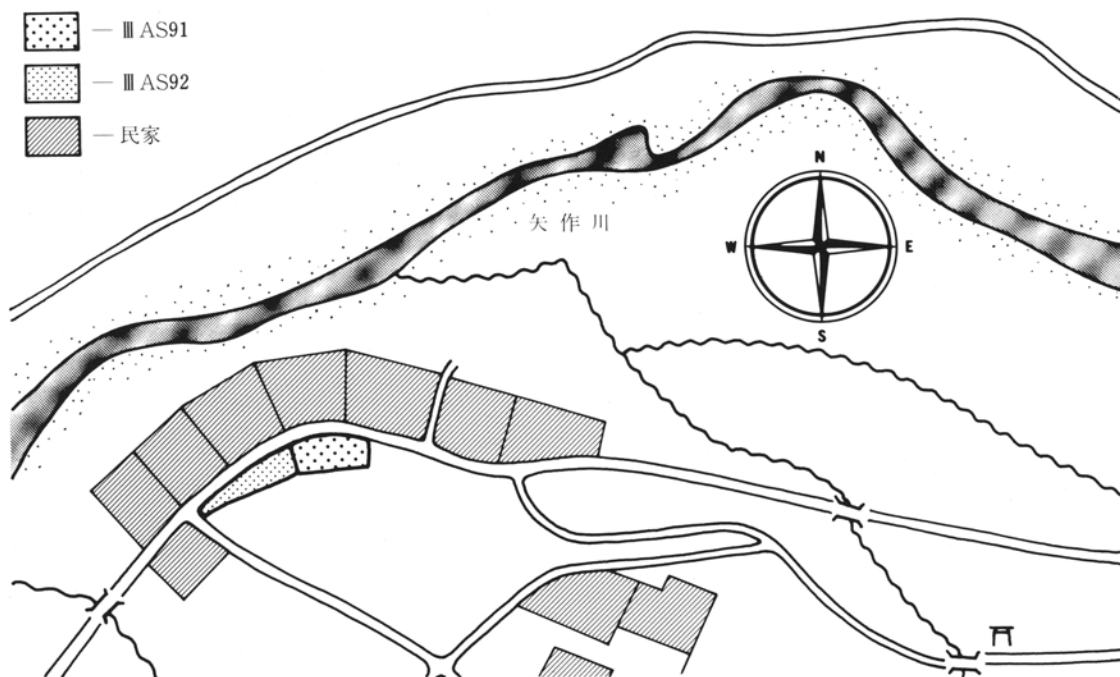
## 第Ⅲ章 調査の概要

### 1 調査区

本調査に先立って行われた確認調査の結果から、坂口遺跡は現県道面よりも高い位置に遺物包含層が展開している可能性が考えられたため、畑地として利用されている拡幅予定地に91年度調査区を設定した。遺物包含層はこの調査によって、予想された高さより低い位置に存在することが判明し、さらに西側の拡幅予定地にも展開していることが確認できた。92年度調査区はこうした調査結果から、西隣の消防小屋敷地及びさらに西側の畑地に設定した。両調査区は北向きの緩やかな斜面に立地しており、この斜面は矢作川によって形成された河岸段丘に展開する池嶋集落の南側に広がっている。両調査区とも北向き斜面ではあるが傾斜が緩やかなため、陽あたりは良好で、乾燥した水はけのよい土地である。

### 2 調査の方法

両調査区内の表土の除去は、機械（バックホウ）掘削によって行った。この調査地に排土処理のためにベルトコンベヤーを配し、91年度調査では排土をすべて持ち出し、92年度調査では排土置場を91年度調査地に充て、これをまとめた。両区共に50cm幅のトレンチを壁面に沿って入れたが、遺物包含層は予想以上に厚く、さらにその分層が肉眼観察では不可能であった。そこでこの遺物包含層を任意（約10cm）に分層し、実質的にはサブグリッド（250cm方眼）毎に検出作業を繰り返して基盤層に到達する方法をとった。



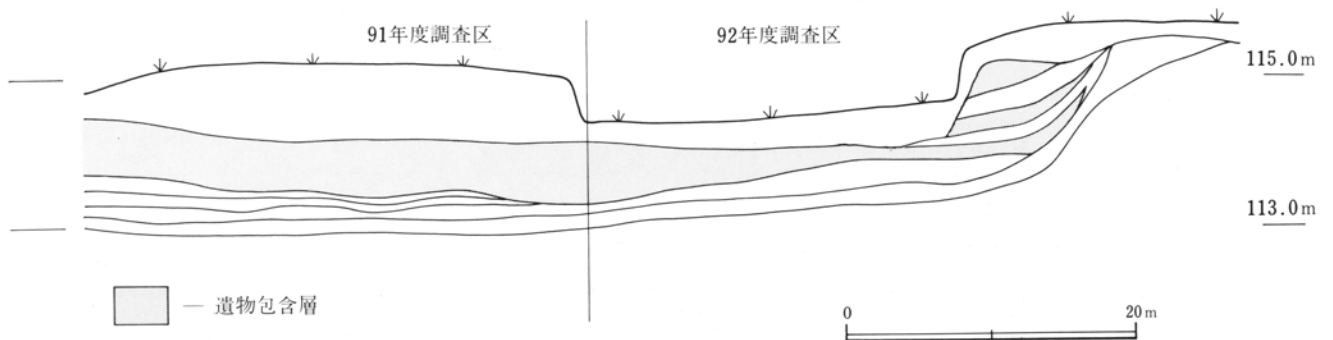
第5図 調査区位置図

# 第Ⅳ章 遺 構

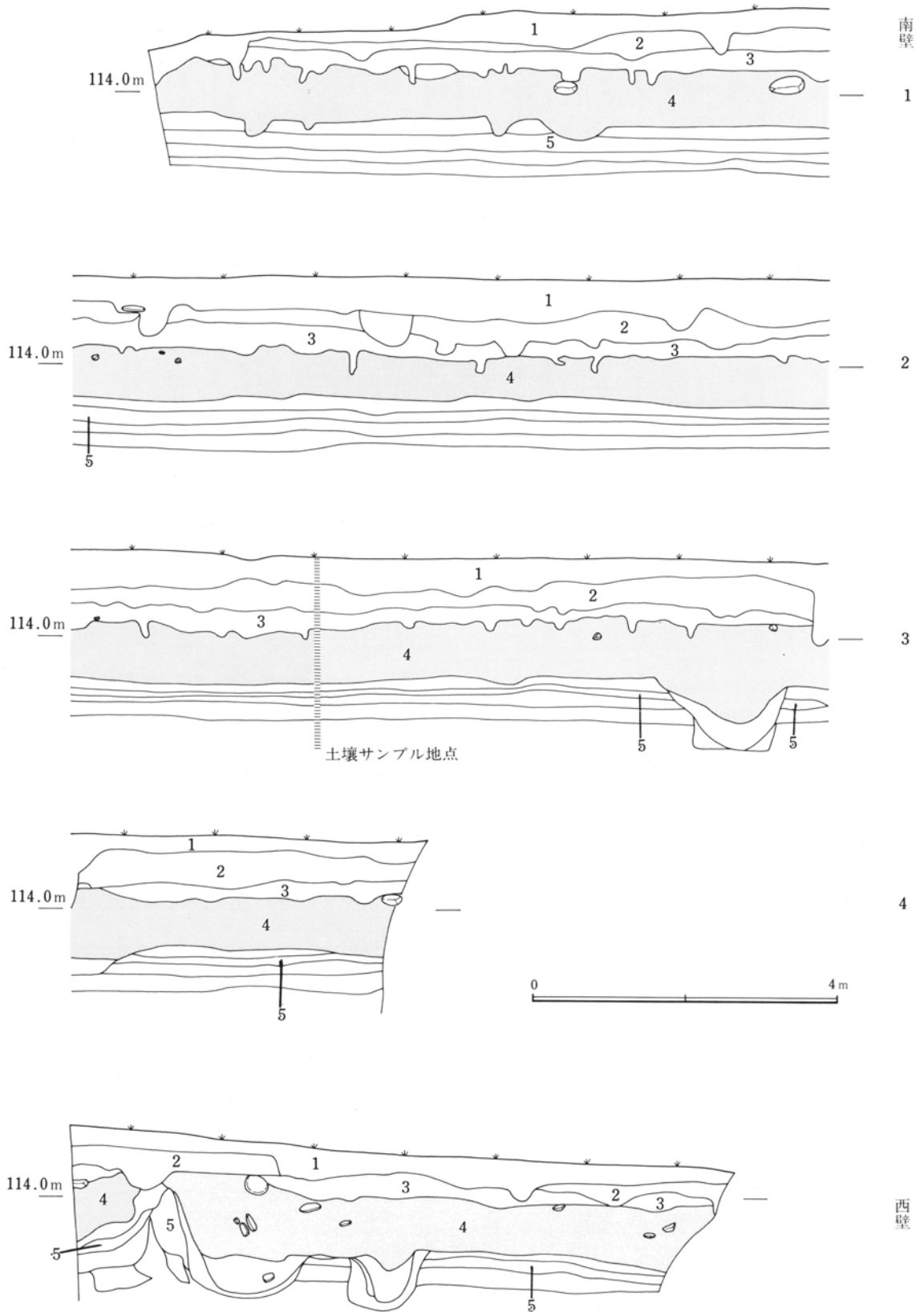
## 1 基本層序

坂口遺跡の基本層序を概観すると、遺物包含層については第6図のような状況がみとれる。91・92年度両調査区は、南北方向に延びる傾斜の緩やかな浅い谷状の旧地形に、東西方向に調査区を設置した。91年度調査区ではこの遺物包含層が厚く均一に堆積しているが、92年度調査区では80年ほど前に大きく削平された部分もあり、地形も西に向かうにしたがい上がっているため薄くなり、さらに間層によってこれが分かれている。以下に各土層の堆積状態を説明するが、層名については第7・8図に明記する。

地表面は標高約115mで、地表直下には耕作土である褐灰色砂質シルト（第1層）が10～50cm程堆積し、この下には91年度調査区のみ明褐色粗粒砂層（第2層）が10～30cm、さらにこの下に第2層のブロックを多量に含む灰褐色シルト層（第3層）が約30cm堆積していた。この第3層はローリングを受けたものと思われるが、土器の混入がみられたため、表土除去作業はこの層の直上までとした。両区にわたって最も厚く堆積するのは黒褐色砂質シルト（第4層）で、91年度調査区では第3層の下に、92年度調査区では第1層の下に堆積しており、この層には縄文時代早期から晩期までの遺物が含まれ、本遺跡の遺物包含層にあたる。92年度調査区では第3層が削平等によって存在しなかったため、表土除去作業はこの第4層直上とした。この第4層は先にも述べたように、92年度調査区の西側の、地形の傾斜が急になる部分で間層が入って分かれている（第4-a・b層）。この分かれた層からはわずかな量の遺物しか出土していないが、いずれも縄文早期から前期のものであり、東側の低い部分の遺物包含層の上方から出土するものよりも古い。この逆転現象は、斜面堆積している部分が平面的に削平されたため、第4層の上方部分は低いところで残り、地形が上がるところでは削平され、第4層の下方に相当する部分が西端の高い部分で残ったと解釈したい。なお、この第4層の下には間層（褐色細粒砂）をはさんで火山灰を含む褐灰色細粒砂（第5層）が確認できた。

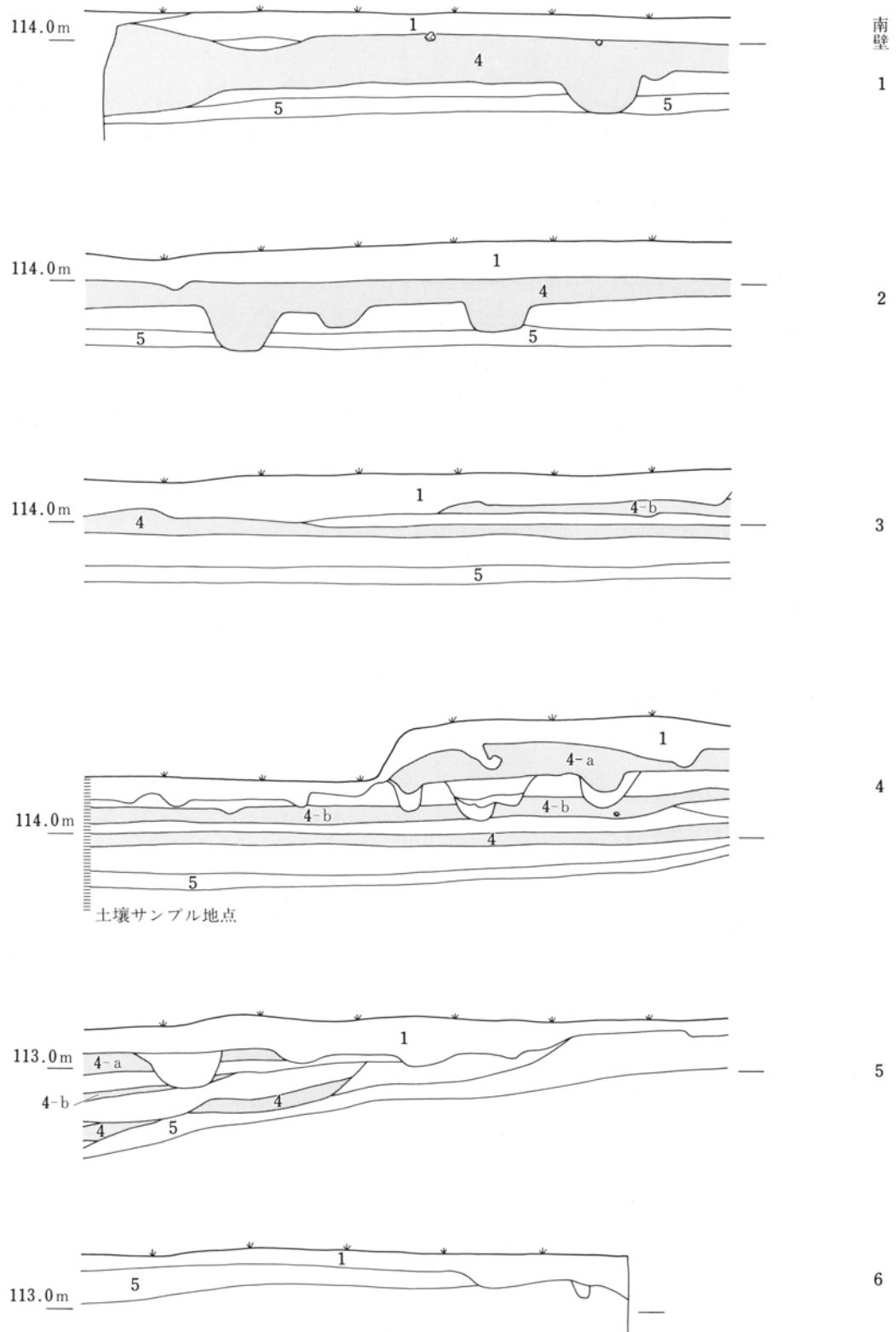


第6図 調査区基本層序模式図



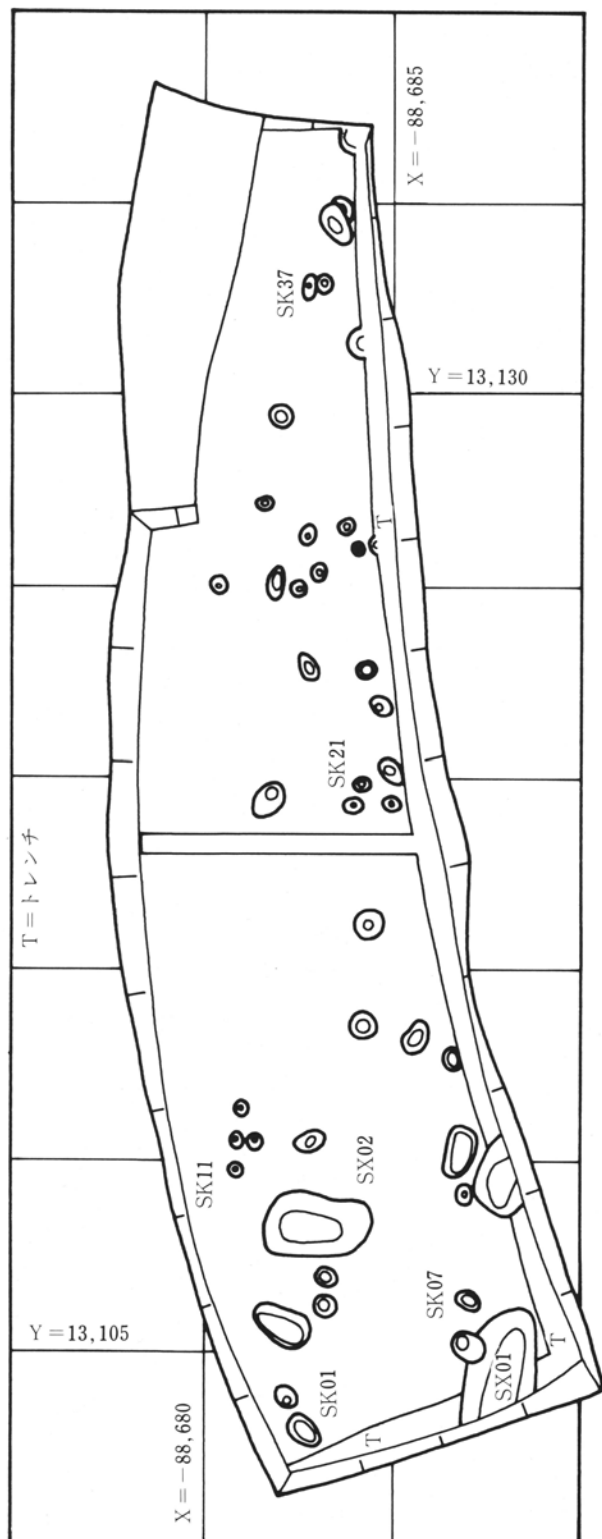
第7図 91年度調査区土層断面図





第8図 92年度調査区土層断面図

## 2 遺 構



第9図 91年度調査区遺構位置図

本遺跡で検出した遺構は、91年度調査区では土坑（SK）42基、不定形な掘り込み（SX）2ヶ所、92年度調査区では土坑43基である。

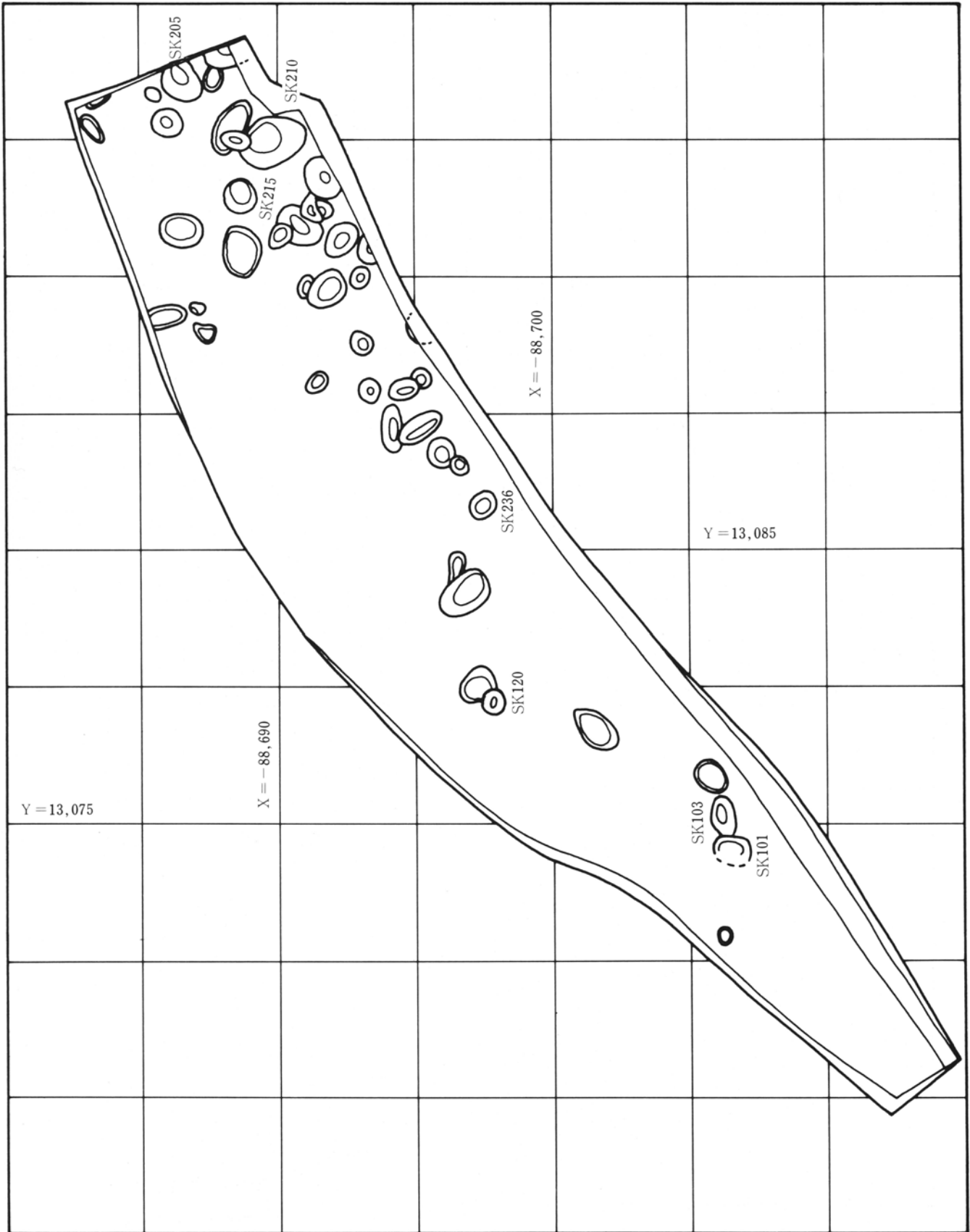
遺構検出面は、概ね標高114～115 mである。この検出面は、基本層序の項でも述べたように、削平された部分も含まれていたため、縄文時代の早・前期のみ残る部分と、早期から晩期にわたって残る部分とがみられた。

両調査区で検出された遺構の埋土は、いずれも縄文時代遺物包含層である黒褐色砂質シルトであった。よってこれらの遺構の時期は、いずれも縄文時代と考えることができる。しかし、時期を判定し得る遺物をともなった遺構は僅かであった。包含層中の遺構は両調査区共に検出が困難で、各検出段階で、面的な広がりを窺わせる遺物の出土状況も確認できたが、明確な遺構としては検出できなかった。

縄文時代のものと思われるこれらの遺構は、それぞれ一定の規格性、方向性を持たず、相互関係、空間的特質などについては窺い得ない。但し、91年度調査区西端で確認できた集石については、出土レベル、付近の土層断面と照合の上、慎重な検討が必要と思われる。

以下に主要遺構について説明をするが、遺構番号は両年度にわたる通番ではなく、各年度毎に付けた。





第10図 92年度調査区遺構位置図

91年度調査区

S K 01 調査区北西隅に位置する。検出高は113.1mを測り、平面形態は楕円形を呈し、長径1.0m、短径0.6m、深さ0.25mを測る。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とし、縄文早期（茅山期併行）と思われる深鉢形土器の体部片が出土している。

S K 07 調査区西側に位置する。検出高は113.2mを測り、平面形態は楕円形を呈し、長径0.6m、短径0.45m、深さ0.2mを測る。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とし、縄文早期と思われる繊維を多く含む土器片が出土している。

S K 11 調査区西側北寄りに位置する。検出高は113.1mを測り、平面形態は不整形円形を呈し、長径0.35m、短径0.32m、深さ0.2mを測る。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とし、縄文早期と思われる繊維を多く含む土器片が出土している。

S X 02 調査区西側北寄りに位置する。検出高は113.1mを測り、平面形態は不整形方形を呈し、長径2.8m、短径1.7m、深さ0.7mを測る。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とし、縄文早期と思われる深鉢形土器の口縁部片が3点出土している。

集石 調査区南西隅に位置する。検出高は113.6～114.3mを測り、平面構成からは特に規則性は窺えない。遺物包含層である黒褐色シルト層の上方から直上の高さに、径0.15～1.5mの河原石が集まっている。第11図A地点では、石囲い状に配石されている可能性も窺えるが、この地点も含めて全ての石は被熱を受けておらず、その性格は判定し得ない。

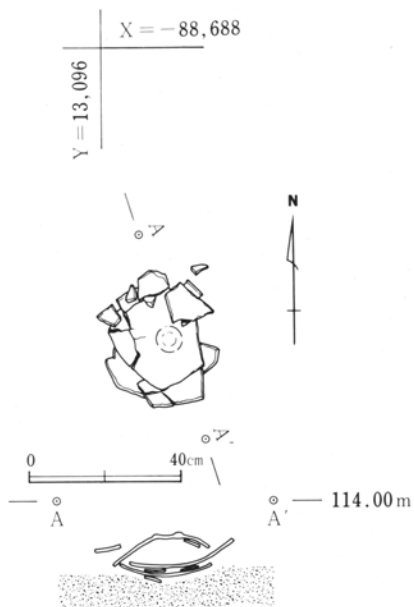
92年度調査区

S K 120 調査区ほぼ中央に位置する。検出高は113.9mを測り、平面形態は不整形円形を呈し、長径0.9m、短径0.8m、深さ0.15mを測る。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とし、縄文早期と思われる深鉢形土器の口縁部片が出土している。

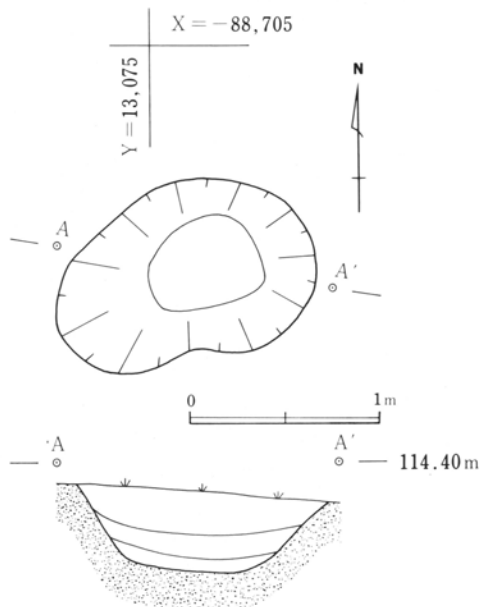
S K 205 調査区東端に位置する。検出高は113.3mを測り、平面形態は不整形円形を呈するものと思われ、短径1.0m、深さ0.4mを測る。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とし、縄文早期と思われる深鉢形土器の口縁部片が出土している。

S K 215 調査区東側南寄りに位置する。検出高は113.5mを測り、平面形態は楕円形を呈するものと思われ、長径1.8m、深さ0.45mを測る。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とし、縄文早期と思われる深鉢形土器の体部片が出土している。

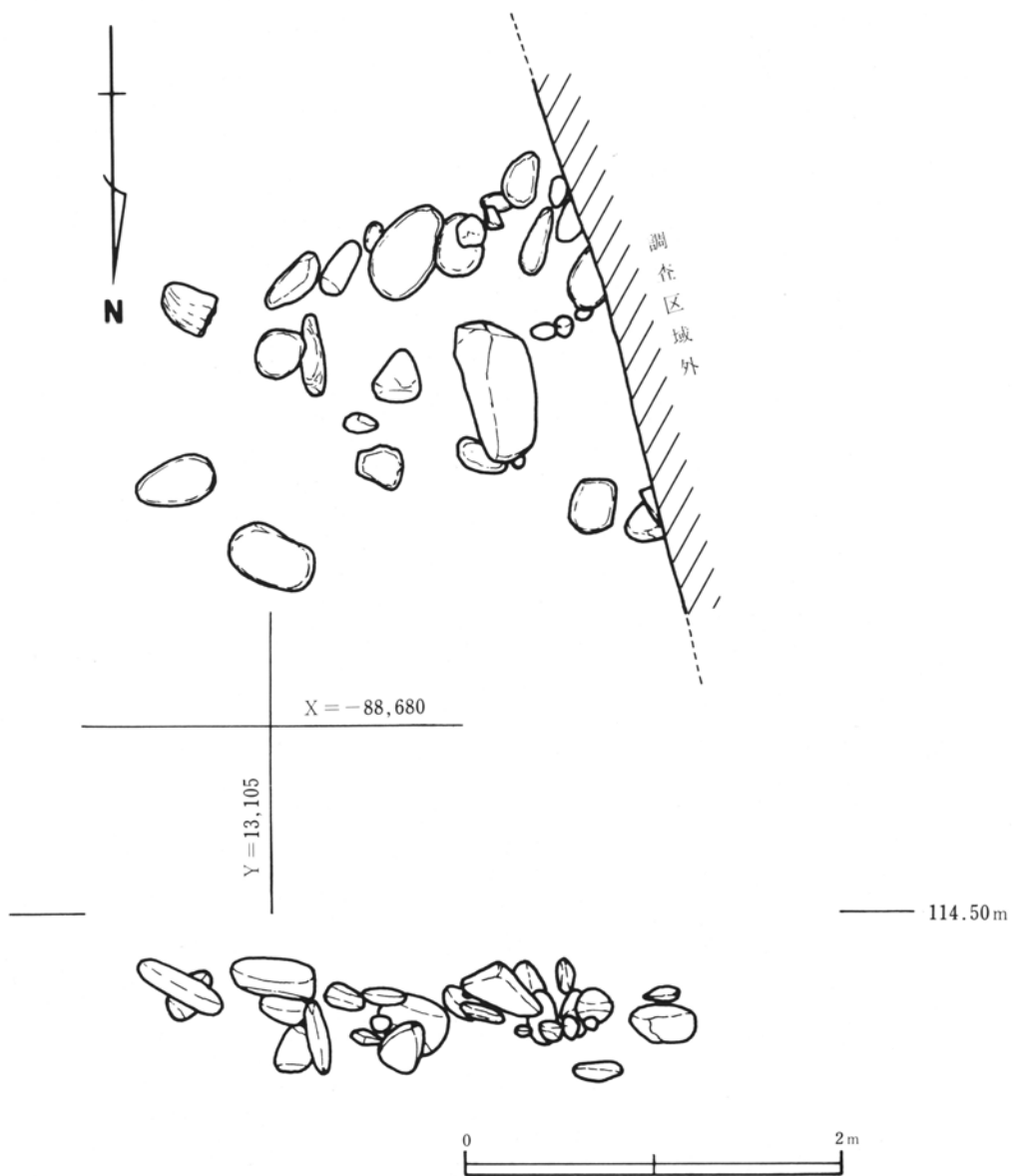
S K 236 調査区中央南寄りに位置する。検出高は113.8mを測り、平面形態は隅丸方形を呈し、長径1.05m、短径0.9m、深さ0.3mを測る。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とし、縄文後～晩期のもと思われる深鉢形土器が出土している。



第11図 鉢形土器(305)出土状況平・断面図



第12図 SK103平・断面図



第13図 集石平・側面図

## 第V章 遺物

### 1 土器・土製品

91・92年度両調査区共に、出土した土器は縄文時代のものに限られた。これらの土器の出土状態は、遺構に伴うものはほとんどみられず、面的なまとまりも僅かであり、一括性はほとんど認められなかった。厚く堆積した黒褐色砂質シルトの包含層は、基本層序の項でも述べたように肉眼での分層は不可能であり、任意に分層を行って取り上げた遺物も、時期に新旧逆転現象が認められるものもあった。遺物の遺存度も数点を除いて小片がほとんどであり、底部がほとんど出土しないなど部位による偏りもみられた。したがって調査地点が斜面であることも考慮すると、出土遺物は二次的な堆積の可能性が考えられる。器種は深鉢、鉢、注口土器・土偶などがみられた。時期は早期から晩期までの各時期のものが出土しているが、後期が主体をなすかと思われる。出土遺物には西日本・東日本それぞれに祖源が求められる土器がみられ、当該期における地理的環境、交流などを考える上で興味深い。

土器の器種分類は基本的には早～晩期の各時期を大枠で群として捉え、施文の種類によってそれぞれを類別する方法を取った。以下に各群について説明を加える。

#### 第I群

縄文時代早期的様相が認められるものを、第I群とした。この群を施文を中心としてさらに5類に分けた。

##### I-1類(5)

燃糸文が施されているもの。口唇部外側がやや肥厚し、その直下からやや傾きながら縦走する燃糸文が施されている。

##### I-2類(1~4)

押型文が施されているもの。1は横方向の山形押型文で、波長は約12mmで鋭角ではなくやや崩れた山形である。2、3はポジティブな楕円形の押型文で、3の方が楕円形が大きい。4は格子目状の押型文が施されている。

##### I-3類(6~28)

爪形文が施されているもの。6~8は口縁部に管状突起を持つもので、口唇部、突起、体部内外側に爪形文が施されている。口唇部が刺突などによって刻まれているものが多く、口縁部内側に爪形文がみられるものと施文されていないものが認められる。

##### I-4類(29~39)

条痕文が施されたもの。口唇部には貝または櫛状工具による刺突が施されているものが

多くみられる。46のように口縁部下方から体部にかけて僅かな段が認められるものもある。底部には37のような膨らみ底に条痕が施されているものと、僅かに窪んでいるものがみられる。

#### I-5類 (40~55)

条痕文が施された後、刺突(爪形文状のものも含む)が施されたもの。口唇部、口唇部外側、口唇部を面取りした部分に刺突が施されているものが多くみられる。

第I群は3・4・5類が主体をなすと思われるが、これらの土器群は早期でも後半の茅山下層式または粕畑式などと近接関係にあるものと思われる。

### 第II群

縄文時代前期的様相が認められるものを、第II群とした。この群を施文を中心としてさらに2類に分けた。

#### II-1類 (77~83)

横位に羽状縄文が施され、その後に細い隆帯を貼り付け、ヘラ状工具による刻みを施していると思われるもの。80の外側屈曲部には、横方向に梯子段状の隆帯が貼り付けられている。

#### II-2類 (56~76)

半截竹管状の工具による施文が施されていると思われるもの。竹管文を施した後、押引をしているものが多く認められる。61は口縁部を「く」の字状に折り返した後、内側断面の鋭角的な部分に粘土を詰めて補強がなされており、面取りされた口唇部の外側には、赤彩が施されている。63には口縁部に孔列文が穿たれている。

第II群は1類・2類がそれぞれ、前期中葉~後葉にかけての北白川下層式及び諸磯式などと近接関係にあるものと思われる。

### 第III群

縄文時代中期的様相が認められるものを、第III群とした。この群を施文を中心としてさらに3類に分けたが、この範疇には入らないものもみられる。

#### III-1類 (88~95)

縦方向の沈線・磨消帯などが施されていると思われるもの。

#### III-2類 (96~101)

撚糸文が施されているもの。地文に撚糸文が施されたのち、半截竹管状の工具によって施文が行われているものが多く認められる。96はキャリパー形の口縁を持ち、外側口縁部下に波状文が施されている。98は深鉢の体部片と思われるが、外側に細かいジグザク文が施されている。101は口唇部まで撚糸文が施されている。

Ⅲ-3類 (102~111)

隆帯及び沈線で施文が行われている、いわゆる「唐草文系土器」。粘土紐を貼り付けて区画しているものが多く認められる。103は棒状工具による施文ではないかと思われる。105は粘土紐を貼り付けた後、隆帯にする処理がやや雑である。

Ⅲ-その他

112~115は軸になる沈線を中心として、枝状(羽状)に施文が行われている。117は口唇部内外側及び、外側くびれ部下方に隆起線を持ち、これに刻み目が付けられている。121は深鉢の口縁部突起片で、押引状の施文が行われている。

第3群は類別したものが主体をなすものと思われ、1・2・3類は中期後半の一段階に位置するものと考えられるが、1・2類はそれぞれ加曽利E式、里木式と近接関係にあるものと思われる。しかし類別外のものの中には、中期前半の船元式、北屋敷式と近接関係にあるもの(117・121)もみられる。

第Ⅳ群

縄文時代後期的様相が認められるものを、第Ⅳ群とした。この群を施文を中心としてさらに4類に分けた。

Ⅳ-1類 (124~140)

無文と思われるもの。精製で丁寧な磨きが施されているものが多く認められる。

Ⅳ-2類 (142~272)

口縁部外側下方に、水平か口縁部と平行して沈線が施されるもの。これらはさらに4型に分かれる。

Ⅳ-2-a型 (142~167)

沈線のみ施すもの。口縁部の断面形は「く」の字状を呈するもの、ゆるやかに内彎するもの、玉縁状のものなどが認められる。

Ⅳ-2-b型 (168~171)

沈線直下に刻み目または刺突を施すもの。

Ⅳ-2-c型 (172~187)

沈線直下に擬縄文を施すもの。擬縄文の原体には巻貝を使用した可能性のあるものも認められる。

Ⅳ-2-d型 (188~272)

縄文を施し、口縁に平行または水平に沈線を施したもの。口縁部は波状を成すもの、突起を持つものなどが多く認められる。沈線によって無文帯と施文帯が区画されているものが多く、無文帯は地文を施し沈線で区画した後、磨消されている場合が多い。191の口唇部における圧痕部には縄文が施されている。211のように半截竹管状の工具による施文も認められる。255は突起部の欠損した波状口縁部片であるが、口縁部外側には面取りが成さ

れており、そこに棒状工具による刺突が施されている。

N-3類 (273~275)

縁帯文が施されているもの。

N-4類 (277~284)

注口土器。注口は軸長5~10cmを測り、外側には丁寧なミガキ調整が施されているものが多く認められる。

N-その他 (285)

土偶の足の可能性を持つ土製品で、1点のみ出土している。

第N群は2類が主体を成すものと思われる。縄文時代後期中葉の加曾利B式と近接関係にあるものが多いものと思われるが、その先行段階である堀之内式と近接関係にある可能性を有するもの(188~191)もいくつか認められる。

第V群

縄文時代晩期的様相が認められるものを、第V群とした。この群を施文を中心としてさらに3類に分けたが、この範疇に入らないものもみうけられる。

V-1類 (292・293・295・297~299・301~305)

無文と思われるもの。305は全体的に粗製で、体部を貝でなでた可能性が認められ、底部にはへこみをつけている。

V-2類 (308~312)

半截竹管状工具を使用して施文を行っているもの。308~310・312には半截竹管状工具を用いて押引が施されている。311にはこの工具の先端を加工したもので押引が施されている。

V-3類 (286~291)

条痕を施しているもの。口縁部片が多いが口唇部に刺突や刻み目が施されているものが多く、外側口縁部下には横方向に条痕が施されている。287は条痕を施した後、口縁部下に沈線が施されている。

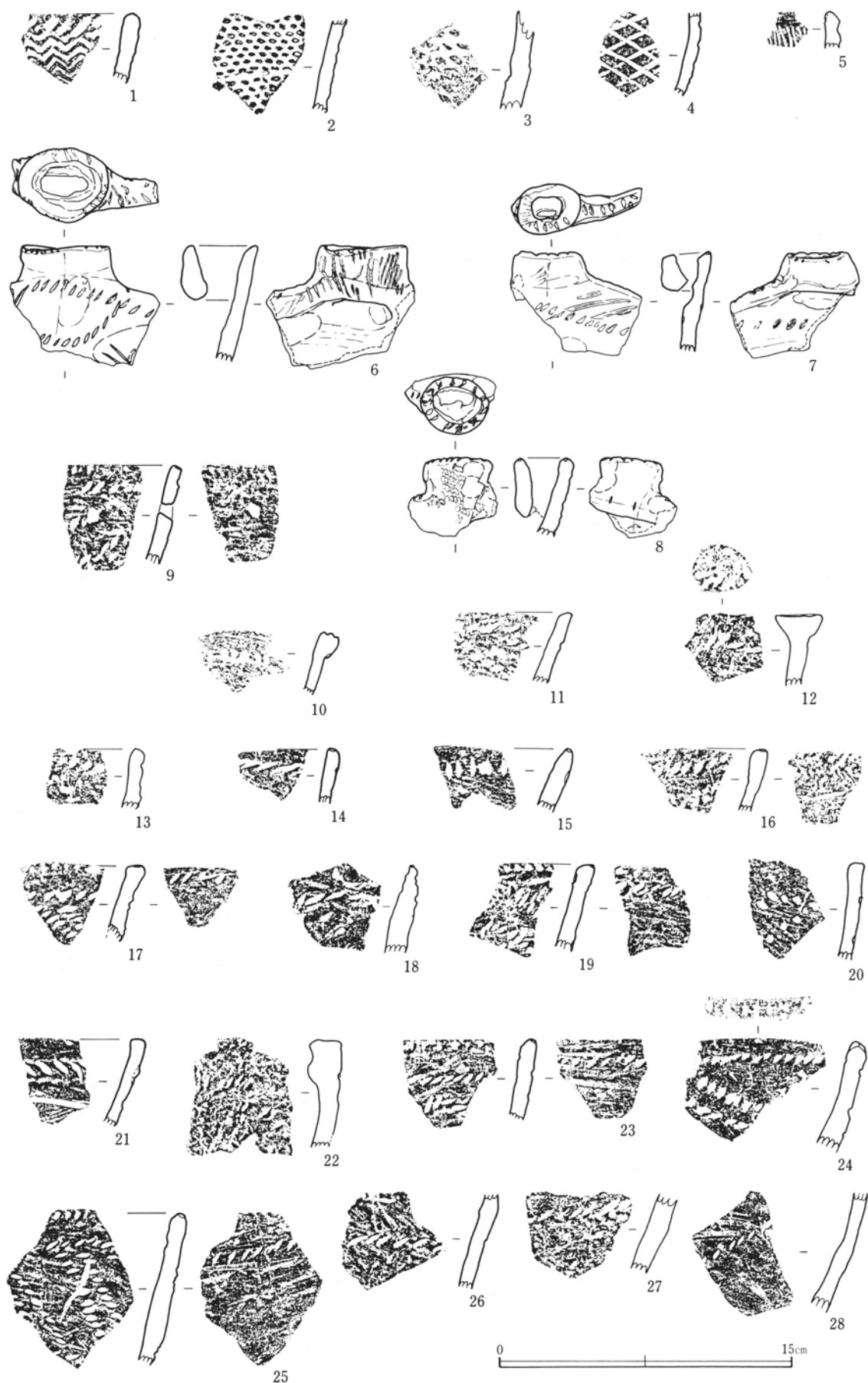
V-その他

307は口縁部の断面形態が「く」の字状を呈し、球形の体部を持つ浅鉢で体部外面には凹線によるモチーフが施されている。大洞C式と近接関係にあるものと思われる。

第V群は縄文晩期前半の元刈谷式と近接関係にあるものが主体を成すと思われる。

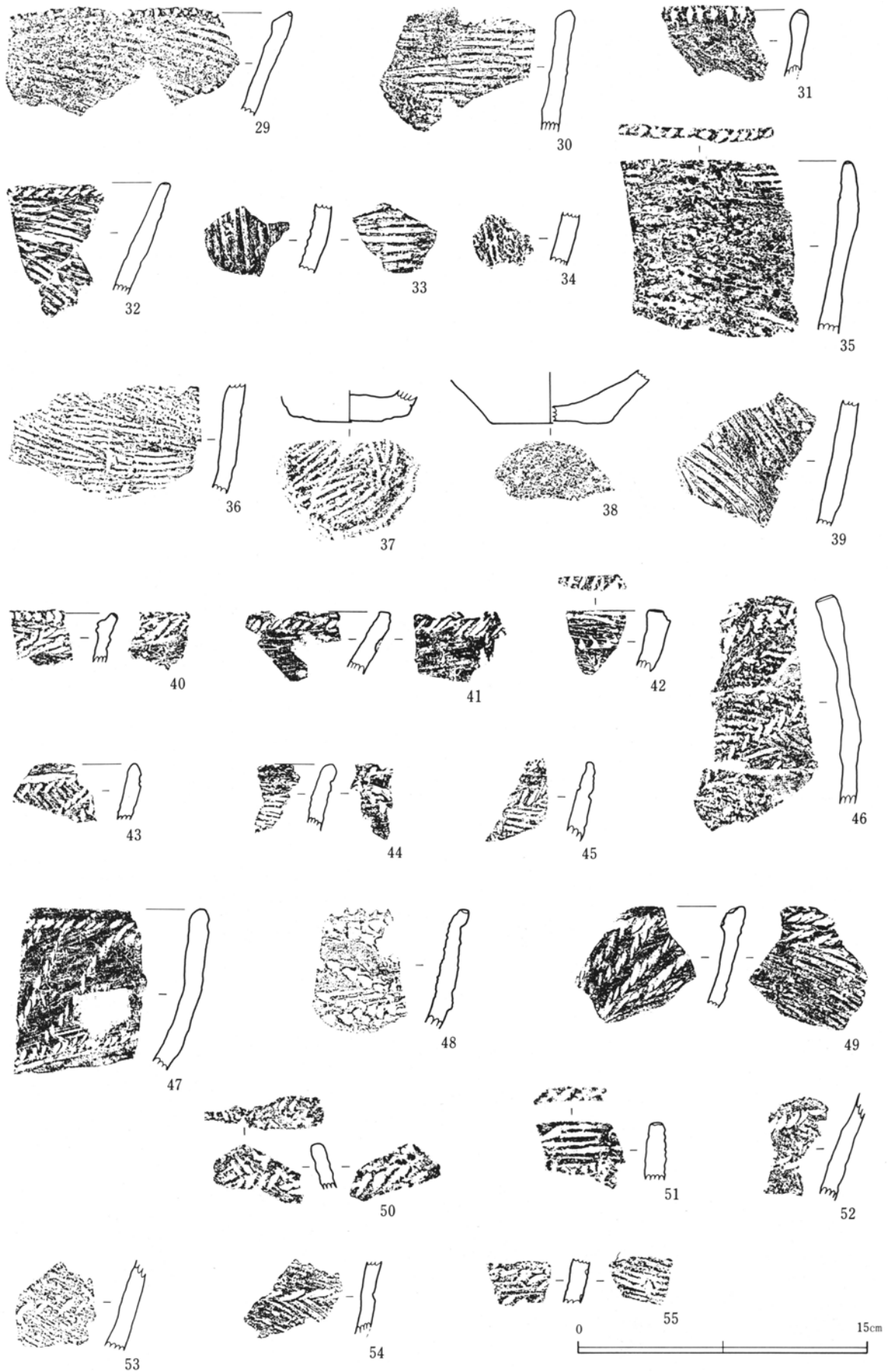
参考文献

- 芹沢長介・坪井清足他 1982 『縄文土器大成』 1  
 " 1981 『 " 』 2~4

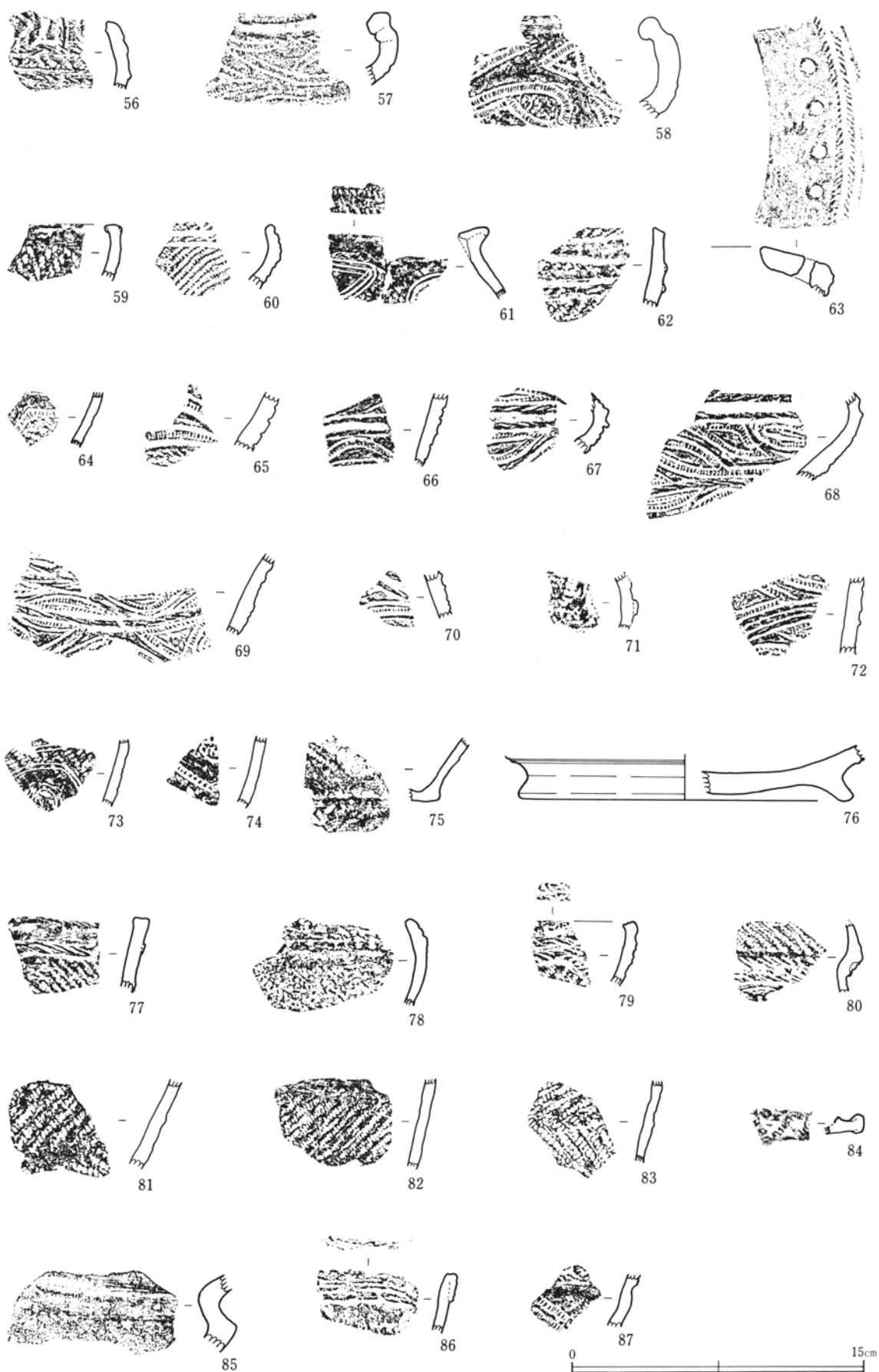


第14図 土器実測図①

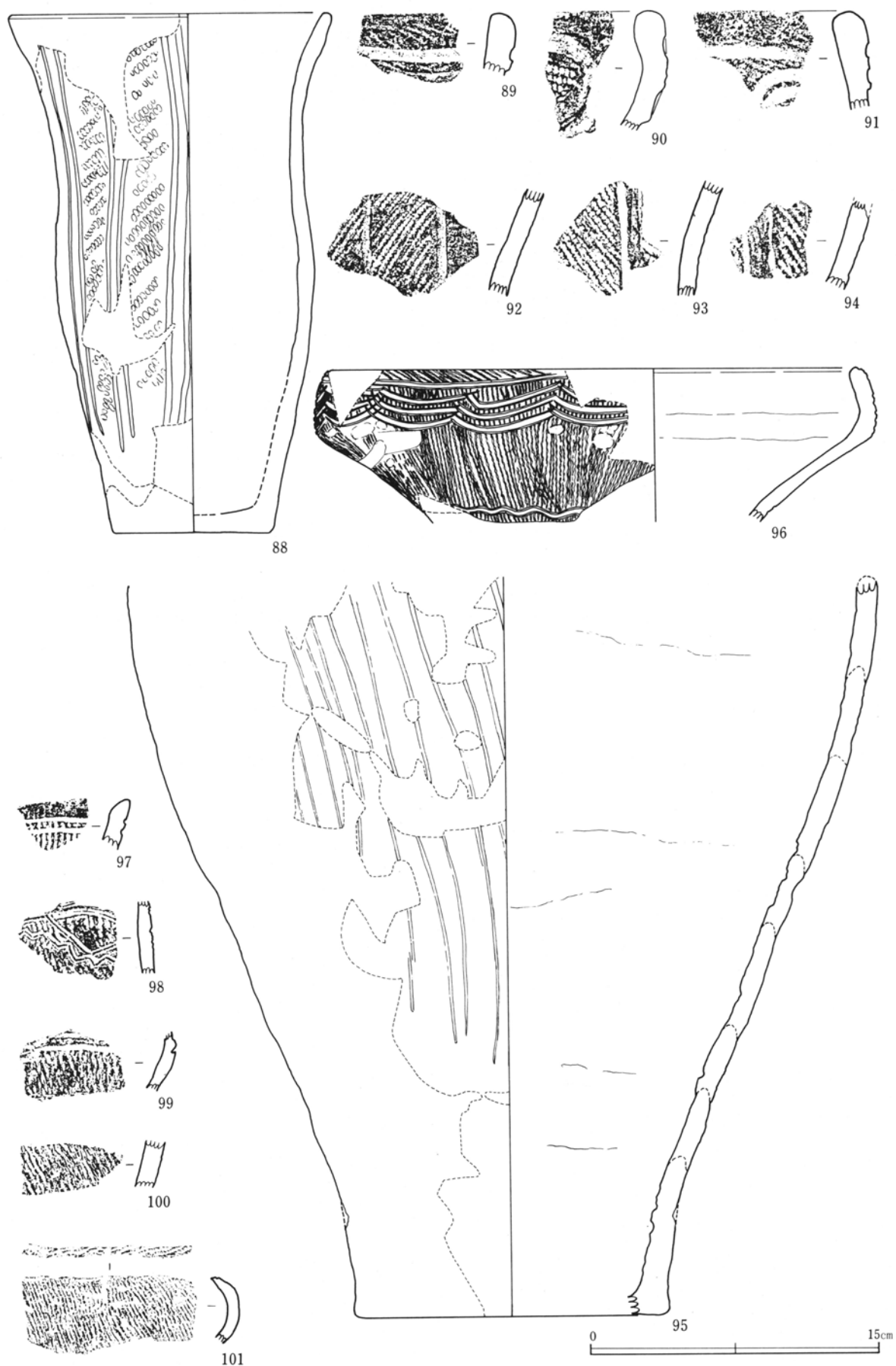




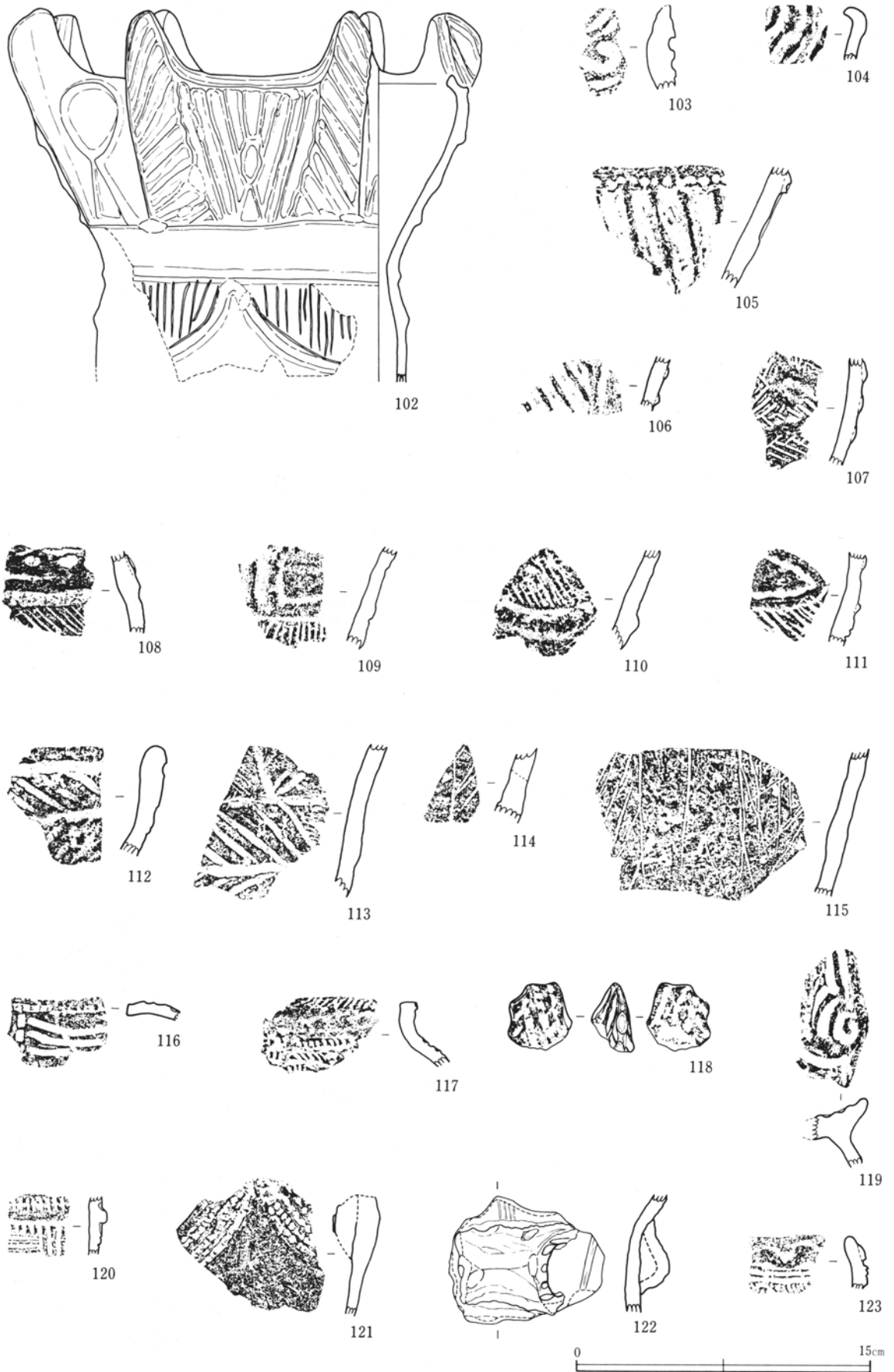
第15図 土器実測図②



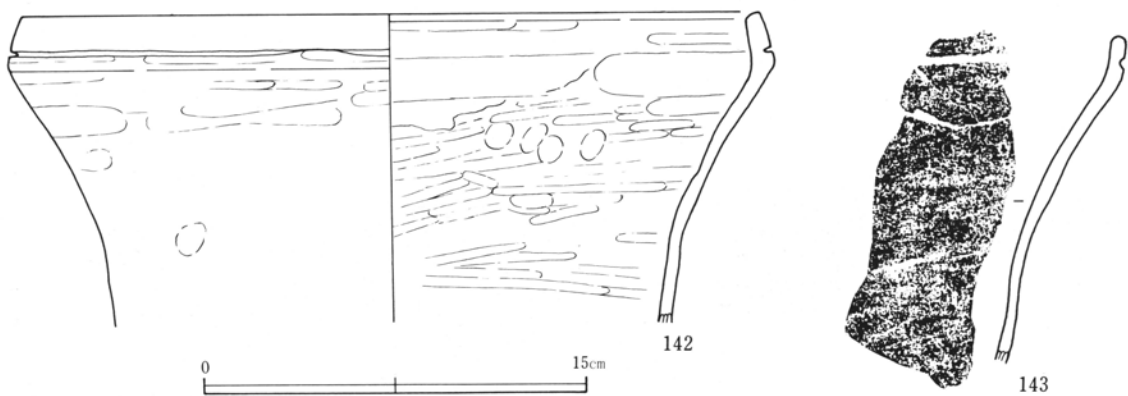
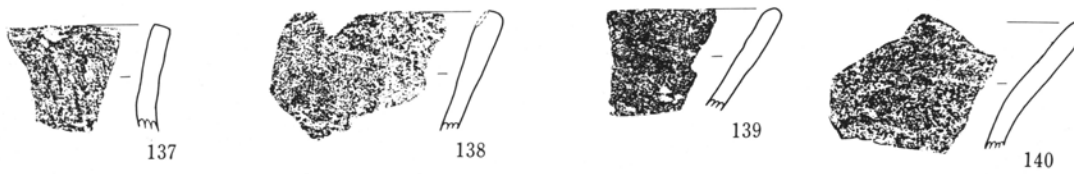
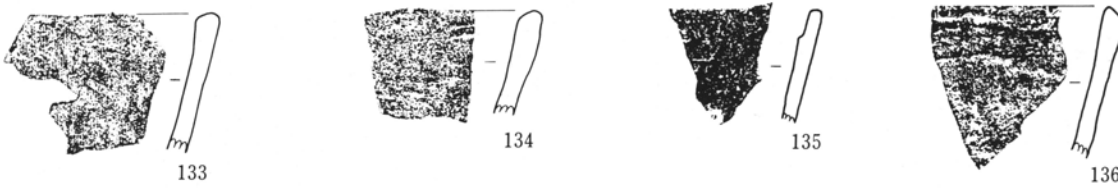
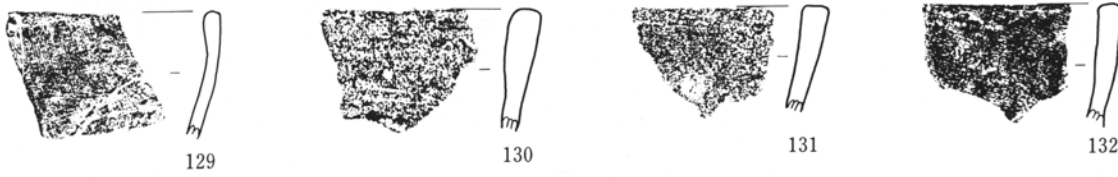
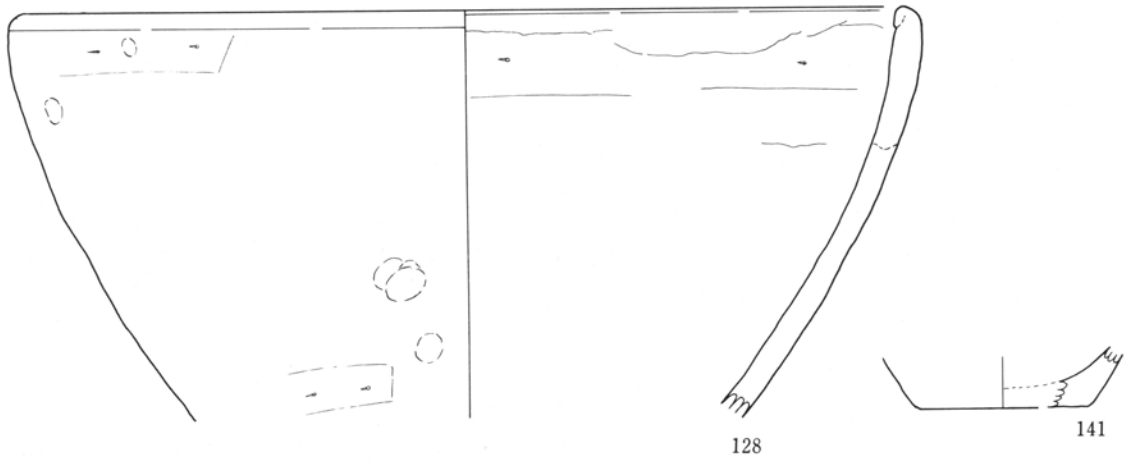
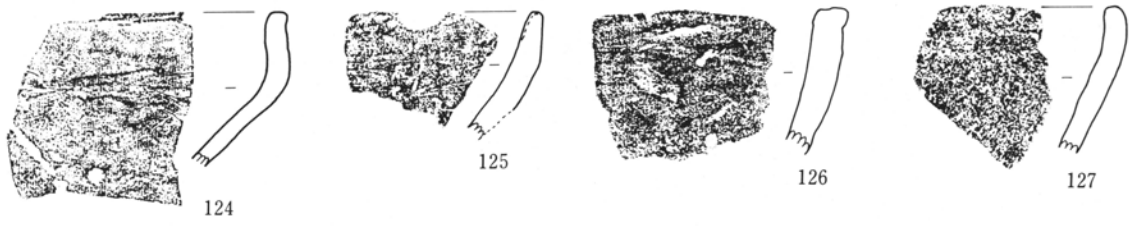
第16图 土器実測図③



第17图 土器実測図④

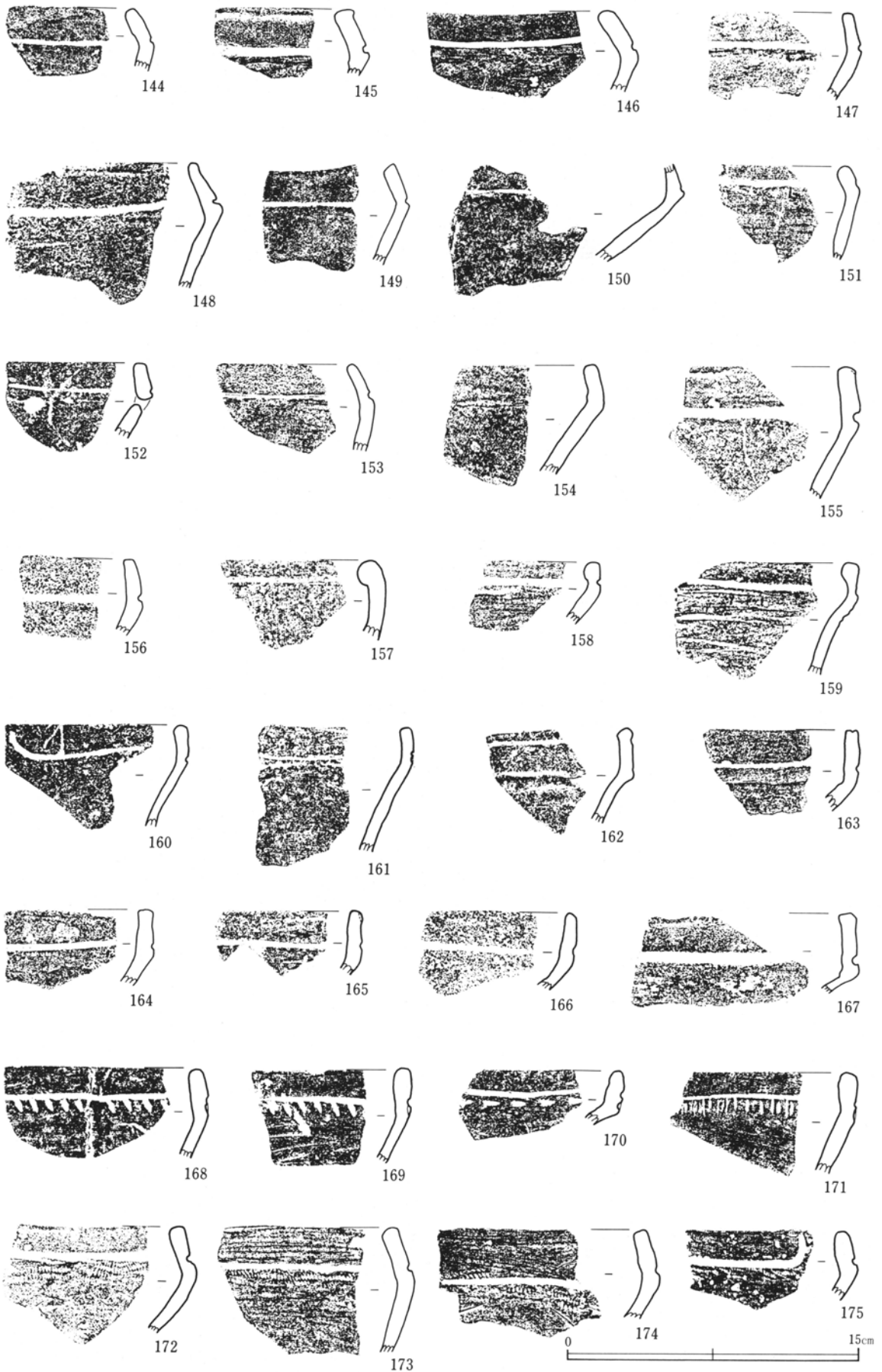


第18图 土器実測図⑤

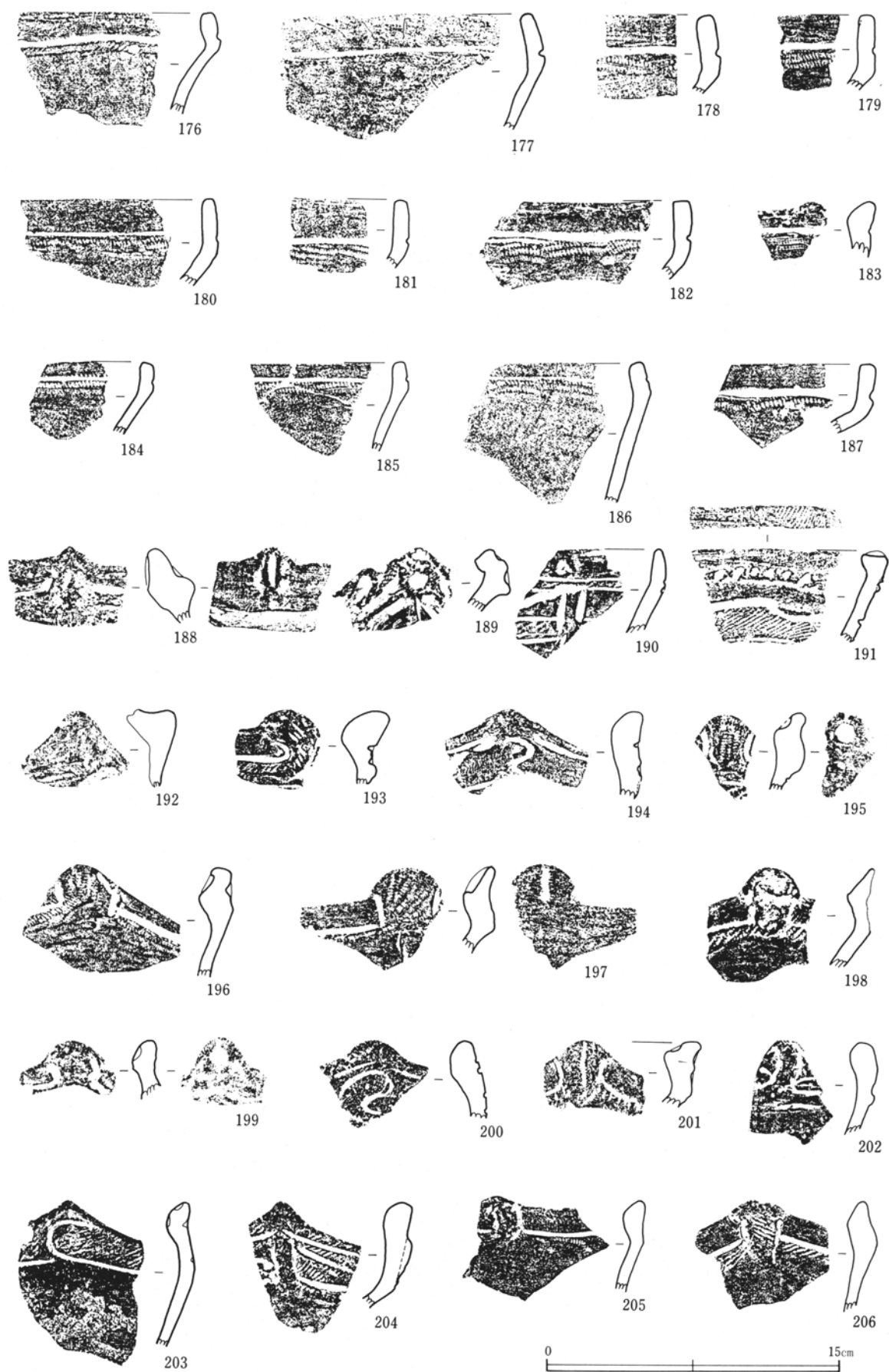


0 15cm

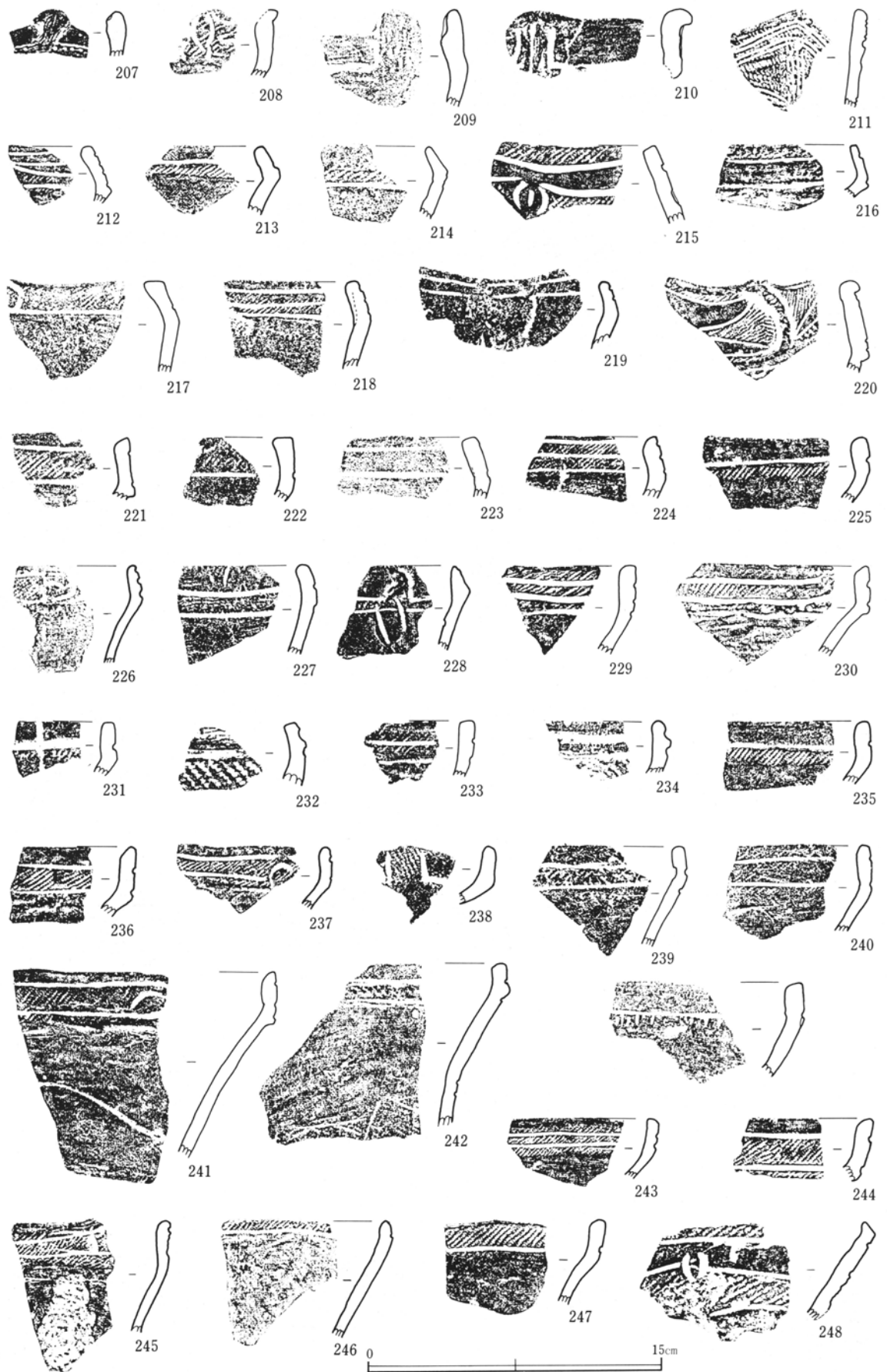
第19図 土器実測図⑥



第20图 土器实测图⑦

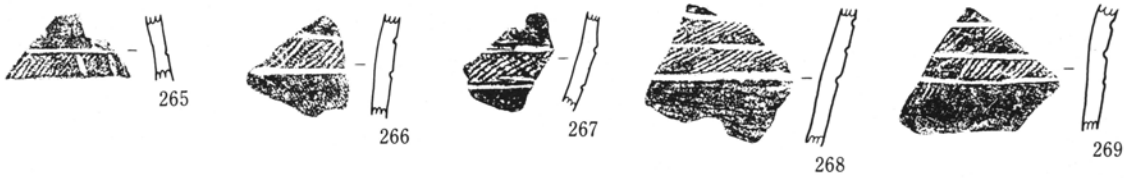
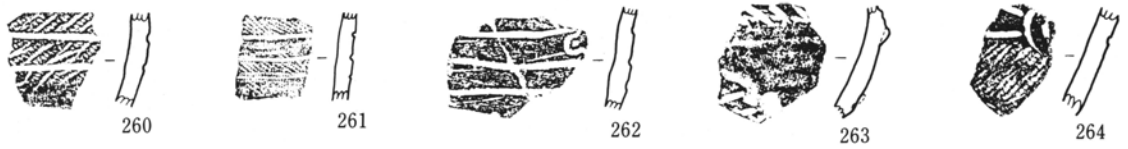
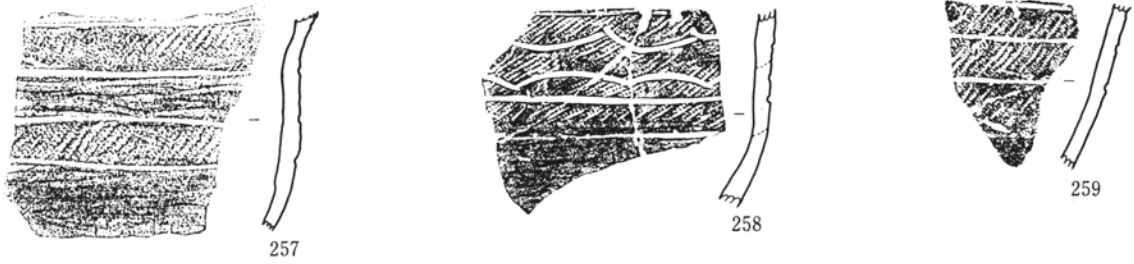
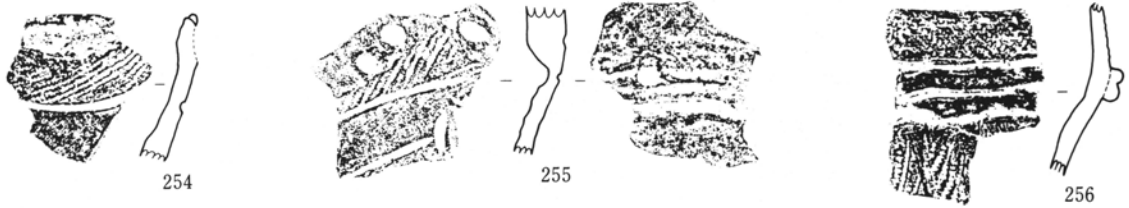


第21图 土器実測図⑧



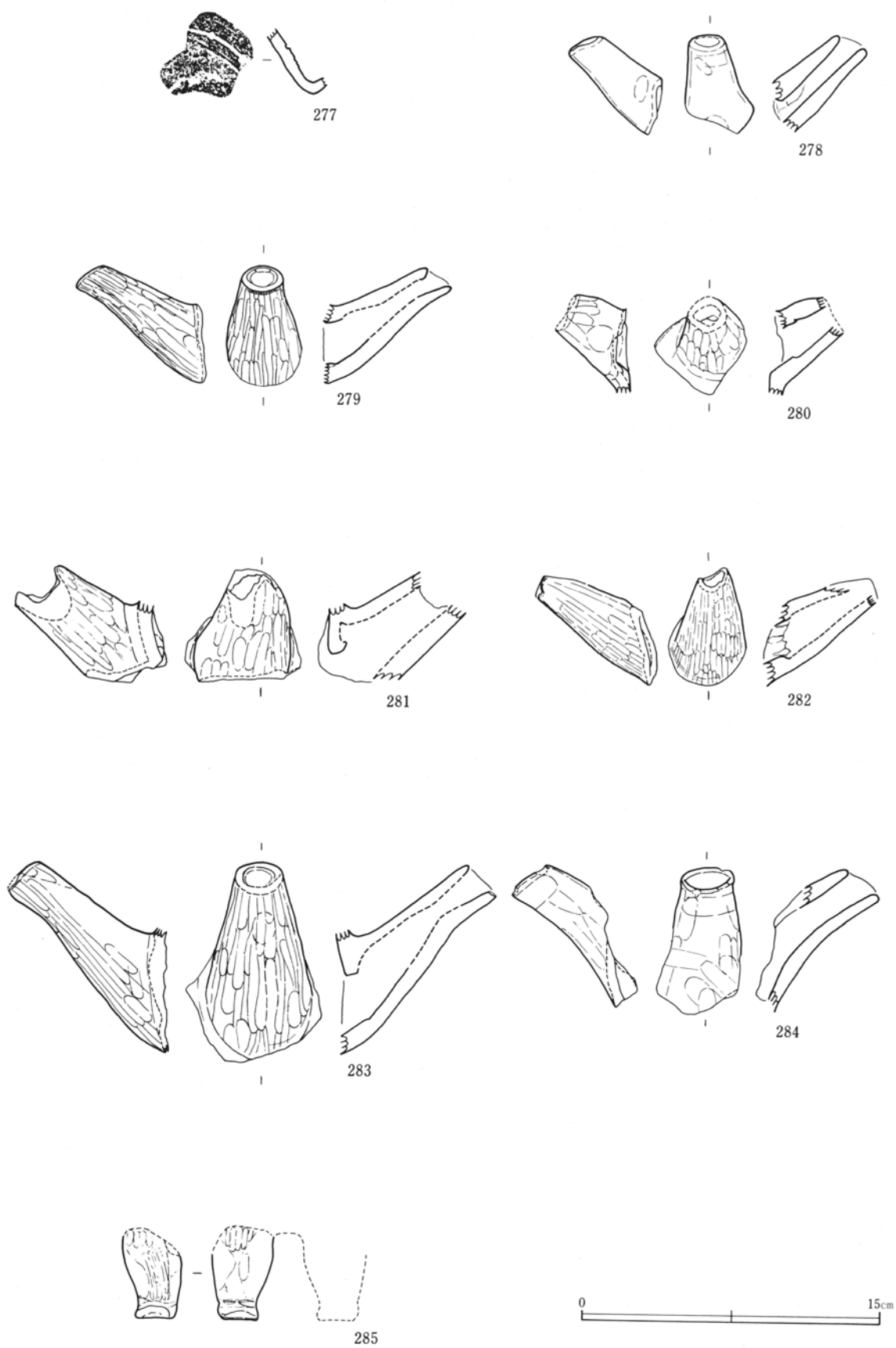
第22図 土器実測図⑨



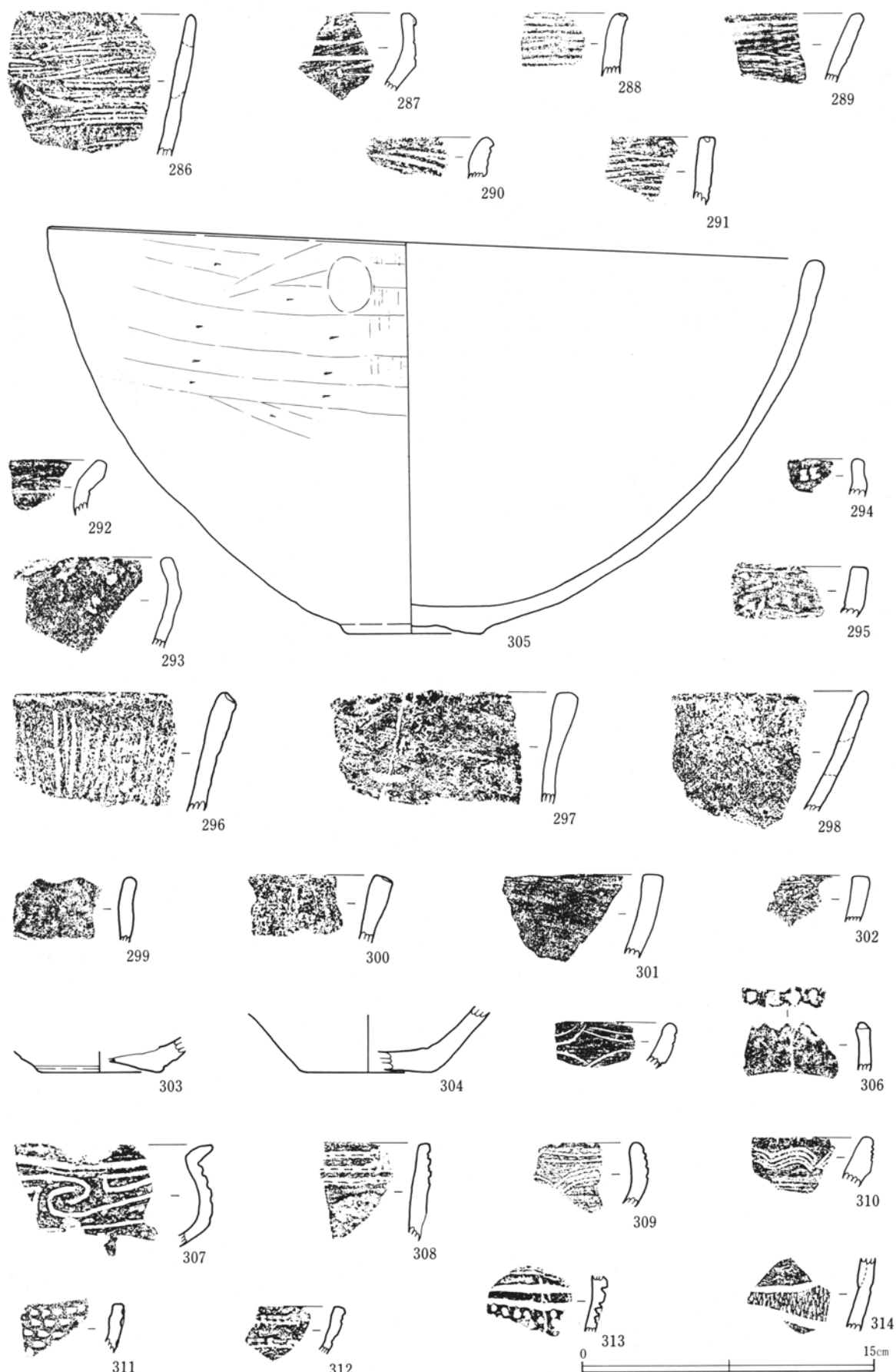


0 15cm

第23图 土器実測図⑩



第24图 土器实测图①·土製品实测图



第25图 土器実測图②

## 2 石 器

坂口遺跡から出土した石器は、土器の出土量に比べると相対的に少なく、出土地点も調査区全体に散在して分布する。器種としては打製石斧、磨製石斧、スクレーパー、石錐、石錘、石匙、石刀などがみられた。

これらの石質については、ガラス質石英安山岩、安山岩、黒曜石、チャート、片岩、結晶片岩、塩基性凝灰岩、溶結凝灰岩、流紋岩質溶結凝灰岩、変成岩などがみられた。なお石質については、本センターの楯真美子が鑑定を行った。

1001～1014は打製石斧である。形態的には短冊形と撥形とに分けられ、分銅形はみられない。形態が判別可能な14点の内では、短冊形が9点、撥形と思われるものが3点を占める。1001～1009・1011・1012は短冊形打製石斧である。石質は1001・1007の片岩以外は全て安山岩で占められる。大きさは長さ8～13cm、幅3～5cm、厚さ1～2cm、重さは25～150gを測る。側面観は縦断面が蒲鉾状を呈し、側縁部が直線状を成すものが多く、反り身のものほとんどみられない。刃部に摩耗痕がみられるものも少ない。1010・1013・1014は撥形打製石斧である。

1017・1018は磨製石斧の頭部片で、いずれも刃部は欠損している。形態的には稜がつくられるほどの極端な側縁部の研磨は認められず、断面形態が楕円形を呈する乳棒状磨製石斧である。石質は塩基性凝灰岩である。

1028～1051は石鏃である。形態的には有茎石鏃と無茎石鏃に大別できるが、基部は有茎石鏃が凹・平・凸基に、無茎石鏃が平・凹基にさらに分かれる。石質はガラス質石英安山岩とチャートで大半が占められ、黒曜石製は僅か2点である。

1019～1024はスクレーパーである。石質はチャートが半数以上を占め、安山岩、溶結凝灰岩製も認められる。使用痕のある剥片と思われるものは掲載しなかったが、30点ほど出土している。

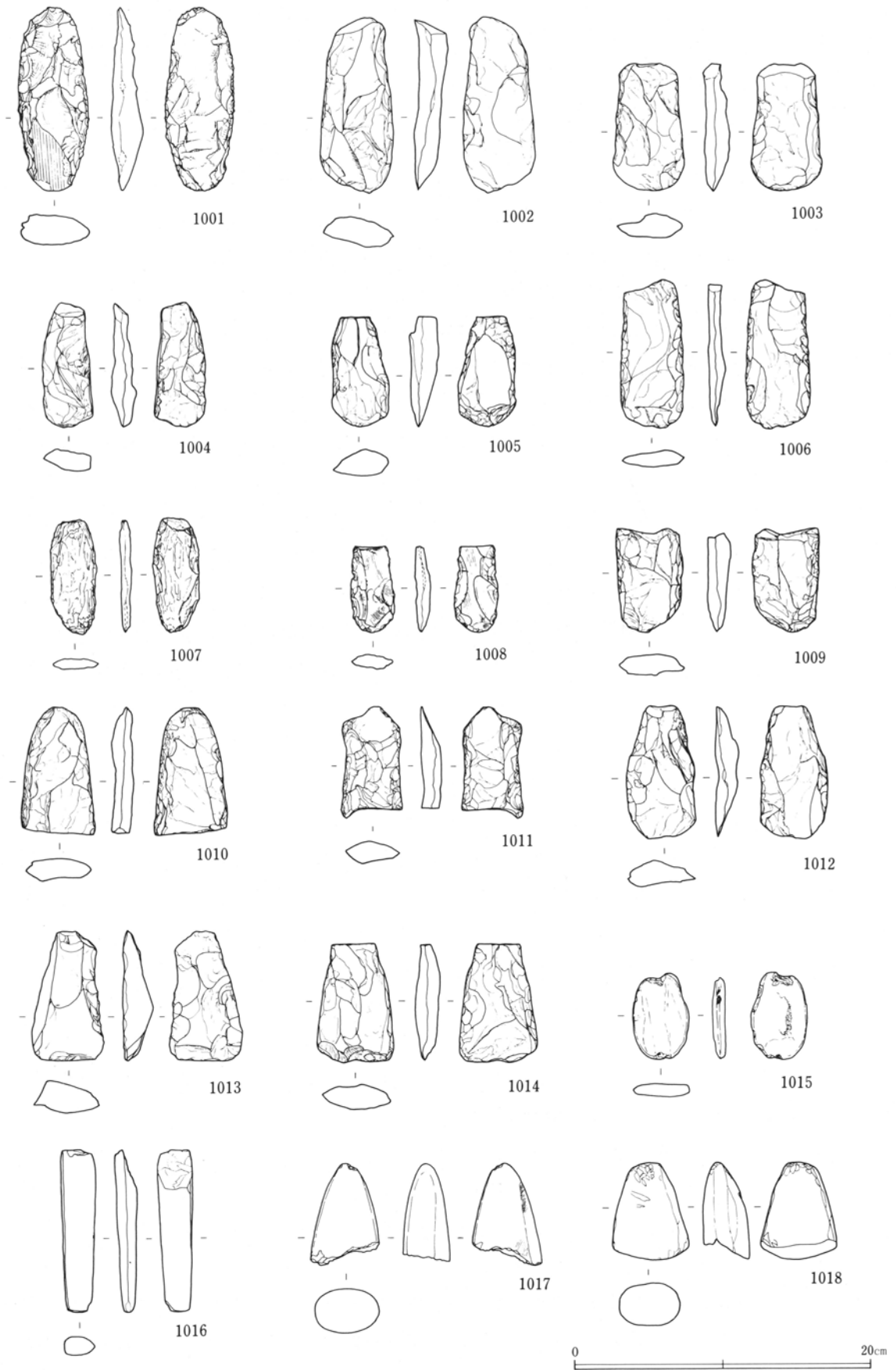
1015は礫石錘で1点のみ出土しており、偏平な河原石の長軸部を打ち欠いている。打ち欠き部の幅は上部が14mm、下部が12mm、打ち欠き間の最短距離は54mmを測る。石質は変成岩である。

1016は石刀で1点のみ出土している。頭部は欠損しており残存部から内反りの状況は判断し得ない。石質は塩基性凝灰岩である。

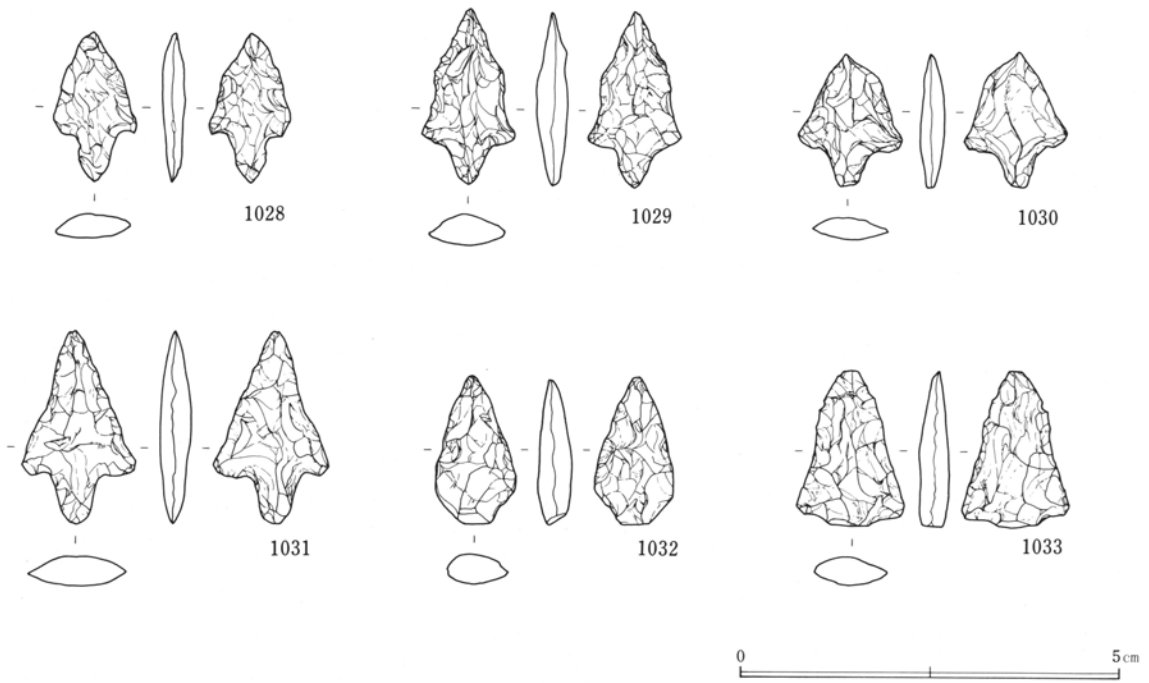
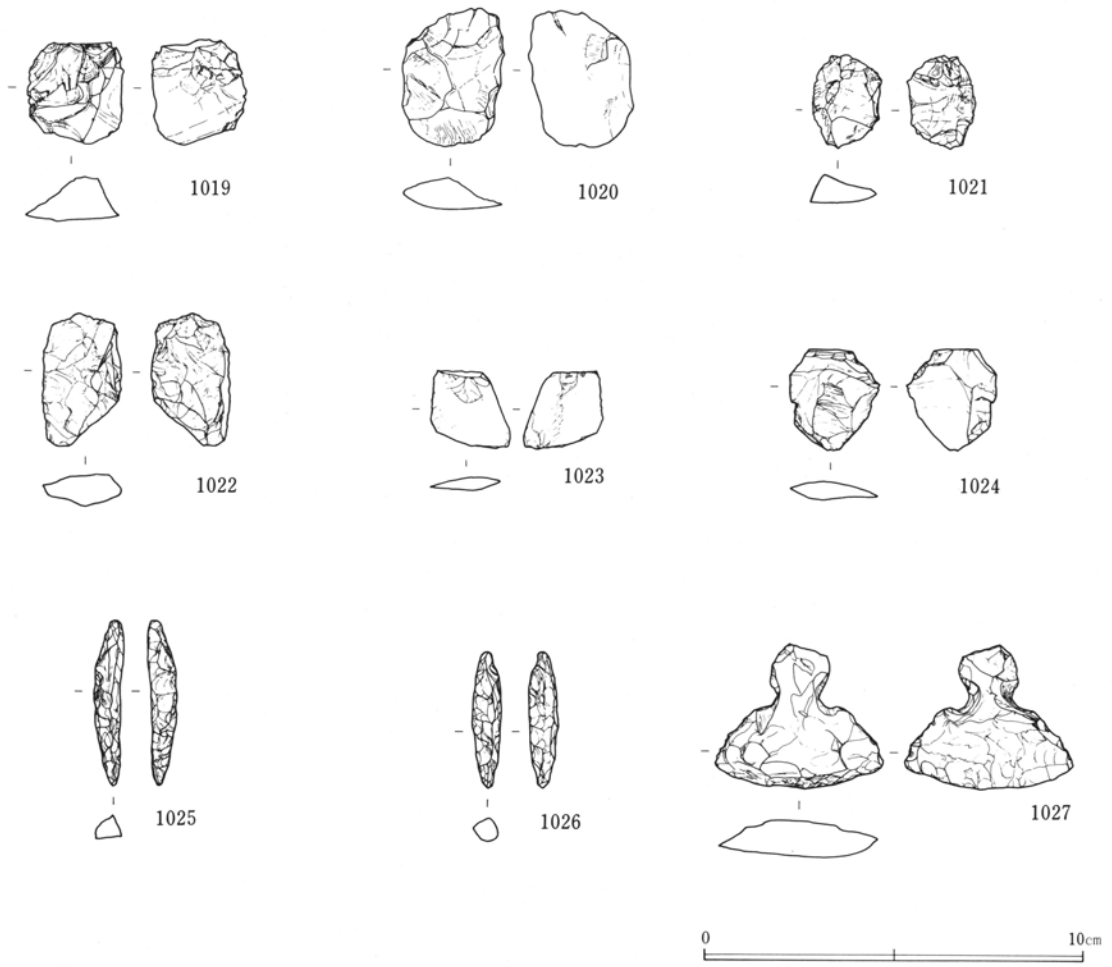
1025・1026は石錐である。断面形態は三角形に近く、つまみ状の頭部は持たず細身棒状である。石質はいずれもガラス質石英安山岩である。

1027は石匙で1点のみ出土している。形態としては横型で、つまみの位置はほぼ中央である。石質は流紋岩質溶結凝灰岩である。

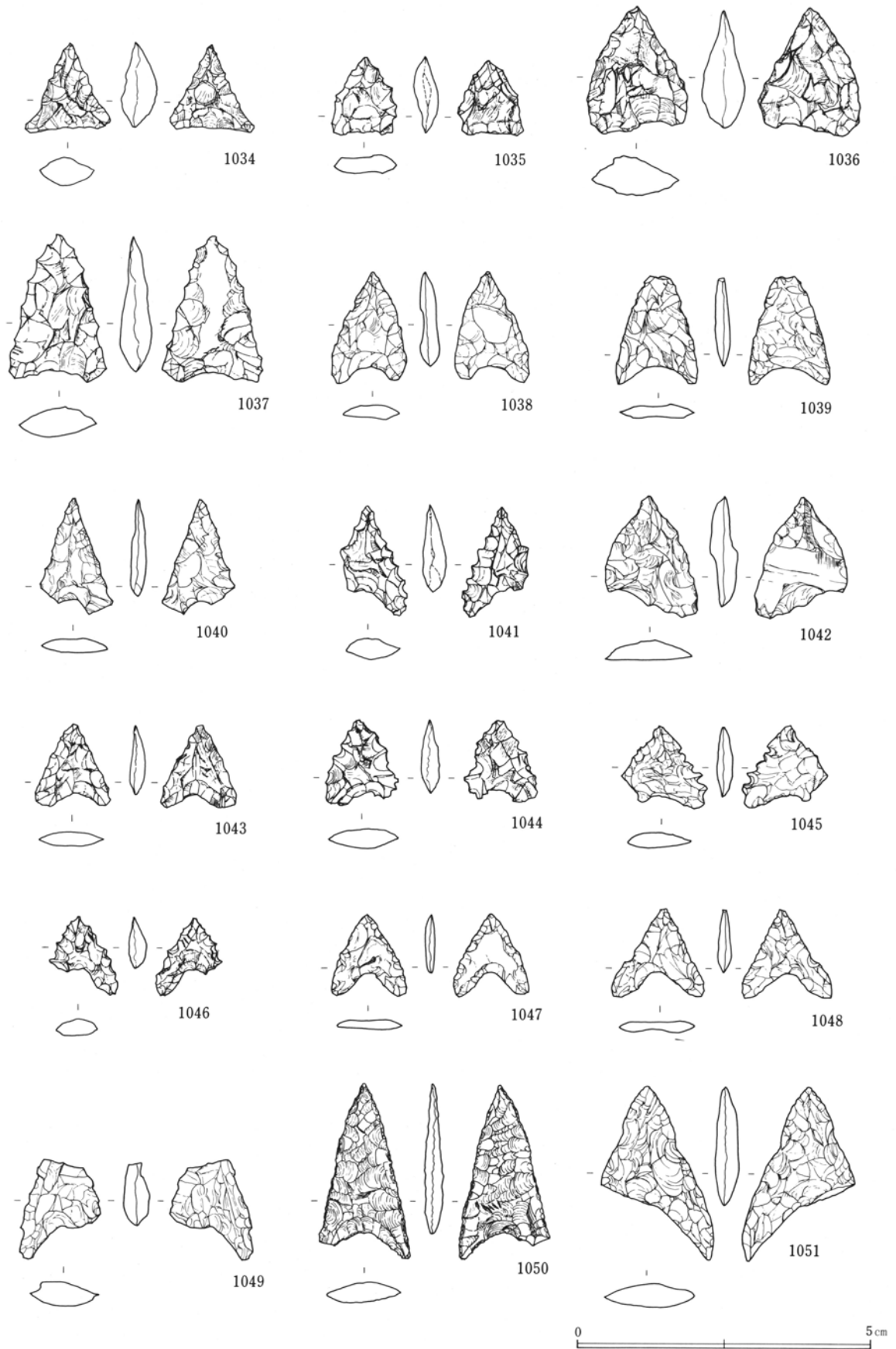
本遺跡出土の石器は、推定できる土器の時期から考えると、縄文時代早期から晩期に至るまでの長い時間幅に収まる。しかし、土器、石器ともに遺構からの伴出例が少ないため、時期の判定は困難となっている。



第26图 石器实测图①



第27图 石器实测图②



第28图 石器实测图③

## 第VI章 自然科学的分析

### 植物珪酸体分析

#### 1. はじめに

植物珪酸体は、植物体内で形成されたガラス質の細胞であり、植物が枯れた後も微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体（プラント・オパール）分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定、および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 1987）。

本調査は、同分析を用いて坂口遺跡における古植生・古環境の推定を試みたものである。

#### 2. 試料

試料は、西三河山間部に位置する坂口遺跡において、始良Tn火山灰（AT）起源と思われる地層上に堆積する縄文時代の土層を対象に採取された。試料数は計5点である。

#### 3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原, 1976）」をもとに、次の手順で行った。

- (1) 試料の絶乾（105℃・24時間）
- (2) 試料約1gを秤量，ガラスビーズ添加（直径約40μm，約0.02g）  
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- (3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- (4) 超音波による分散（300W・42KHz・10分間）
- (5) 沈底法による微粒子（20μm以下）除去，乾燥
- (6) 封入剤（オイキット）中に分散，プレパラート作成
- (7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重，単位： $10^{-5}$ g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算計数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はススキの値を用いた。その値はそれぞれ2.94（種実重は1.03）、6.31、1.24である（杉山・藤原, 1987）。タケ亜科については数種の平均値を用いて葉身重を算出した。ネザサ節の値は0.24、クマザサ属



は0.22である(杉山, 1987)。

#### 4. 結果および考察

縄文時代前期の遺物包含層(試料4, 5)、縄文時代早期の遺物包含層(試料2, 3)、およびその下位層(試料1)について分析を行った。その結果、いずれの試料からもタケ亜科Alaタイプ(ネザサ節など)およびその他のタケ亜科が多量に検出された(図29・30)。その他の分類群では、タケ亜科B1タイプ(クマザサ属など)や同B2タイプ(メダケ節など)、不明Bタイプ(ウシクサ族類似)、棒状珪酸体などが見られたが、いずれも少量である。

これらの結果から、縄文時代早期～前期はネザサ節などのタケ亜科植物が多く生育するイネ科植生が継続されたものと推定される。

なお、縄文時代前期の遺物包含層上部(試料5)からはイネが検出されたが、直上に攪乱層が認められることや、古墳時代以前にはほとんど検出例のないマダケ層が検出されていることから、上層から後代の植物珪酸体が混入した可能性が考えられる。

#### 5. 遺跡周辺の古環境

以上のように、坂口遺跡の縄文時代早期～前期の土層では、ネザサ節などのタケ亜科植物が多く生育するイネ科植生が継続されたものと考えられ、それ以外のイネ科植物の生育にはあまり適さない環境であったものと推定される。

ネザサ節などのタケ亜科植物は比較的乾いた土壌条件を好むことから、当時は比較的乾いた土壌条件で推移したものと推定される。また、ネザサ節は森林の林床では生育しにくいことから、当時の遺跡周辺は森林で覆われたような状況ではなく、比較的開かれた環境であったものと推定される。

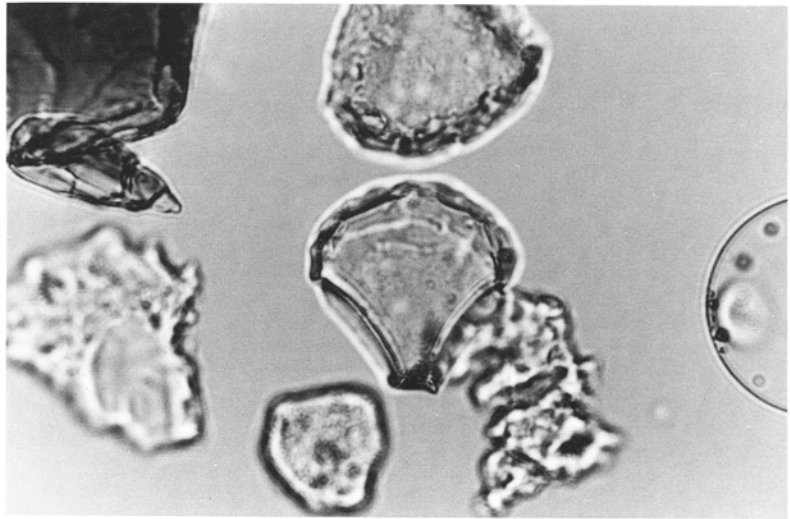
なお、ネザサ節などのタケ亜科植物はその有用性から燃料や道具、住居の屋根材や建築材などとして盛んに利用されていたものと考えられ、また鹿などの草食動物の食料としても重要であったものと考えられる。

#### 参考文献

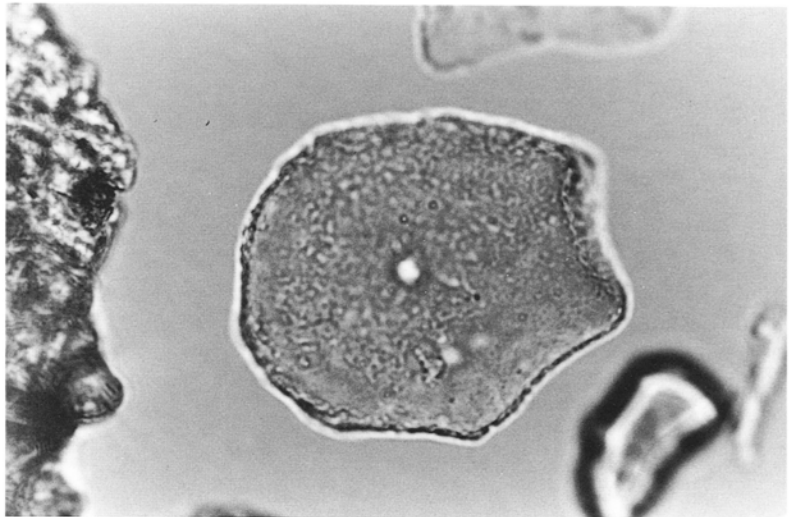
- 杉山真二. 1987. 遺跡調査におけるプラント・オパール分布の現状と問題点. 植生史研究, 第2号: 27-37
- 杉山真二. 1987. タケ亜科植物の機動細胞珪酸体. 富士竹類植物園報告, 第31号: 70-83.
- 杉山真二・藤原宏志. 1987. 川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析. 赤山-古環境編一. 川口市遺跡調査会報告, 第10集, 281-298.
- 藤原宏志. 1976. プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-. 考古学と自然科学, 9:15-29.
- 藤原宏志. 1979. プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)-福岡. 板付遺跡(夜臼式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(*O. sativa* L.)生産総量の推定-. 考古学と自然科学, 12:29-41.



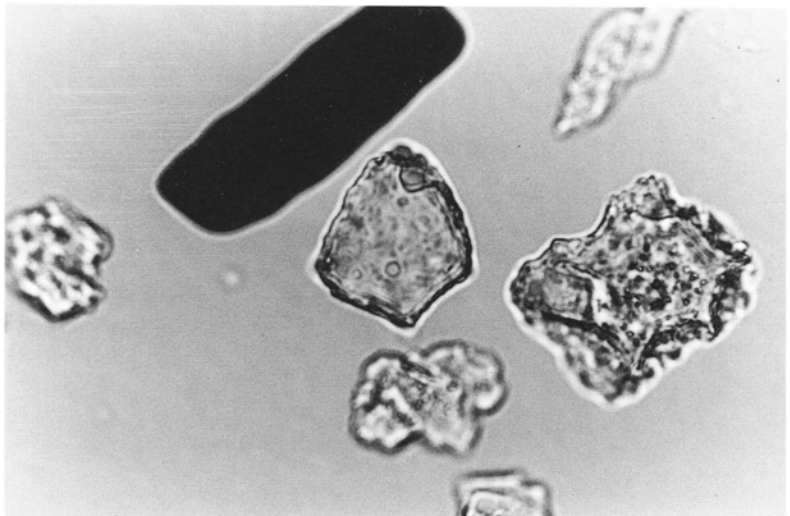
No. 1 (試料番号5)  
サヤマカグサ属 (アシカキ)



No. 2 (試料番号1)  
ヨシ属



No. 3 (試料番号3)  
タケ亜科B1タイプ (クマザサ属)



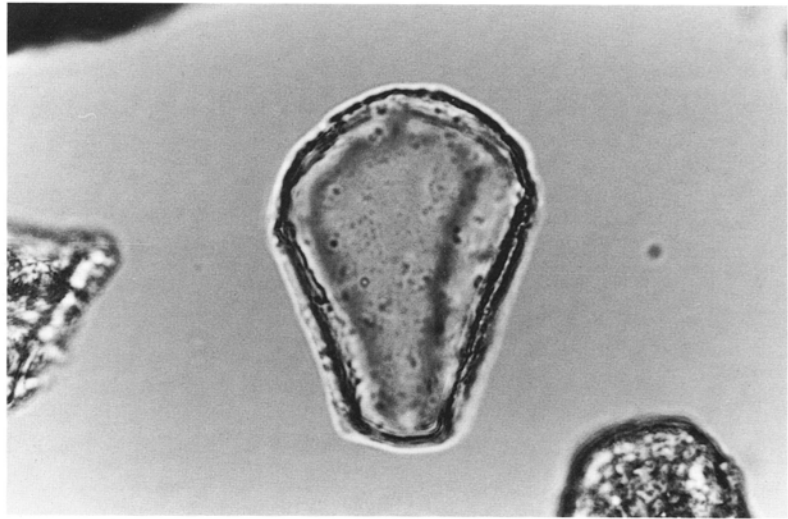
0 50 100 $\mu$ m

第29図 試料顕微鏡写真①

第VI章 自然科学分析

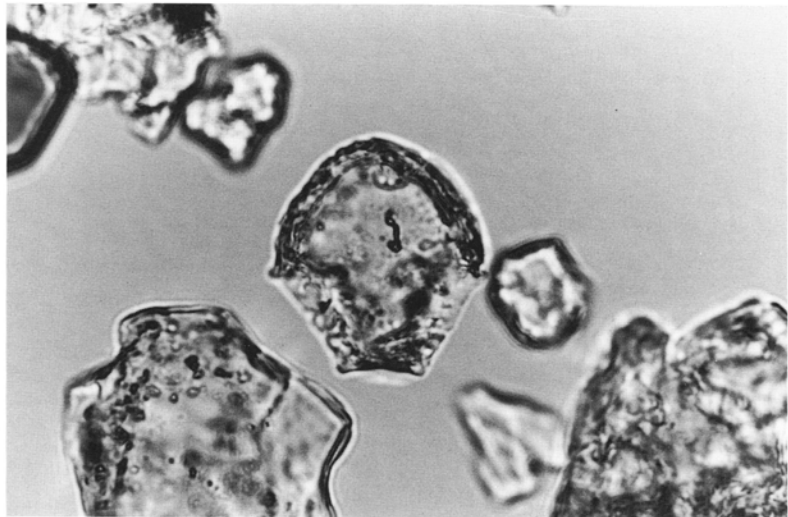
No. 4 (試料番号 1)

タケ亜科B2タイプ(メダケ属など)



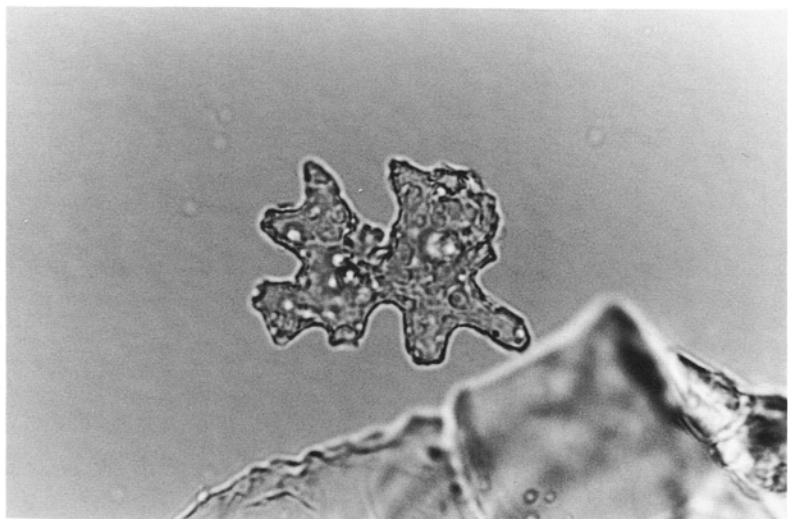
No. 5 (試料番号 5)

タケ亜科A2タイプ(マダケ属など)



No. 6 (試料番号 1)

樹木起源(広葉樹起源)



0 50 100  $\mu\text{m}$

第30図 試料顕微鏡写真②

## 第Ⅳ章 まとめ

本遺跡では調査の結果、遺物の一括性はあまり認められなかったものの、縄文時代の人々の足跡が印されていることが判った。ここに今回の発掘調査の意義、問題点について簡単に触れておく。

本遺跡の周辺地域で確認されている遺跡の大半は、坂口遺跡の例のみならず、分布調査などによる表面採集資料の確認のみであり、遺構など遺跡の実体が確認できているものはほんの数例である。

本遺跡の調査区は、愛知県遺跡分布地図に記載されている「坂口遺跡」(遺跡番号69022)の範囲における北西端にあたる。今回の調査で、縄文時代の遺構、遺物は調査区の東側においてより密に分布する状況が認められた。

91・92年度調査区は、結果的に矢作川に向かう南北方向の浅い谷を北東から南西に掘り下げたことになった。谷の中心軸は遺物包含層がより厚く堆積している91年度調査区中に求められそうであるが、この中から出土した遺物にはいくつかの点で片寄った状況が窺える。出土土器には口縁部、体部などの部位はみられるが、底部が極端に少なく、土器の出土量に比べて石器の出土量が少ないなどの点がそれらの状況である。さらに、住居跡状の掘り込みなど居住空間を思わせる遺構や、遺物は未検出のままに留った。旧地形、出土遺物の構成及び出土状況、検出遺構などの点から考えると、調査区の設定地点は居住空間とは考えにくく、出土遺物についても二次的な堆積の可能性が考えられる。したがって遺跡の中心は、旧地形の谷筋をさらに登った方向に求められよう。

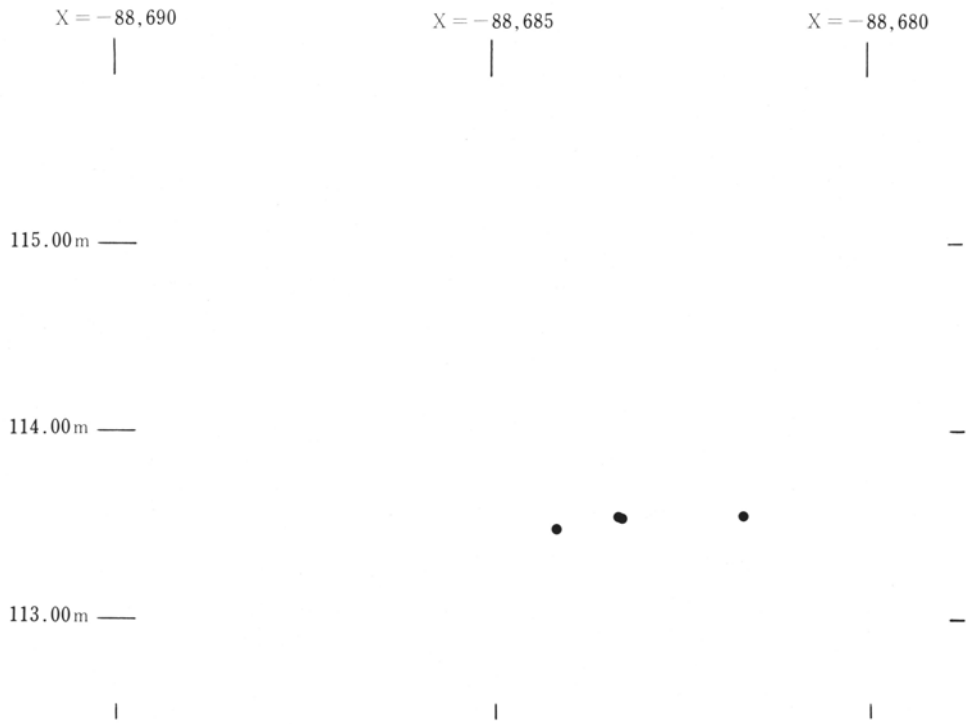
坂口遺跡における時間軸上の位置確認を出土土器片に求めると、縄文時代早～晩期までの各時期のものが認められる。その遺物を時期別に垂直分布図として図示したのが第31～35図である。これらの図は旧地形の変化が少ない91年度調査区を、南北座標軸の西側調査区外から東方向に向かって見通したものである。したがって図の中では、左側が南(山側)、右側が北(矢作川側)方向となる。但し、旧地形の変化が少ないといっても緩やかな谷であるため、東西方向に見通した場合、南北軸に対して均一な堆積とはなり得ない。第Ⅲ群(中期)の分布が第Ⅱ群(前期)と比較して低い位置に分布するかのように見えるのは、出土地点が谷の中心近くに集まっていたためと思われる。

出土した石器については遺構内からの土器伴出がないため、時期を決定することができなかった。したがって時期別ではなく、91年度調査区全体の出土石器を垂直分布図にしたのが第36図である。垂直分布状況のみから判断すると3グループに分かれそうであるが、標高114.5m前後の一群(1012・1026・1029・1030・1051)は土器の垂直分布とは全く重ならないため、後世の攪乱によるものかもしれない。出土地点はいずれも91年度調査区の南東側で、この調査区内の旧地形がやや高まる部分である。

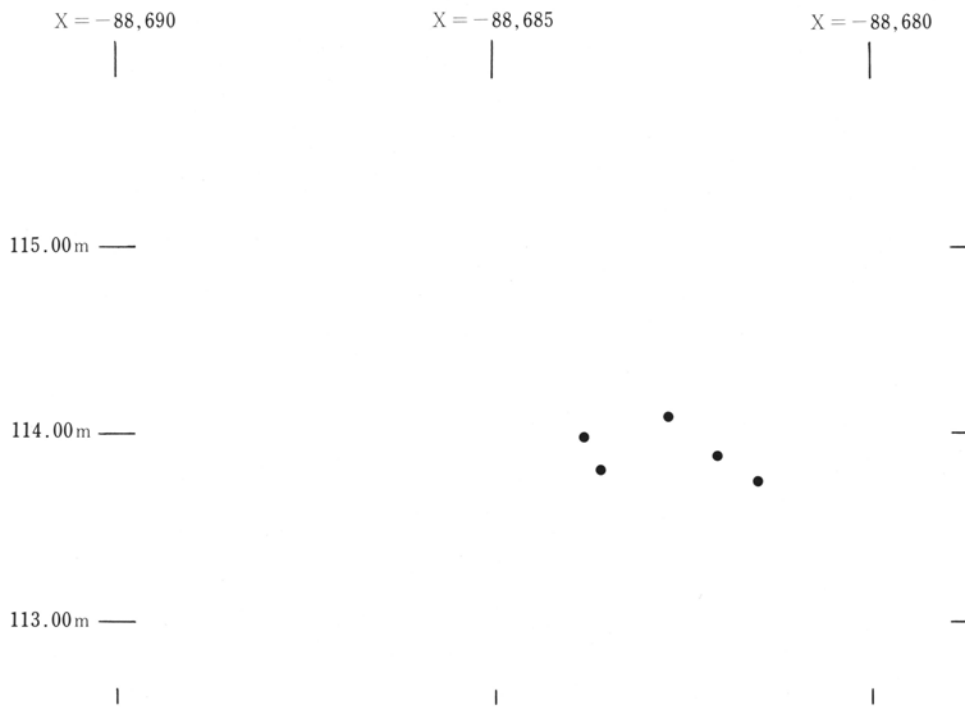
91・92年度両調査区の出土石器平面分布を求めたものが、第37図である。出土地点の密度としては、91年度調査区の方がやや多いが、両調査区全体に散在しており器種別の片寄りも認められなかった。

出土土器については全体を各時期ごとに群として捉え、それぞれの時期の中で前後関係を考えるに留めたが、早期から晩期まで数千年の間の継続関係は判じ得なかった。しかし、早～晩期という長期において掲載したような出土遺物が認められる以上、遺跡の中心が存在したであろう場所は、狩猟・採集生活を営んだ縄文人にとって生活条件の整った場所であったはずである。本遺跡の所在する矢作川に近い緩やかな斜面の広がりには、植物珪酸体の分析結果からネザサ節などのタケ亜科植物が生育する、開かれた（森林で覆われていない）比較的乾いた土壌条件の土地であったと推定されている。タケ亜科植物は燃料や道具、屋根材、建築材、草食動物の食料として有用とされる。こうした自然環境と、時間幅の広い遺物の出土は無関係ではないであろう。

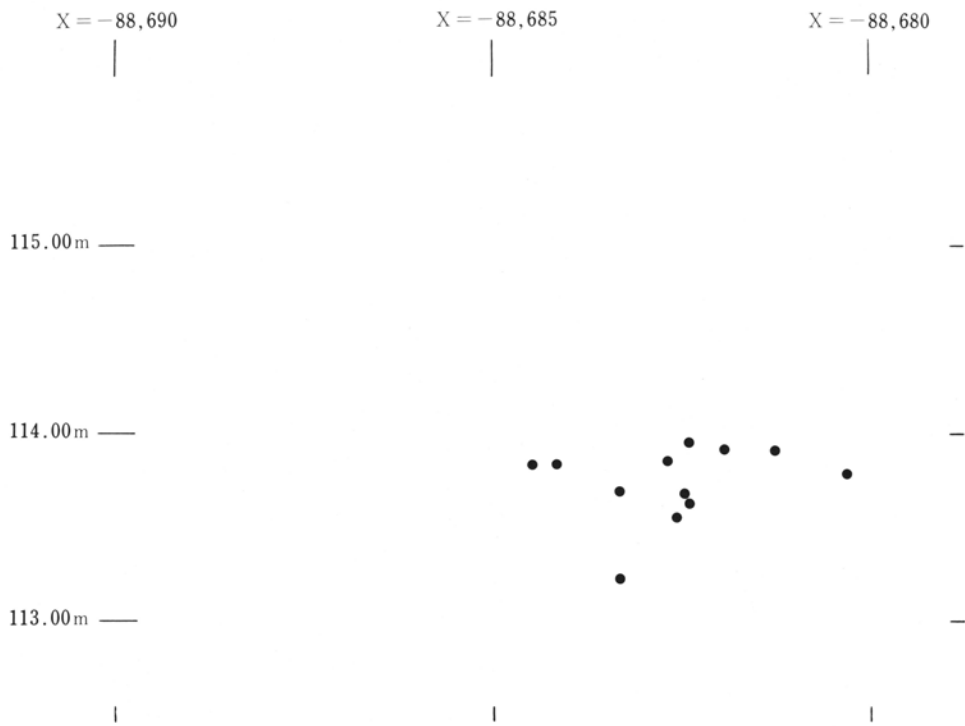
本遺跡の調査により確認できた遺構、遺物は、当地域の縄文時代の人々の足跡を考えるとき、有効な資料となるであろう。さらに検出された各時期の遺物は幅広い時間幅に収まるが、当該期における様相が未解明であるこの地域にあっては、こうした資料の増加がさらに望まれるところである。



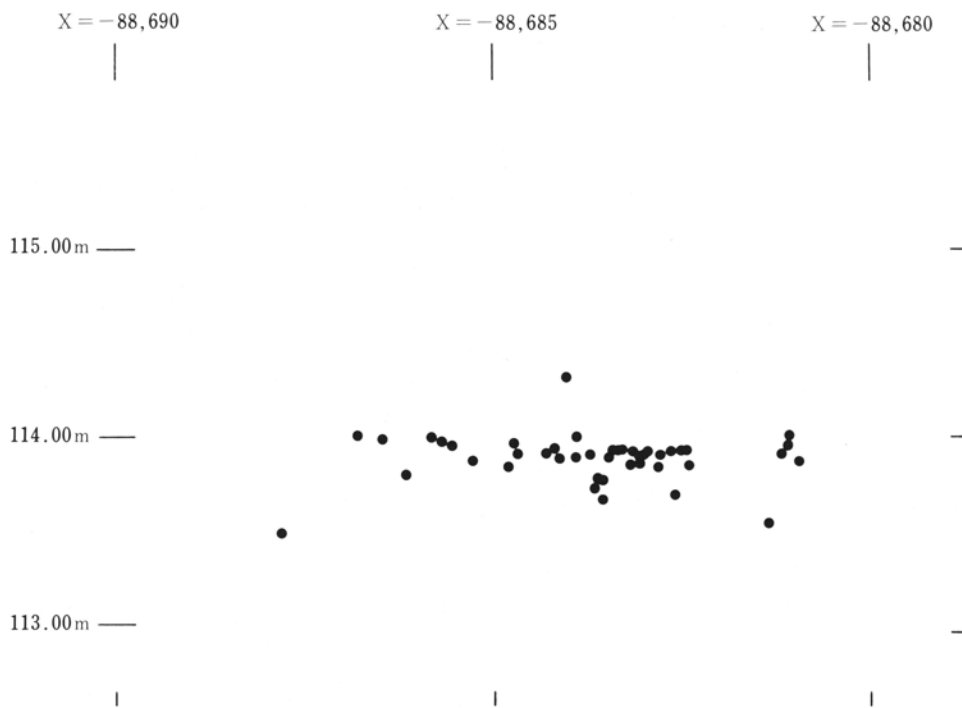
第31図 III AS91第I群土器垂直分布図



第32図 III AS91第II群土器垂直分布図

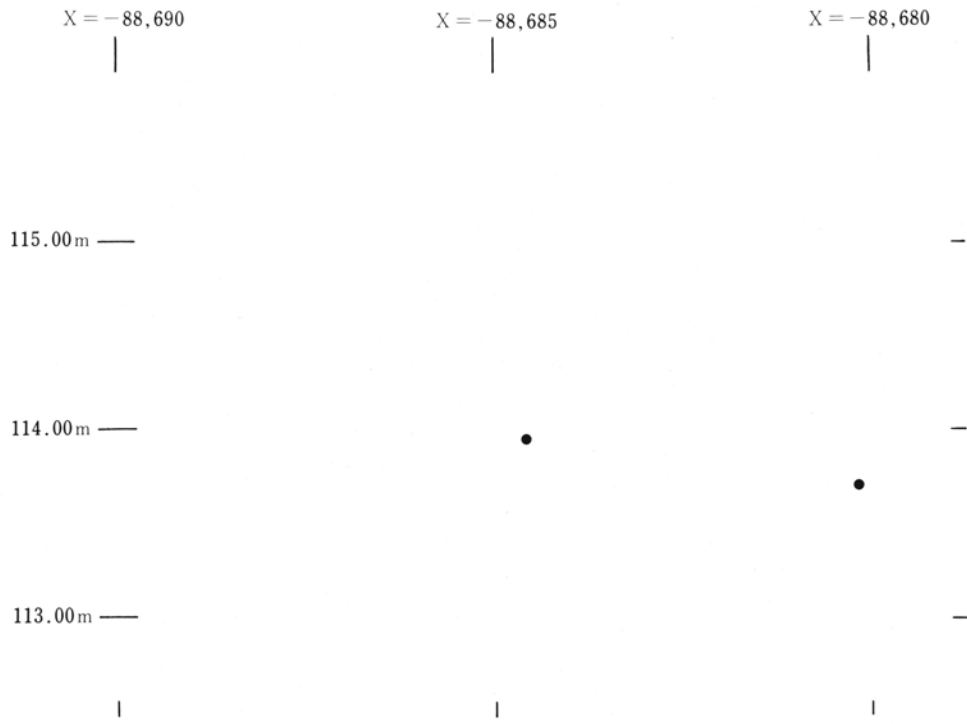


第33図 Ⅲ AS91第Ⅲ群土器垂直分布図

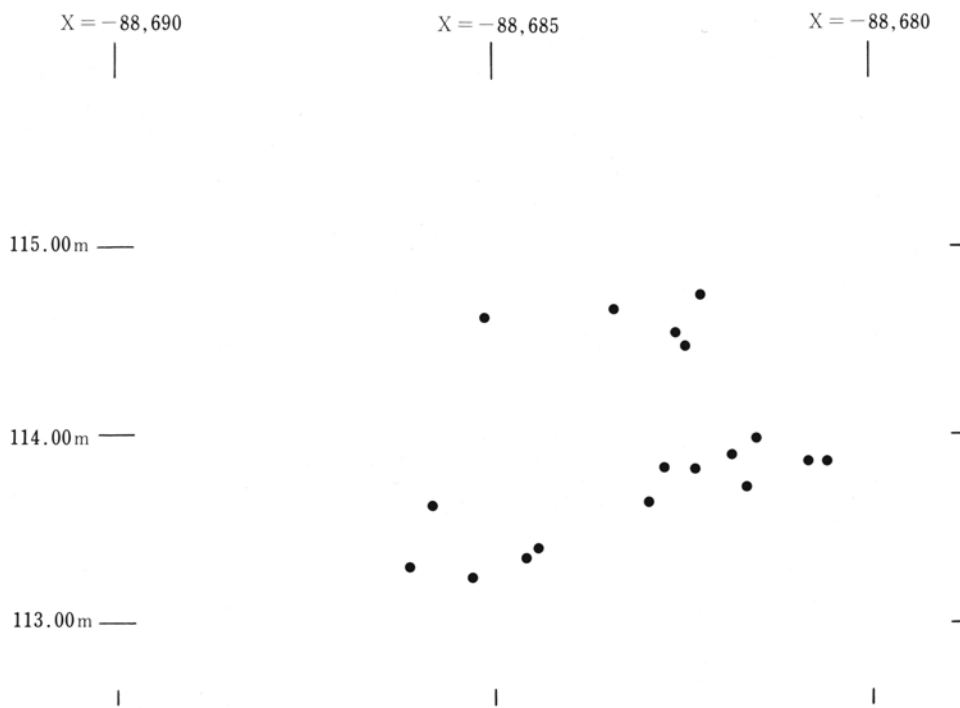


第34図 Ⅳ AS91第Ⅳ群土器垂直分布図

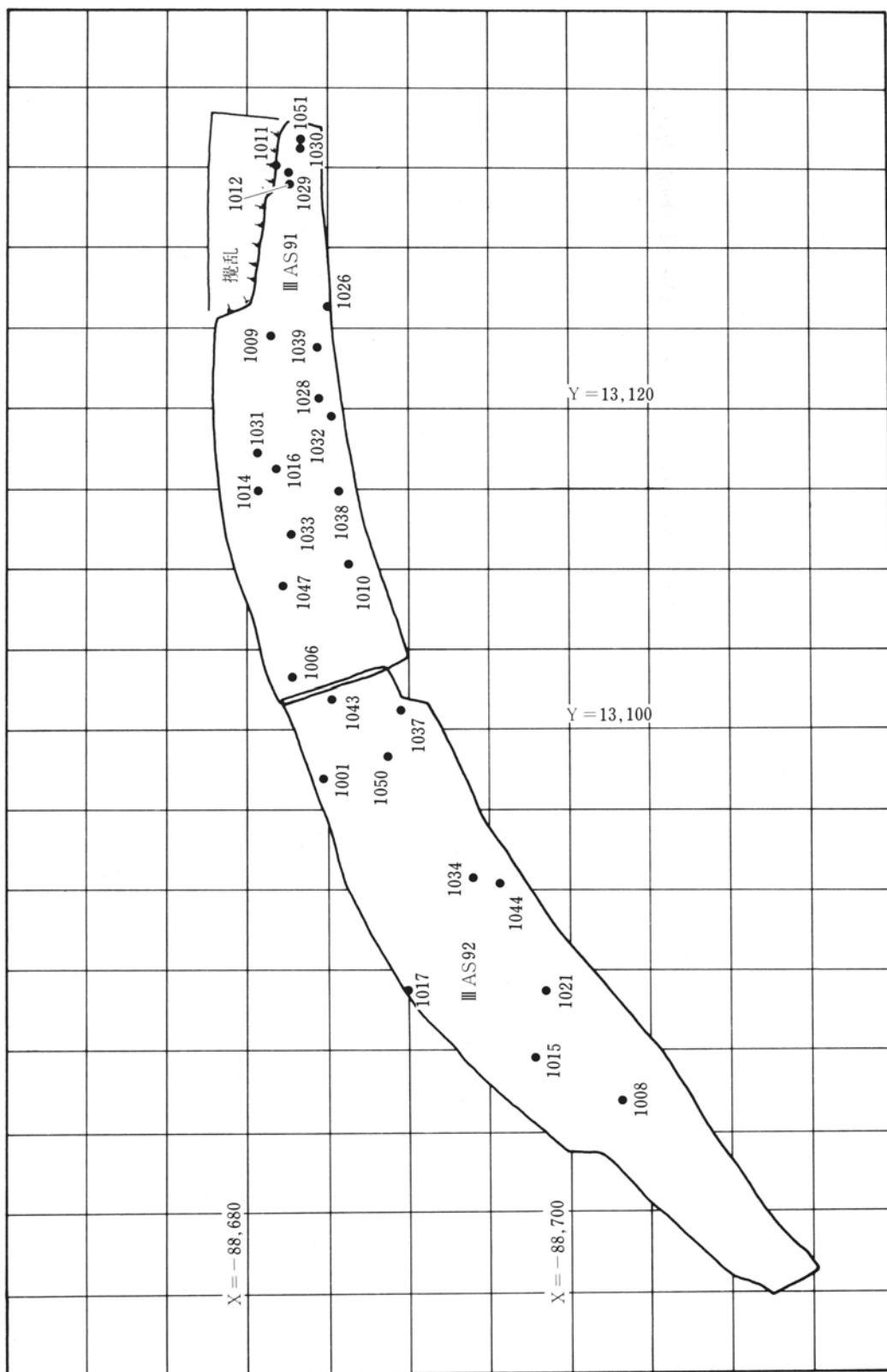




第35図 III AS91第Ⅰ群土器垂直分布図



第36図 III AS91石器垂直分布図



第37図 Ⅲ AS91・92石器平面分布図

付

表

遺物 番号	挿 図	遺構など	器 種	登 録 番 号
1	14	SK120	深鉢	E-1
2			深鉢	E-2
3		検出	深鉢	E-3
4			深鉢	E-4
5		黒色土	深鉢	E-5
6		SK205	深鉢	E-6
7			深鉢	E-7
8			深鉢	E-8
9		南壁トレンチ	深鉢	E-9
10		黒色土	深鉢	E-10
11			深鉢	E-11
12			深鉢	E-12
13		黒色土	深鉢	E-13
14		検出	深鉢	E-14
15			深鉢	E-15
16		黒色土	深鉢	E-16
17		検出	深鉢	E-17
18		黒色土	深鉢	E-18
19			深鉢	E-19
20		黒色土	深鉢	E-20
21		検出	深鉢	E-21
22			深鉢	E-22
23			深鉢	E-23
24		黒色土	深鉢	E-24
25			深鉢	E-25
26		黒色土	深鉢	E-26
27		黒色土	深鉢	E-27
28			深鉢	E-28
29	15	検出	深鉢	E-29
30		黒色土	深鉢	E-30
31		検出	深鉢	E-31
32		検出	深鉢	E-32
33		SK215	深鉢	E-33
34		SK11	深鉢	E-34
35		SX02	深鉢	E-35
36			深鉢	E-36
37			深鉢	E-37
38		検出		E-38
39			深鉢	E-39
40		検出	深鉢	E-40
遺物 番号	挿 図	遺構など	器 種	登 録 番 号
41	15		深鉢	E-41
42			深鉢	E-42
43		黒色土	深鉢	E-43
44		SX02	深鉢	E-44
45		黒色土	深鉢	E-45
46		黒色土	深鉢	E-46
47			深鉢	E-47
48			深鉢	E-48
49		検出	深鉢	E-49
50		黒色土	深鉢	E-50
51		黒色土	深鉢	E-51
52		黒色土	深鉢	E-52
53			深鉢	E-53
54			深鉢	E-54
55		SK01	深鉢	E-55
56	16	黒色土	深鉢	E-56
57			浅鉢	E-57
58			浅鉢	E-58
59		南壁トレンチ	深鉢	E-59
60		黒色土	深鉢	E-60
61		黒色土	深鉢	E-61
62		黒色土		E-62
63			浅鉢	E-63
64		黒色土	深鉢	E-64
65			深鉢	E-65
66		南壁トレンチ	深鉢	E-66
67		黒色土	浅鉢	E-67
68		黒色土	深鉢	E-68
69		黒色土	深鉢	E-69
70		黒色土	浅鉢	E-70
71			深鉢	E-71
72		黒色土	深鉢	E-72
73		検出	深鉢	E-73
74		黒色土	深鉢	E-74
75			深鉢	E-75
76			浅鉢	E-76
77		黒色土	深鉢	E-77
78		黒色土	深鉢	E-78
79			深鉢	E-79
80			深鉢	E-80

第6表 土器一覧表(1)

遺物 番号	挿 図	遺構など	器 種	登 録 番 号
81	16	検出	深鉢	E-81
82		検出	深鉢	E-82
83			深鉢	E-83
84		黒色土	深鉢	E-84
85			深鉢	E-85
86		黒色土	深鉢	E-86
87		黒色土	深鉢	E-87
88	17	トレンチ	深鉢	E-88
89		黒色土	深鉢	E-89
90			深鉢	E-90
91		中央トレンチ	深鉢	E-91
92		表土ハギ	深鉢	E-92
93		黒色土	深鉢	E-93
94		黒色土	深鉢	E-94
95		西壁トレンチ	深鉢	E-95
96			深鉢	E-96
97			深鉢	E-97
98		黒色土	深鉢	E-98
99			深鉢	E-99
100			深鉢	E-100
101			深鉢	E-101
102	18		深鉢	E-102
103		黒色土	深鉢	E-103
104		黒色土	深鉢	E-104
105			深鉢	E-105
106		黒色土	深鉢	E-106
107		黒色土	深鉢	E-107
108		西壁トレンチ	深鉢	E-108
109			深鉢	E-109
110		黒色土	深鉢	E-110
111		中央ベルト	深鉢	E-111
112		黒色土	深鉢	E-112
113			深鉢	E-113
114		黒色土	深鉢	E-114
115			深鉢	E-115
116		黒色土	深鉢	E-116
117		黒色土	深鉢	E-117
118			深鉢	E-118
119			深鉢	E-119
120			深鉢	E-120

遺物 番号	挿 図	遺構など	器 種	登 録 番 号
121	18		深鉢	E-121
122			深鉢	E-122
123		黒色土	深鉢	E-123
124	19		深鉢	E-124
125		検出	深鉢	E-125
126			深鉢	E-126
127			深鉢	E-127
128			深鉢	E-128
129		黒色土	深鉢	E-129
130			深鉢	E-130
131		黒色土	深鉢	E-131
132			深鉢	E-132
133			深鉢	E-133
134			深鉢	E-134
135		検出	深鉢	E-135
136		検出	深鉢	E-136
137			深鉢	E-137
138			深鉢	E-138
139		黒色土	深鉢	E-139
140			深鉢	E-140
141		黒色土	深鉢	E-141
142			深鉢	E-142
143			深鉢	E-143
144	20		深鉢	E-144
145		黒色土	深鉢	E-145
146			深鉢	E-146
147		検出	深鉢	E-147
148			深鉢	E-148
149			深鉢	E-149
150			深鉢	E-150
151			深鉢	E-151
152		検出	深鉢	E-152
153			深鉢	E-153
154			深鉢	E-154
155		検出	深鉢	E-155
156			深鉢	E-156
157		黒色土		E-157
158			深鉢	E-158
159			深鉢	E-159
160		南壁トレンチ	深鉢	E-160

第7表 土器一覧表(2)

遺物 番号	挿 図	遺構など	器 種	登 録 番 号
161	20	検出	深鉢	E-161
162			深鉢	E-162
163			深鉢	E-163
164			深鉢	E-164
165			深鉢	E-165
166		黒色土	深鉢	E-166
167			深鉢	E-167
168		検出	深鉢	E-168
169			深鉢	E-169
170			深鉢	E-170
171			深鉢	E-171
172			深鉢	E-172
173			深鉢	E-173
174		検出	深鉢	E-174
175		黒色土	深鉢	E-175
176	21		深鉢	E-176
177		検出	深鉢	E-177
178		検出	深鉢	E-178
179		黒色土	深鉢	E-179
180			深鉢	E-180
181		検出	深鉢	E-181
182			深鉢	E-182
183		黒色土	深鉢	E-183
184			深鉢	E-184
185			深鉢	E-185
186		検出	深鉢	E-186
187			深鉢	E-187
188			深鉢	E-188
189			深鉢	E-189
190		検出	深鉢	E-190
191			深鉢	E-191
192		黒色土	深鉢	E-192
193		検出	深鉢	E-193
194			深鉢	E-194
195		検出	深鉢	E-195
196		黒色土	深鉢	E-196
197			深鉢	E-197
198		南壁トロンチ	深鉢	E-198
199		黒色土	深鉢	E-199
200		検出	深鉢	E-200

遺物 番号	挿 図	遺構など	器 種	登 録 番 号
201	21		深鉢	E-201
202			深鉢	E-202
203		黒色土	深鉢	E-203
204		検出	深鉢	E-204
205			深鉢	E-205
206			深鉢	E-206
207	22	検出	深鉢	E-207
208		検出	深鉢	E-208
209			深鉢	E-209
210		黒色土	深鉢	E-210
211			深鉢	E-211
212			深鉢	E-212
213		検出	深鉢	E-213
214			深鉢	E-214
215			深鉢	E-215
216			深鉢	E-216
217			深鉢	E-217
218			深鉢	E-218
219			深鉢	E-219
220		検出	深鉢	E-220
221		黒色土	深鉢	E-221
222		黒色土	深鉢	E-222
223			深鉢	E-223
224			深鉢	E-224
225		黒色土	深鉢	E-225
226			深鉢	E-226
227		黒色土	深鉢	E-227
228		検出	深鉢	E-228
229		黒色土	深鉢	E-229
230			深鉢	E-230
231		黒色土	深鉢	E-231
232		黒色土	深鉢	E-232
233		黒色土	深鉢	E-233
234		検出	深鉢	E-234
235		検出	深鉢	E-235
236		検出	深鉢	E-236
237		黒色土	深鉢	E-237
238		黒色土	深鉢	E-238
239			深鉢	E-239
240			深鉢	E-240

第8表 土器一覧表(3)

遺物 番号	挿 図	遺構など	器 種	登 録 番 号
241	22		深鉢	E-241
242		検出	深鉢	E-242
243			深鉢	E-243
244			深鉢	E-244
245			深鉢	E-245
246			深鉢	E-246
247		南壁トレンチ	深鉢	E-247
248		黒色土	深鉢	E-248
249	23		深鉢	E-249
250		黒色土		E-250
251		黒色土	深鉢	E-251
252		黒色土	深鉢	E-252
253		黒色土	深鉢	E-253
254		中央ベルト	注口?	E-254
255			深鉢	E-255
256			深鉢	E-256
257			深鉢	E-257
258			深鉢	E-258
259			深鉢	E-259
260			深鉢	E-260
261		黒色土	深鉢	E-261
262		黒色土	深鉢	E-262
263		黒色土	深鉢	E-263
264		黒色土	深鉢	E-264
265		黒色土	深鉢	E-265
266		黒色土	深鉢	E-266
267		検出	深鉢	E-267
268			深鉢	E-268
269			深鉢	E-269
270			深鉢	E-270
271			深鉢	E-271
272		黒色土	深鉢	E-272
273		検出	深鉢	E-273
274		南壁トレンチ	深鉢	E-274
275			深鉢	E-275
276		検出	深鉢	E-276
277	24		注口土器	E-277
278			注口土器	E-278
279			注口土器	E-279
280			注口土器	E-280

遺物 番号	挿 図	遺構など	器 種	登 録 番 号
281	24		注口土器	E-281
282			注口土器	E-282
283			注口土器	E-283
284			注口土器	E-284
285		黒色土	土偶の足?	E-285
286	25	検出	深鉢	E-286
287		検出	浅鉢	E-287
288		黒色土	深鉢	E-288
289		検出	深鉢	E-289
290		検出	深鉢	E-290
291		黒色土	深鉢	E-291
292		黒色土	深鉢	E-292
293		黒色土	深鉢	E-293
294		黒色土	深鉢	E-294
295		検出	深鉢(精製)	E-295
296			深鉢	E-296
297		黒色土	深鉢	E-297
298		検出	深鉢	E-298
299		黒色土	深鉢	E-299
300		検出	深鉢	E-300
301		黒色土	深鉢	E-301
302		黒色土	浅鉢	E-302
303		南壁トレンチ		E-303
304		検出	深鉢	E-304
305			鉢	E-305
306		黒色土	深鉢	E-306
307			鉢	E-307
308			深鉢	E-308
309		黒色土	深鉢	E-309
310			深鉢	E-310
311		黒色土	深鉢	E-311
312		黒色土	深鉢	E-312
313		南壁トレンチ	深鉢	E-313
314		黒色土	深鉢	E-314
315	22	検出	深鉢	E-315
316	25	黒色土	深鉢	E-316

第9表 土器一覧表(4)

付 表

遺物 番号	挿 図	石 質	器 種	重さ (g)	比重	登録 番号
1001	26	変成岩	打製石斧	148.6	2.67	S-1
1002		安山岩	"	156.6	2.80	S-2
1003		"	"	100.4	2.80	S-3
1004		"	"	57.4	2.68	S-4
1005		"	"	69.7	2.69	S-5
1001		"	"	67.0	2.70	S-6
1007		片岩	"	24.2	2.69	S-7
1008		安山岩	"	20.6	2.64	S-8
1009		"	"	73.4	2.81	S-9
1010		"	"	88.0	2.75	S-10
1011		"	"	59.5	2.81	S-11
1012		"	"	84.5	2.73	S-12
1013		"	"	96.8	2.72	S-13
1014		"	"	103.2	2.77	S-14
1015		変成岩	石錘	32.7	2.64	S-15
1016		塩基性凝灰岩	石刀	59.2	2.92	S-16
1017		"	磨製石斧	130.1	2.98	S-17
1018		"	"	145.0	2.97	S-18
1019	27	溶結凝灰岩	スクレーパー	8.5	2.5	S-19
1020		安山岩	"	7.7	2.66	S-20
1021		チャート	"	3.4	2.62	S-21
1022		"	"	6.2	2.58	S-22
1023		"	"	1.9	2.71	S-23
1024		"	"	3.4	2.62	S-24
1025		ガラス質石英安山岩	石錘	2.2	1.16	S-25
1026		"		1.6	2.67	S-26

遺物 番号	挿 図	石 質	器 種	重さ (g)	比重	登録 番号
1027		流紋岩質溶結凝灰岩	石匙	11.9	2.48	S-27
1028		ガラス質石英安山岩	石鏃	0.5	2.5	S-28
1029		チャート	"	0.9	2.25	S-29
1030		安山岩	"	0.6	3	S-30
1031		ガラス質石英安山岩	"	1.2	2	S-31
1032		チャート	"	0.9	2.25	S-32
1033		ガラス質石英安山岩	"	1.0	2.5	S-33
1034	28	チャート	"	0.7	2.33	S-34
1035		ガラス質石英安山岩	"	0.5	2.5	S-35
1036		"	"	1.9	2.71	S-36
1037		チャート	"	1.8	2.57	S-37
1038		"	"	0.7	2.33	S-38
1039		"	"	0.7	2.33	S-39
1040		ガラス質石英安山岩	"	0.4	2	S-40
1041		"	"	0.5	2.5	S-41
1042		黒曜石	"	0.8	2.67	S-42
1043		ガラス質石英安山岩	"	0.3	3	S-43
1044		"	"	0.4	4	S-44
1045		チャート	"	0.4	4	S-45
1046		ガラス質石英安山岩	"	0.2	2	S-46
1047		チャート	"	0.2	2	S-47
1048		流紋岩質溶結凝灰岩	"	0.3	1.5	S-48
1049		チャート	"	0.7	2.33	S-49
1050		黒曜石	"	0.9	2.25	S-50
1051		"	"	1.2	2.4	S-51

第10表 石器一覧表



遺物番号	X (m)	Y (m)	絶対高 (m)	サンプル番号
1	-88697.945	13079.401	113.792	92-63
2	-88702.965	13079.422	114.222	92-23
4	-88687.171	13093.241	113.678	92-233
7	-88689.476	13093.159	113.774	92-293
8	-88684.970	13097.678	113.408	92-338
11	-88689.405	13093.840	113.754	92-294
12	-88681.687	13104.377	113.582	91-62
15	-88688.885	13092.131	113.695	92-225
19	-88688.626	13092.613	113.748	92-227
22	-88683.362	13103.469	113.545	91-60
23	-88689.058	13095.257	113.761	92-238
25	-88689.999	13094.357	113.768	92-121
28	-88691.757	13094.930	113.989	92-124
36	-88686.845	13098.448	113.523	92-307
37	-88693.599	13087.187	113.688	92-205
39	-88685.527	13101.392	113.550	92-317
41	-88702.365	13074.222	114.183	92-18
42	-88696.230	13082.830	113.865	92-50
47	-88686.229	13102.006	113.220	92-316
48	-88684.168	13106.259	113.484	91-147
53	-88683.273	13103.623	113.540	91-61
54	-88688.741	13096.067	113.566	92-303
57	-88682.070	13134.021	113.879	91-124
58	-88683.645	13131.072	113.820	91-118
63	-88681.520	13132.640	113.759	91-123
65	-88683.831	13133.068	113.983	91-120
71	-88683.831	13133.068	113.983	91-120
75	-88684.054	13098.322	113.639	92-263
76	-88682.710	13119.516	114.094	91-144
79	-88687.247	13091.064	113.711	92-228
80	-88687.149	13099.225	113.742	92-258
83	-88688.313	13097.753	113.756	92-254
85	-88682.710	13119.516	114.094	91-144
88	図	図	図	91-57
90	-88682.918	13126.875	113.956	91-113
95	-88683.331	13102.370	113.231	91-2

第11表 土器出土地点一覧表(1)

## 付 表

遺物番号	X (m)	Y (m)	絶対高 (m)	サンプル番号
9 6	-88684.863	13122.364	113.839	9 1 - 1 0 6
9 7	-88689.357	13093.031	113.921	9 2 - 1 1 6
9 9	-88703.076	13079.985	114.612	9 2 - 2 1
1 0 0	-88686.641	13096.181	113.807	9 2 - 1 4 7
1 0 1	-88682.570	13122.482	113.558	9 1 - 1 5 1
1 0 2	-88682.465	13124.999	113.685	9 1 - 1 0 9
1 0 5	-88680.313	13123.234	113.789	9 1 - 1 0 7
1 0 9	-88681.269	13127.475	113.904	9 1 - 1 1 5
1 1 3	-88681.929	13135.190	113.917	9 1 - 1 2 9
1 1 5	-88682.690	13135.608	113.855	9 1 - 1 3 0
1 1 8	-88699.665	13078.041	114.458	9 2 - 6
1 1 9	-88689.559	13093.145	113.930	9 2 - 1 1 7
1 2 0	-88682.420	13102.274	113.623	9 1 - 5 8
1 2 1	-88683.330	13116.588	113.692	9 1 - 9 9
1 2 2	-88684.154	13131.425	113.835	9 1 - 1 1 9
1 2 4	-88687.961	13090.382	113.832	9 2 - 9 6
1 2 6	-88680.958	13116.366	113.868	9 1 - 3 0
1 2 7	-88685.184	13112.751	113.968	9 1 - 9 5
1 2 8	-88681.363	13110.442	113.548	9 1 - 1 0 5
1 3 0	-88684.060	13110.969	114.319	9 1 - 1 4 1
1 3 2	-88688.599	13093.577	113.764	9 2 - 2 3 1
1 3 3	-88683.616	13107.061	113.783	9 1 - 7 2
1 3 4	-88683.118	13108.836	113.848	9 1 - 8 2
1 3 7	-88684.140	13107.436	113.889	9 1 - 7 0
1 3 8	-88686.186	13105.666	113.801	9 1 - 6 7
1 4 0	-88681.126	13124.920	113.951	9 1 - 4 1
1 4 2	-88685.301	13100.324	113.703	9 2 - 3 3 7
1 4 3	-88692.302	13092.056	113.922	9 2 - 7 4
1 4 4	-88683.731	13108.586	113.910	9 1 - 7 6
1 4 6	-88686.558	13090.656	113.750	9 2 - 1 9 5
1 4 8	-88686.239	13098.448	113.812	9 2 - 1 6 2
1 4 9	-88684.218	13113.452	113.932	9 1 - 2 4
1 5 0	-88691.838	13091.262	113.879	9 2 - 7 2
1 5 1	-88684.727	13112.624	113.950	9 1 - 9 4
1 5 3	-88682.604	13109.027	113.694	9 1 - 8 0
1 5 4	-88685.921	13098.840	113.799	9 2 - 1 6 4

第12表 土器出土地点一覧表(2)

遺物番号	X (m)	Y (m)	絶対高 (m)	サンプル番号
156	-88684.140	13107.436	113.889	91-70
158	-88684.727	13112.624	113.950	91-94
159	-88686.459	13097.734	113.834	92-160
162	-88682.453	13110.288	113.930	91-132
163	-88686.454	13101.343	113.886	92-176
164	-88685.563	13107.037	113.956	91-14
165	-88687.174	13091.626	113.827	92-107
167	-88683.782	13105.926	113.832	91-79
169	-88687.616	13098.057	113.859	92-161
170	-88685.153	13100.546	113.821	92-169
171	-88685.263	13100.644	113.808	92-170
172	-88685.364	13099.173	113.662	92-309
173	-88683.118	13108.836	113.848	91-82
176	-88690.403	13094.855	113.841	92-125
180	-88685.395	13102.407	113.775	92-185
182	-88683.937	13101.683	113.804	92-181
184	-88683.349	13110.831	113.921	91-139
185	-88684.748	13108.639	113.906	91-18
187	-88685.692	13100.176	113.858	92-168
188	-88681.102	13127.722	114.043	91-45
189	-88686.930	13098.634	113.756	92-257
191	-88689.517	13094.458	113.862	92-120
194	-88687.803	13103.639	113.481	91-92
197	-88686.157	13099.191	113.833	92-260
201	-88683.484	13108.608	113.889	91-75
202	-88682.427	13108.766	113.854	91-20
205	-88685.292	13107.498	113.877	91-69
206	-88683.907	13108.207	113.898	91-17
209	-88686.841	13092.033	113.501	92-292
211	-88683.912	13127.395	114.043	91-48
212	-88683.084	13108.767	113.857	91-19
214	-88682.645	13111.245	113.921	91-87
215	-88686.471	13112.892	113.992	91-21
216	-88686.952	13092.024	113.713	92-236
217	-88682.951	13111.093	113.928	91-89
218	-88683.091	13110.788	113.904	91-136

第13表 土器出土地点一覧表(3)

遺物番号	X (m)	Y (m)	絶対高 (m)	サンプル番号
2 1 9	-88684.694	13112.357	113.922	9 1 - 9 3
2 2 3	-88682.847	13110.845	113.931	9 1 - 8 5
2 2 4	-88691.565	13088.744	113.621	9 2 - 2 1 0
2 2 6	-88690.524	13092.169	113.884	9 2 - 7 9
2 3 0	-88683.567	13105.335	113.673	9 1 - 6 4
2 3 9	-88684.306	13113.460	113.918	9 1 - 2 3
2 4 0	-88683.155	13110.898	113.919	9 1 - 1 3 7
2 4 1	-88683.587	13106.981	113.779	9 1 - 7 1
2 4 3	-88691.696	13091.013	113.793	9 2 - 2 1 4
2 4 4	-88691.838	13091.262	113.879	9 2 - 7 2
2 4 5	-88691.894	13090.737	113.838	9 2 - 7 0
2 4 6	-88687.532	13092.375	113.830	9 2 - 1 1 2
2 4 9	-88681.198	13112.991	113.901	9 1 - 2 6
2 5 5	-88682.531	13111.123	113.938	9 1 - 8 6
2 5 6	-88684.863	13122.364	113.839	9 1 - 1 0 6
2 5 7	-88697.516	13086.709	113.746	9 2 - 2 8 3
2 5 8	-88690.135	13091.780	113.908	9 2 - 8 0
2 5 9	-88683.057	13111.248	113.900	9 1 - 1 3 5
2 6 8	-88689.131	13091.929	113.794	9 2 - 2 2 3
2 6 9	-88689.940	13092.073	113.896	9 2 - 8 3
2 7 0	-88683.390	13111.150	113.925	9 1 - 9 1
2 7 1	-88691.953	13090.847	113.834	9 2 - 6 9
2 7 5	-88692.048	13092.073	113.955	9 2 - 7 3
2 7 7	-88686.313	13102.331	113.820	9 2 - 1 8 8
2 7 8	-88683.374	13110.939	113.925	9 1 - 1 4 0
2 7 9	-88689.617	13090.241	113.714	9 2 - 2 1 6
2 8 0	-88685.827	13107.845	114.032	9 1 - 1 5
2 8 1	-88686.829	13111.305	114.028	9 1 - 7 7
2 8 2	-88682.805	13110.365	113.901	9 1 - 8 4
2 8 3	-88685.041	13096.586	113.664	9 2 - 2 5 3
2 8 4	-88683.659	13105.314	113.746	9 1 - 6 5
2 9 6	-88680.118	13117.509	113.708	9 1 - 1 4 9
3 0 5	-88697.684	13083.587	113.769	9 2 - 1 9 6
3 0 7	-88686.985	13088.960	113.681	9 2 - 3 3 6
3 1 0	-88684.597	13118.826	113.944	9 1 - 3 7

第14表 土器出土地点一覧表(4)



図

版

① 遠景  
(北東より)



② 91調査区  
近景  
(南東より)



③ 91調査区  
全景  
(西より)







① 91調査区南西角  
(北東より)



② 調査区西側  
遺物出土状況  
(南東より)



③ 91調査区  
SX02  
(南より)



① 91調査区東側  
完掘状況  
(西より)



② 91調査区全景  
(東より)



③ 92年調査区  
調査風景





① 92調査区  
SK232  
SK233  
(東より)



② 92調査区  
鉢形土器出土状況  
(北西より)



③ 92調査区  
SK236  
(北より)



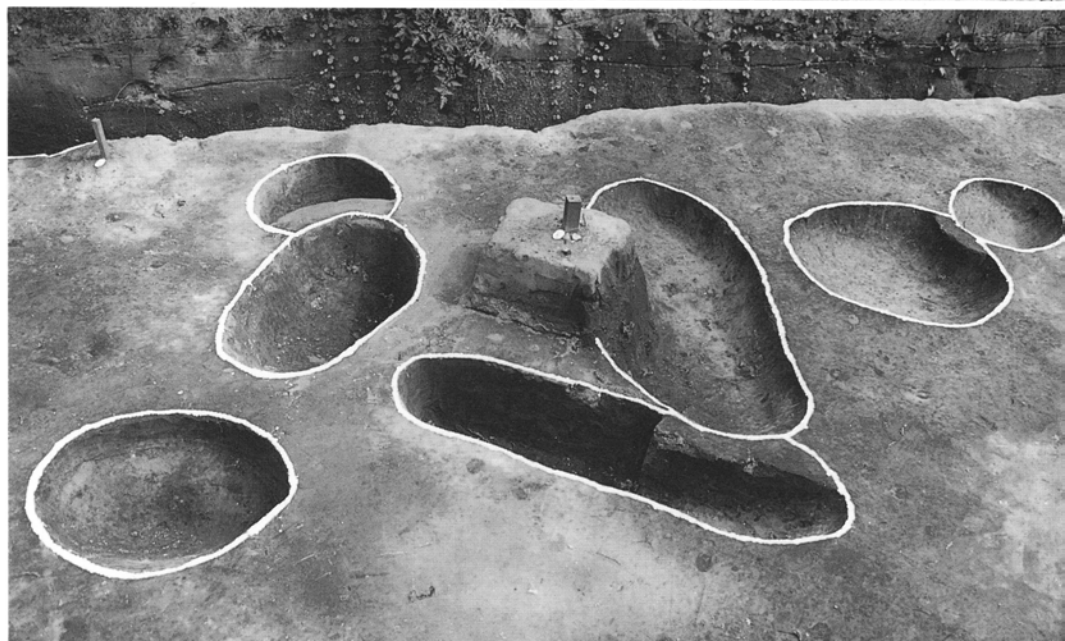
① 92調査区  
東土坑群  
(南より)



② 92調査区  
南東土坑群  
(南東より)



③ 92調査区  
中央南土坑群  
(北西より)





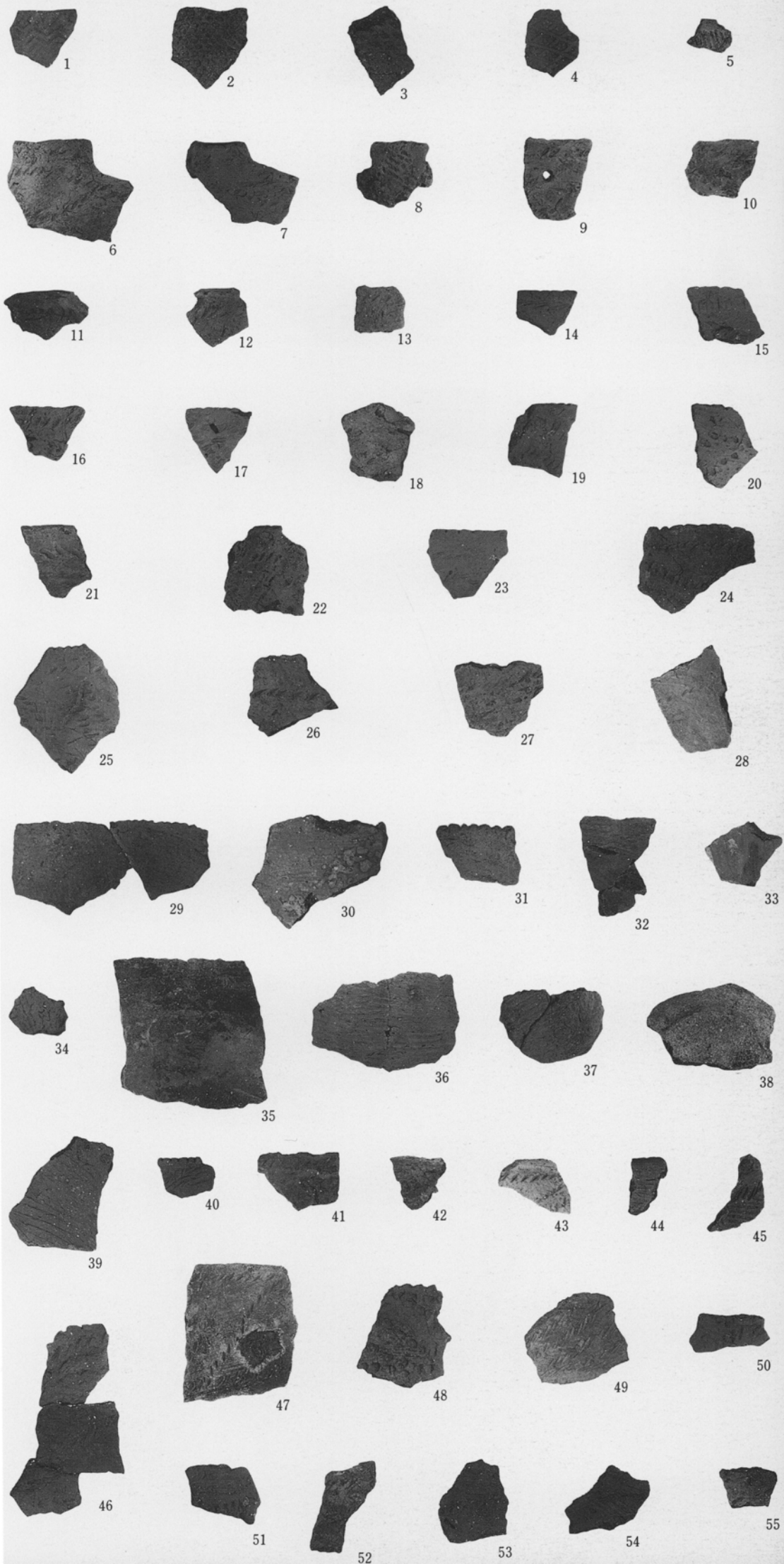
① 92調査区  
南壁セクション  
(北東より)



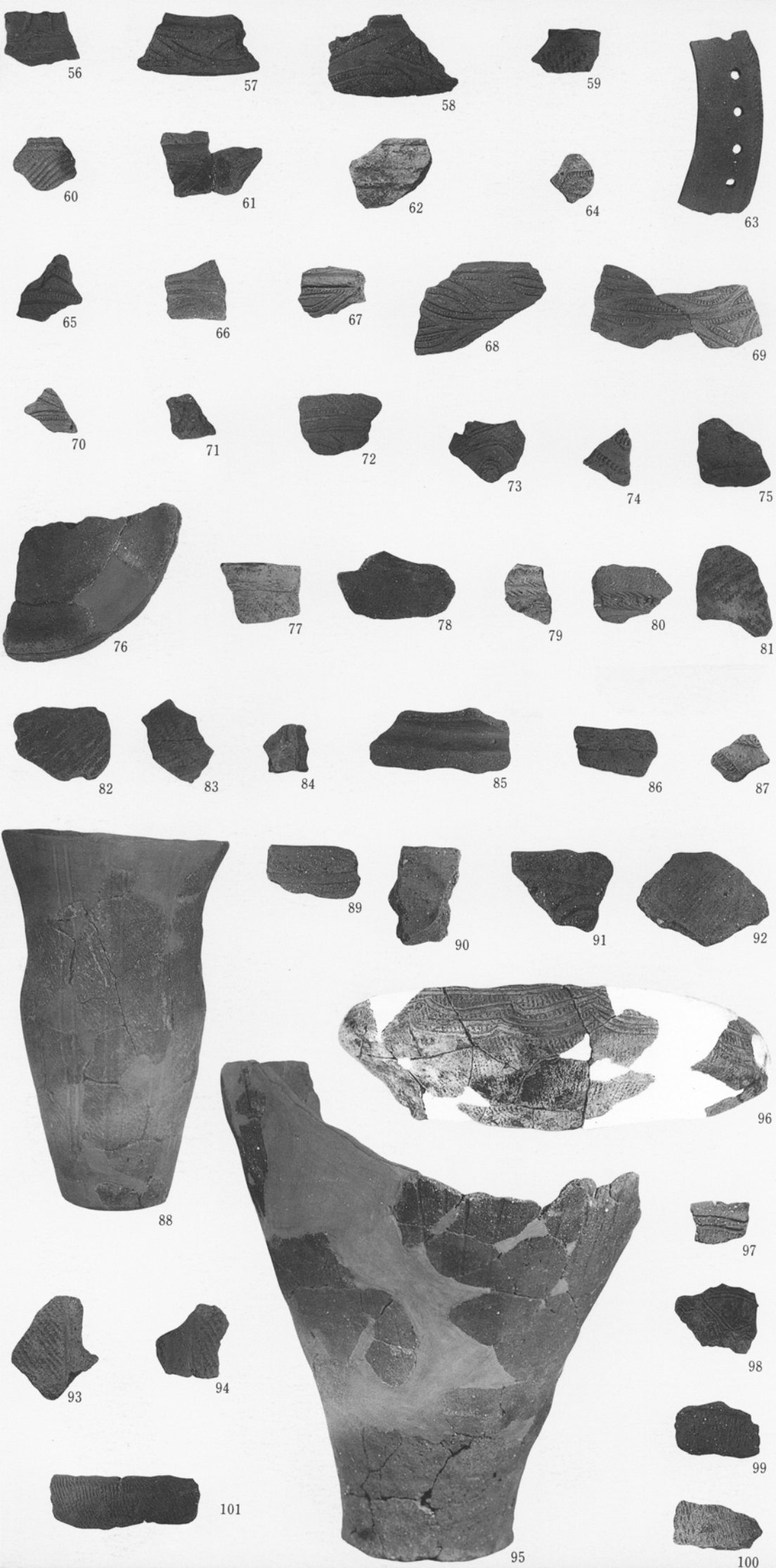
② 92調査区  
全景  
(南西より)



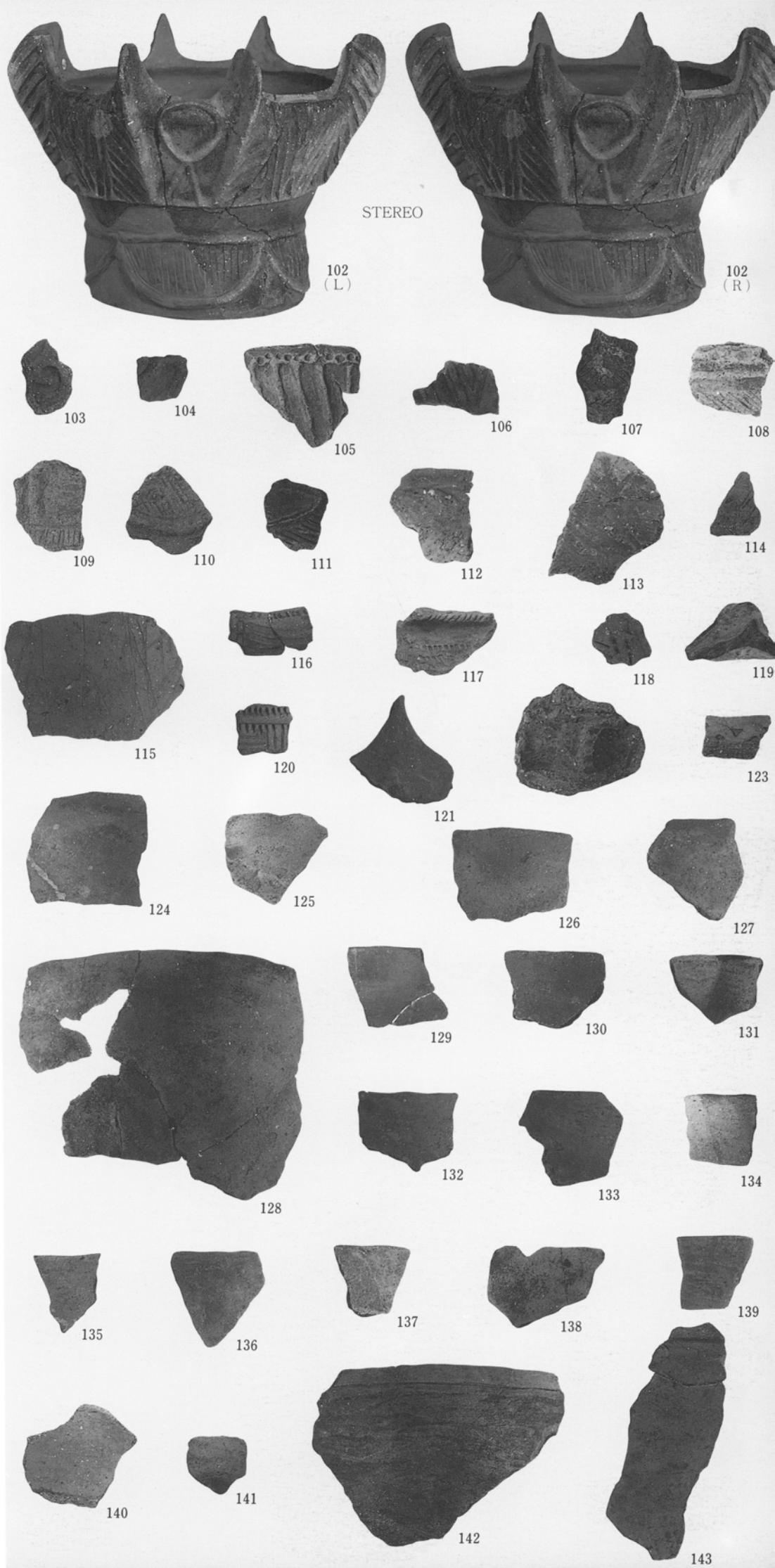
③ 92調査区  
全景  
(北東より)







88・95・96は1/4縮尺  
他は1/3縮尺



STEREO

102 (L)

102 (R)

103

104

105

106

107

108

109

110

111

112

113

114

116

117

118

119

115

120

123

124

125

121

126

127

129

130

131

132

133

134

128

135

136

137

138

139

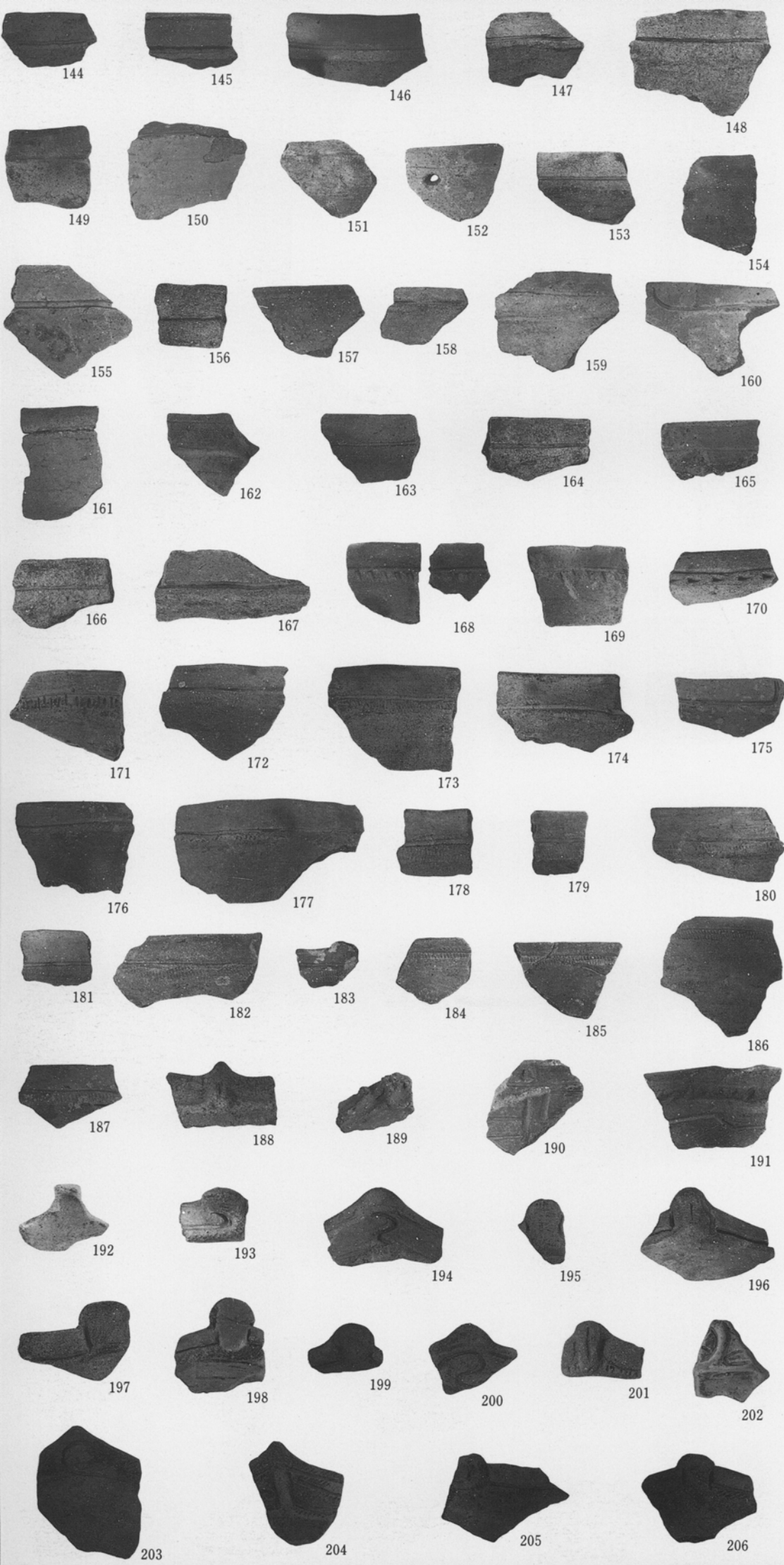
140

141

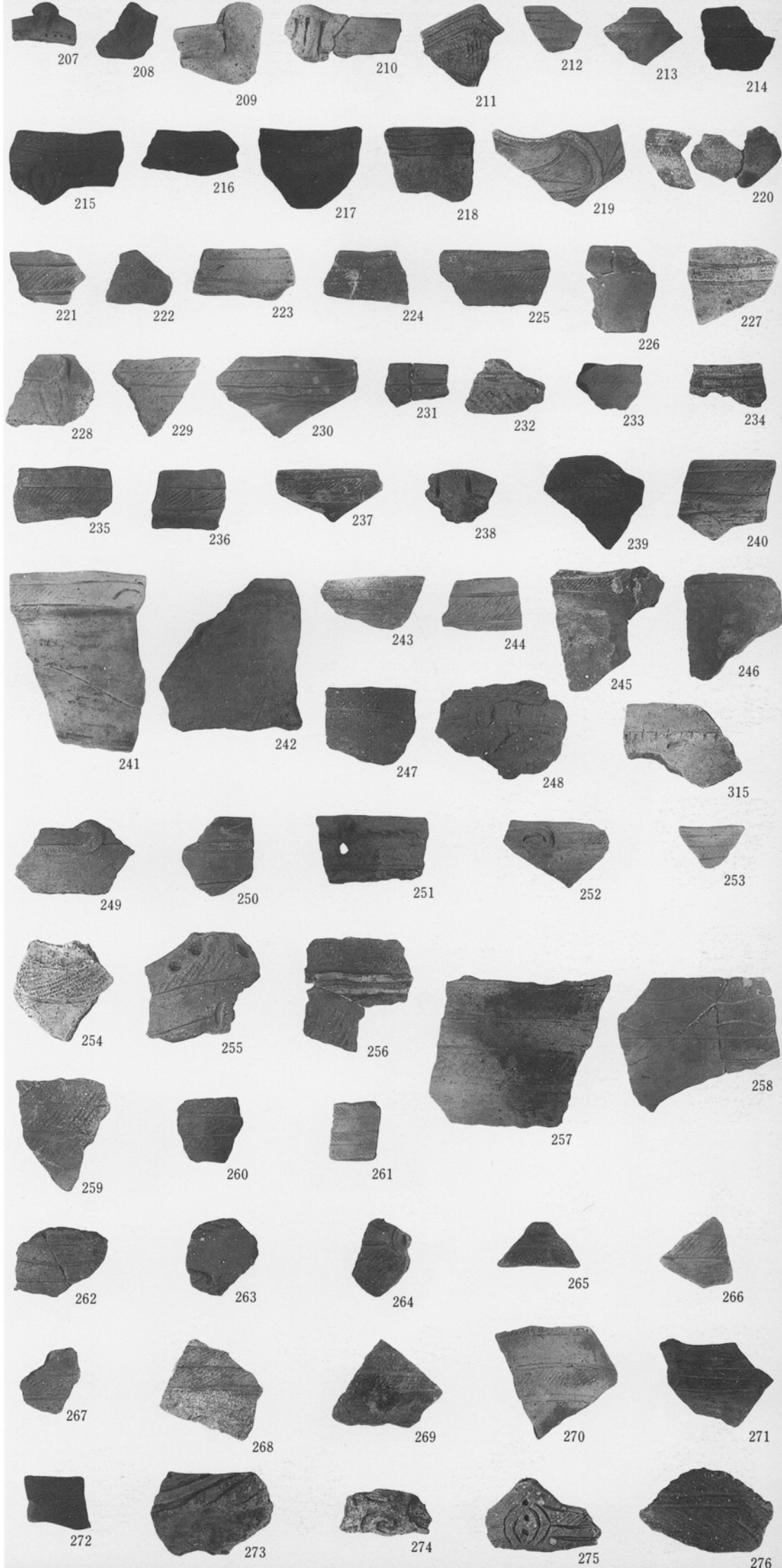
142

143

102は1/4縮尺ステレオ撮影  
他は1/3縮尺









277



278



279



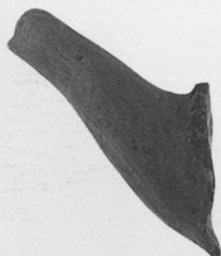
280



281



282



283(横)



283(上)



284



285



286



287



288



289



290



291



292



293



294



295



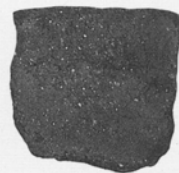
305



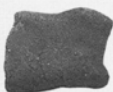
296



297



298



299



300



301



302



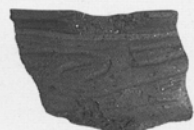
303



304



306



307



308



309



310



311



312



313

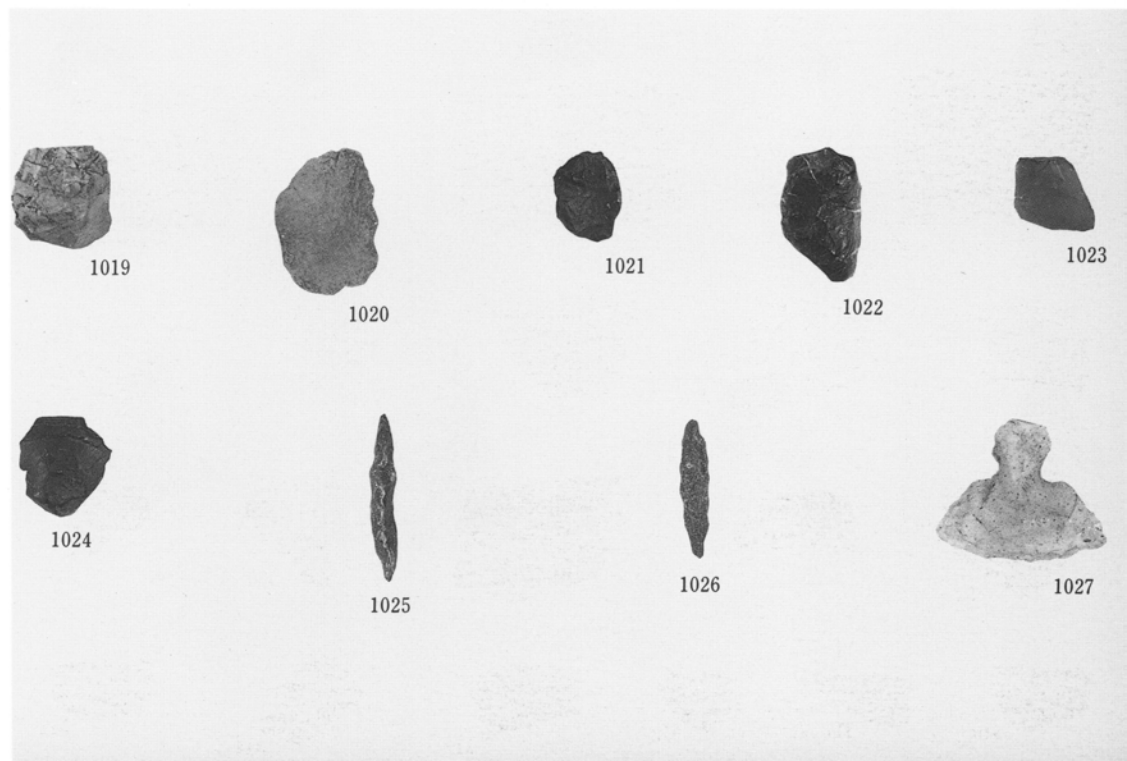


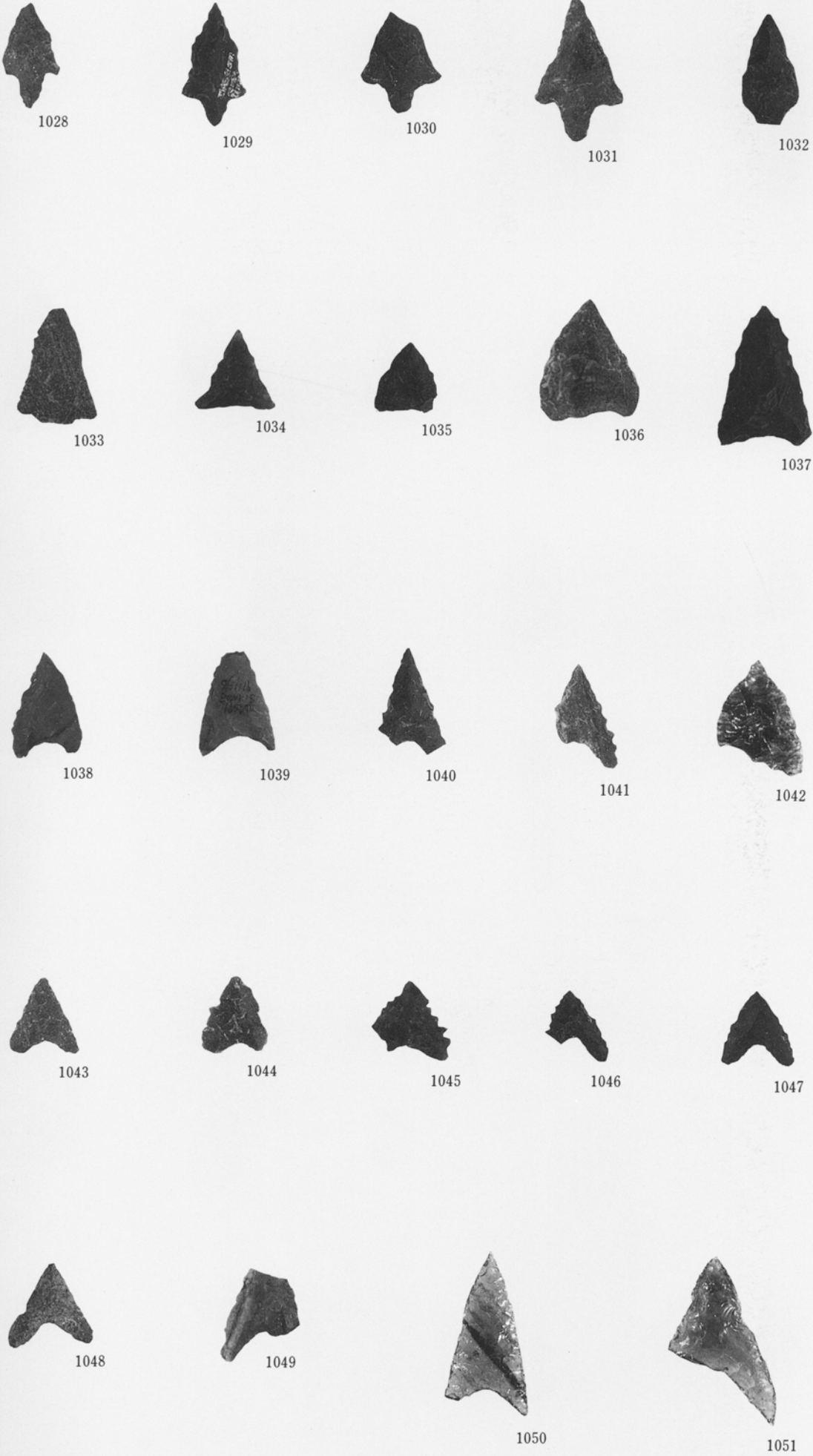
314



316

305は1/4縮尺  
他は1/3縮尺





# 高 樋 遺 跡



## 例 言

1. 本編は、愛知県豊田市坂上町字高樋に所在する高樋遺跡の発掘調査報告である。
2. 調査は県道坂上・花沢線拡幅工事に伴うもので、愛知県教育委員会を通じて愛知県土木部からの委託を受け、平成3年(1991年)11月から12月にかけて財団法人愛知県埋蔵文化財センターが実施した。調査面積は500㎡である。
3. 調査担当者は、山田基(課長補佐兼主査、現刈谷市立衣浦小学校)・石黒立人(調査研究員)・余合昭彦(同)で、測図等に岡 裕子(発掘調査補助員)が協力した。
4. 調査にあたっては、次の各機関の御協力を得た。  
愛知県教育委員会文化財課 愛知県埋蔵文化財調査センター  
愛知県土木部 豊田市教育委員会
5. 本編の執筆分担は以下の通りである。編集は余合が行った。  
第3章 2 服部信博(調査研究員)  
上記以外のすべて 余合昭彦
6. 報告書の作成にあたり、次の各機関・諸氏の御教示・御協力を得た。  
(敬称略)  
大参義一 鈴木昭彦 野口哲也 松井直樹 足助資料館 西尾市資料館  
南知多町郷土資料館
7. 遺物の整理・作図について、次の方々の御協力を得た。(敬称略)  
山本章子 西山朋子 中島由美子
8. 調査区に使用した座標は、建設省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に基づくものである。
9. 出土遺物・調査に関する記録は愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管している。

# 目 次

第1章 調査の概要	
1 調査の経緯	1
2 遺跡の環境	2
第2章 層序と遺構	
1 基本層序	4
2 遺構	6
第3章 遺物	
1 縄文土器	7
2 石器	13
3 その他の遺物	16
第4章 まとめ	17
付表	18

## 挿図目次

第1図 高樋遺跡の位置	1	第8図 縄文土器(1)	9
第2図 調査区位置図	2	第9図 縄文土器(2)	10
第3図 周辺の遺跡	3	第10図 縄文土器(3)	11
第4図 調査区北壁の基本層序	4	第11図 土器出土地点分布図	12
第5図 II層検出時の等高線	5	第12図 石器	14
第6図 調査区平面図	6	第13図 石器出土地点分布図	15
第7図 SK01埋土セクション	6	第14図 灰釉系陶器	16

## 図版目次

図版1	調査区全景
図版2	SK01・押型文土器出土状況
図版3	縄文土器(1)
図版4	縄文土器(2)
図版5	石器

# 第1章 調査の概要

## 1. 調査の経緯

愛知県豊田市東部の坂上町を流れる仁王川の流域には、昭和30年頃の耕地整理の際に発見された三斗目遺跡（県遺跡番号 63356）<sup>1)</sup>がある。近年、仁王川流域に耕地の圃場整備計画が持ち上がり、平成2年12月に豊田市教育委員会が三斗目遺跡の範囲確認のため試掘調査を行ったところ、同町字高樋からも縄文土器が発見されて高樋遺跡と命名された。さらに高樋遺跡の範囲内に県道坂上・花沢線の拡幅工事が計画されたため、愛知県土木部から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県埋蔵文化財センターが、事前調査を行った。

調査の経過としては、平成3年11月5日に調査区を設定し、重機によって表土を除去した。その後作業員を投入し、12月末まで約2カ月間かけて包含層の掘り下げ及びトレンチの掘削、測図・写真撮影等を行った。12月19日に土層確認のため重機によって深掘りを行い、埋め戻しを年末・年始をはさんで平成4年1月上旬に行って調査を終了した。発掘調査面積は500㎡である。

### 註

- (1) 愛知県教育委員会 1988 『愛知県遺跡分布地図(II) 知多・西三河』



第1図 高樋遺跡の位置



## 2. 遺跡の環境

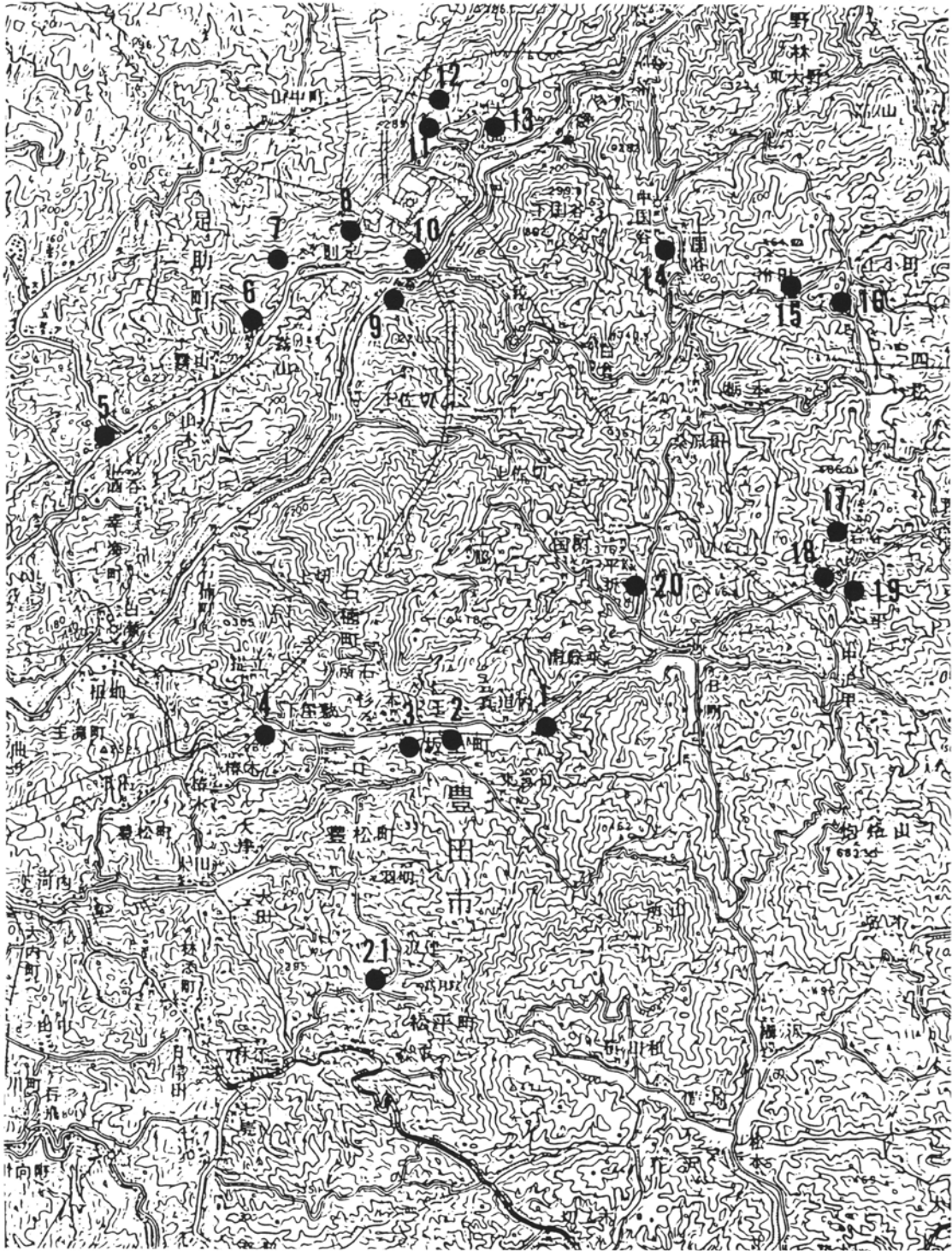
豊田市は愛知県のはぼ中央に位置する。市域の多くは矢作川によって形成された段丘上に展開しているが、東部は三河高原の末端にあたり標高約110m～600mの三河小起伏面に属している。豊田市と東隣の東加茂郡足助町との境には標高683mの炮烙山、その近くには標高611mの六所山があり、これらの山々から流れだした沢は仁王川となって矢作川の支流である巴川に注いでいる。

豊田市坂上町は炮烙山や六所山を含む仁王川の流域に広がっている。坂上町の仁王川に沿った地域は、山間部でありながら小盆地となっている。これは巴川にそった断層の活動によって坂上町のある巴川南東部が相対的に隆起した後、仁王川の下流より始まり王滝渓谷を形成している河川による下刻作用が、まだ坂上町域にまで及んでいないためと考えられる。

高樋遺跡は、仁王川沿いの小平野に北側から小さな沢が流れ込む地点に所在する。高樋遺跡と同じ仁王川の流域では、上流の足助町内に縄文時代早期の馬場遺跡があり、約1km下流にはほぼ同時期に当センターが調査した三斗目遺跡（縄文時代後期）・三本松遺跡（同晩期）がある。さらに下流には王滝岩陰遺跡があって縄文早期の土器片が発見されている。仁王川が巴川に合流した地点の対岸から尾根をひとつ越えた幸海町には、縄文時代草創期の遺跡として著名な酒呑ジュリナ遺跡もある。



第2図 調査区位置図 (1/2,500)



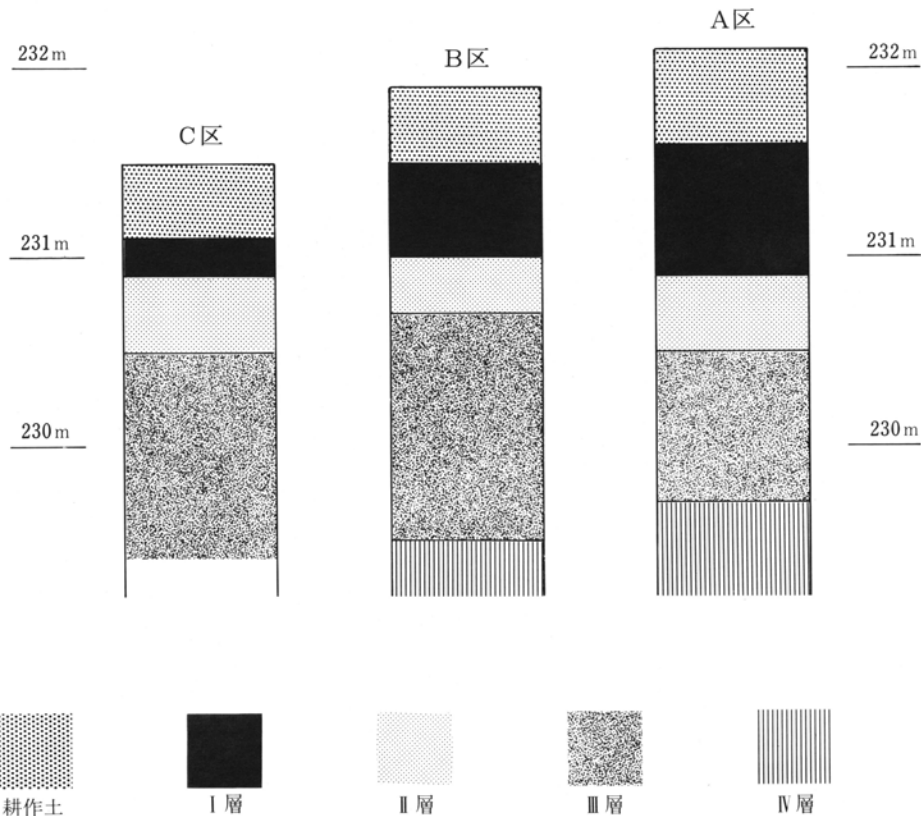
1. 高樋遺跡
2. 三斗目遺跡
3. 三本松遺跡
4. 王滝岩陰遺跡
5. 酒吞ジュリナ遺跡
6. 下井戸遺跡
7. 則定本郷B遺跡
8. シメ土遺跡
9. 上栃ノ実遺跡
10. 仙元遺跡
11. 仏田遺跡
12. 追分山ノ神遺跡
13. トウノ前遺跡
14. 広畑遺跡
15. 旭遺跡
16. 笹ヶ田遺跡
17. 堂ノ下遺跡
18. 田面遺跡
19. 馬場遺跡
20. 南遺跡
21. 松平氏発祥地

第3図 周辺の遺跡 (1/50,000)

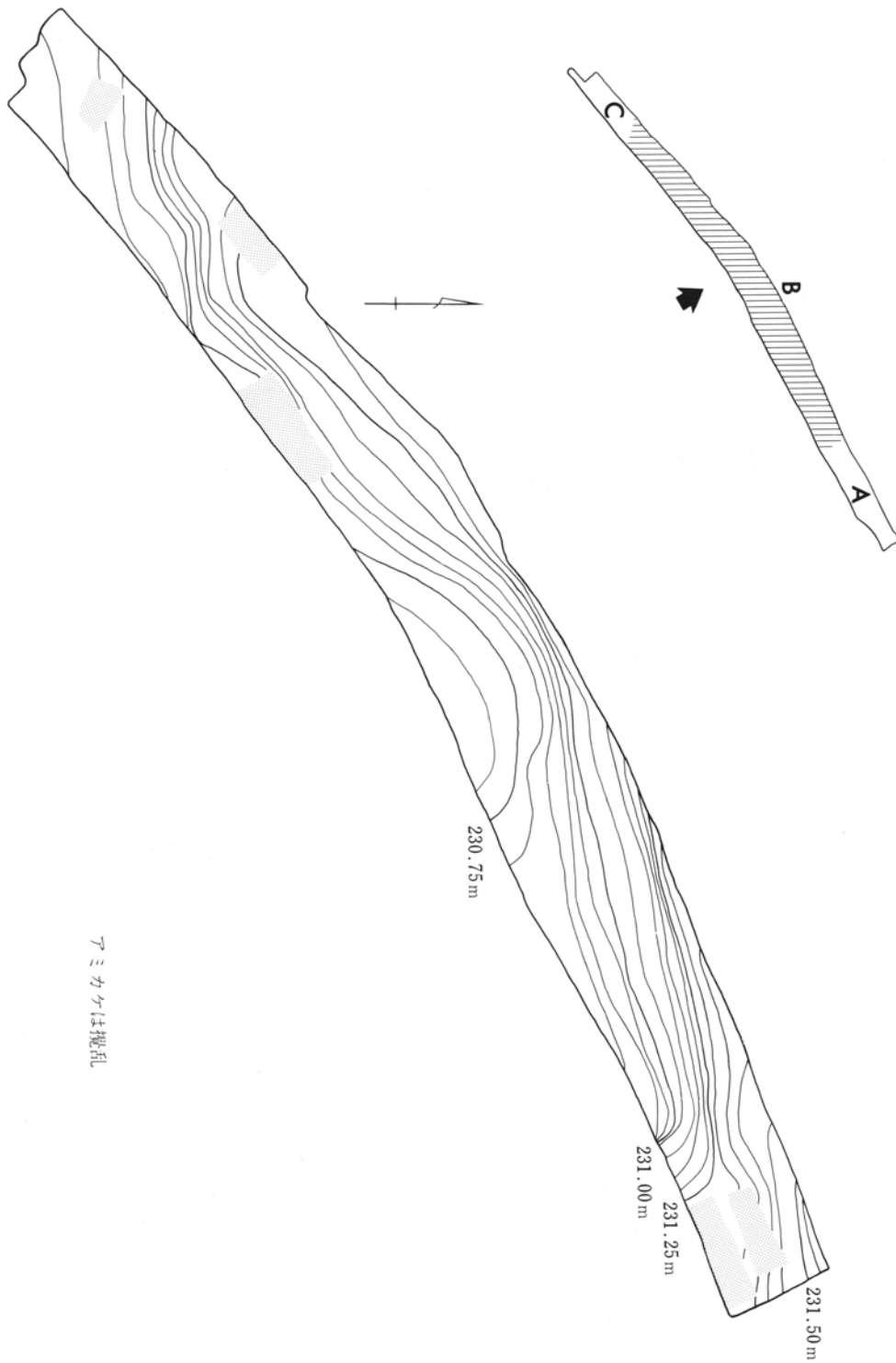
## 第2章 層序と遺構

### 1. 基本層序

調査区は仁王川にそった段丘面と小平野の境を走る県道に平行して、長さ約80m、幅約5mの細長い長方形で設定した。全体に北から南に向かって緩く傾斜している。調査前の地目は水田である。調査区は大きく3つの部分に分けられ、最も東のA区は山裾が張り出していたため、水田を開く際に地山まで削平されており、最も西のC区は耕作土のすぐ下が旧河道になっていた。この2区では、遺物包含層は検出されなかった。中央のB区の基本層序は、上から耕作土、褐色粘質シルト（Ⅰ層）、黒色シルト（Ⅱ層）、灰褐色シルト（Ⅲ層）、赤褐色土（Ⅳ層）である（第4図）。Ⅰ層は約30～50cmの厚さをもつ耕作土下の床土であり、少量の縄文土器や中世・近世の土器が出土した。Ⅱ層は厚さ約20～50cmで、縄文土器や石器が発見された。Ⅲ層は河川による堆積層で厚さは最大で約1m50cm、大部分は砂質だが一部粘質シルトの部分もあって細分が可能である。この層は無遺物層と思われたが、土層観察のためのトレンチを掘ったところ、Ⅲ層の下部から押型文土器が一個体出土した。これ以外には遺物の出土を見なかった。Ⅳ層は花こう岩質の地山である。

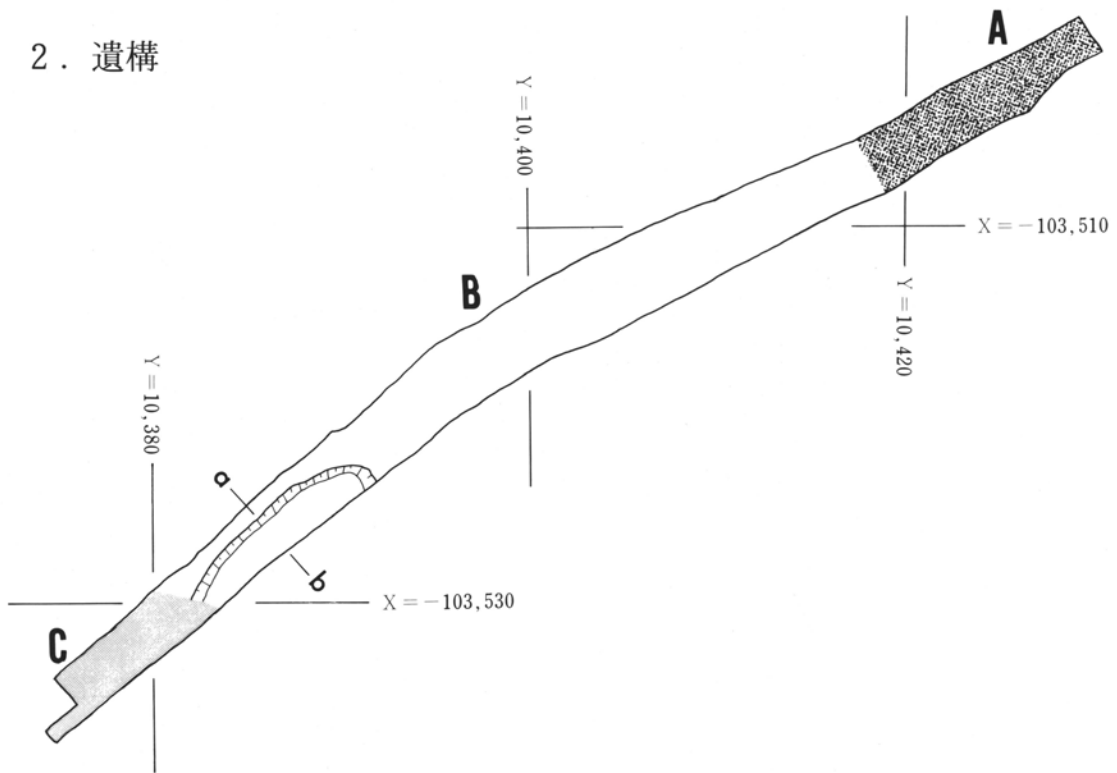


第4図 調査区北壁の基本層序



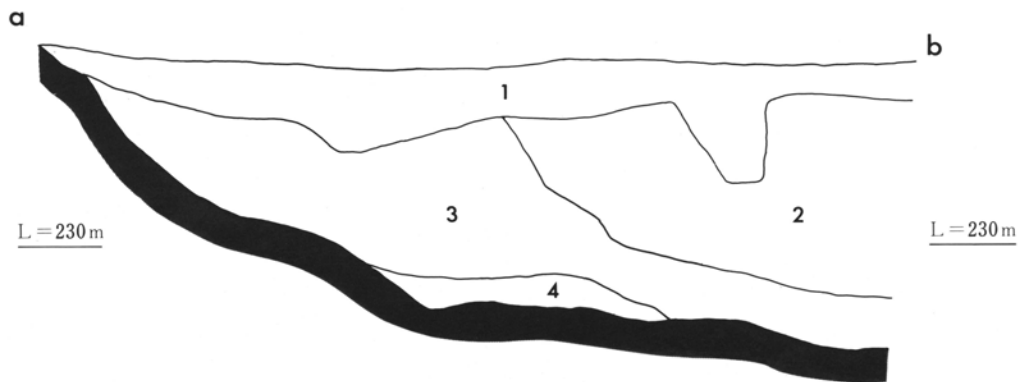
第5図 II 層検出時の等高線 (1/200)

2. 遺構



第6図 調査区平面図 (1/400)

今回の調査区は、もともと緩やかな傾斜地に設定されており、遺構の存在は考えにくい状況であった。調査の結果、調査区の中央よりやや南西の部分で土坑が1基だけ検出された。この土坑（SK01）は調査区の南壁にかかっているため全体の形や大きさを知ることはできなかったが、調査区内では最大径11.4m、深さ75cmをはかる方形あるいは円形の土坑と考えられる。土坑の中からは、最上部に堆積した黒色シルト（前ページのⅡ層）から土器、石器が検出されたほか、最下部の暗灰褐色シルトからも土器・石器が発見された。



1. 黒色土 2. 黄褐色砂質シルト 3. 暗灰褐色シルト 4. 灰褐色砂質シルト

第7図 SK01埋土セクション (1/20)

## 第3章 遺物

### 1. 縄文土器（第8図～第10図）

調査によって出土した土器は420点余りである。点数が必ずしも多くないため土器は可能な限り光波トランシットを使用して座標値を記録しながら取り上げた。土器のうち310点ほどは無文土器、あるいは摩耗して文様が不明な土器である。ここでは有文土器を中心に分類を行った。

1類…押型文土器である。さらに3種に分けられる。

a種（1～3）…神宮寺式系のネガティブな押型文。3点出土した。1は唯一Ⅲ層から発見された尖底の土器で、直径7mm、短径3mmほどのくずれた長方形の押型文を器面全体に施していると思われる。2は口径12.7cmほどと推定される小形の鉢の口縁部で、SK01の最下層から出土している。長径5mm、短径1mmほどの細長い楕円の押型文である。3は2によく似た細長い楕円文が施された底部に近い部分の破片と思われる。仁王川上流の馬場遺跡（鈴木他 1981）から同様の土器が多数出土しており、関連が注目される。

b種（4～7）…ポジティブな楕円押型文をもつ土器である。12点出土したが、色調や焼成の似ているものがあり、個体数はもっと少なくなると思われる。5は楕円文の長径が5mm、短径が4mmで楕円というより円形に近く、内面に沈線をもたない。4、6、7の楕円文は長径7mm、短径4mmで内面に太い沈線をもつ。器壁の厚さは7mmほどで、知多半島の愛知県南知多町先苺貝塚（山下他 1980）から出土した内面に沈線をもつ楕円押型文土器と比較するとかなり薄い。全体に摩耗が激しい。

c種（8、9）…縦方向の山形押型文で、2点出土した。8は波長が約12mmで、山形がくずれて直線に近くなっている。9は波長が19mmほどの大きな山形文をもつ。

2類（10～33）…胴部に隆帯をもち体部に条痕または刺突文をもつもの。26点出土したが同一個体と思われるものがあり、個体数は20点余りであろう。10～17、19～21は隆帯に刻目をもち、その上部に横方向の条痕をもつ。18は器壁が薄く粗雑な条痕を体部に施す。23～25、29～33は口縁部直下または口唇部に刻目をもち体部に条痕を施している。26は口縁部と刻目がある隆帯のあいだに横に平行な3列の刺突文をもつ。28は刻目をもち口縁部の下に棒状器具の先端でつけたと思われる斜めの刺突文をもつ。2類は胎土には繊維を含むものが多い。県内に類例は少ないが、繊維を含み胴部に隆帯をもつ点などから早期の茅山下層式あるいはそれに近接する時期の土器群と思われる。

3類（34～56）…体部の内外を条痕で調整し爪形文を施す一類。39点出土し、有文土器の中では最も数が多い。胎土には繊維を含む。34は口縁部の大きな破片で体部には条痕を施し、外面には口縁部直下と体部に口縁部と平行して3列の爪形文が、その中間には斜行すると思われる1列の爪形文が施され、内面にも口縁部直下に1列の爪形文を施している。また、口唇部は大きな刻目がつけられているため波状を呈する。35、36、38～41も条痕の上から爪形文を施している。条痕にも42、46、

50、56のようにはっきりとした条痕や45、49、53のような細かな条痕の2種類があるが、ここでは一括して3類とした。条痕のみが認められる土器のうちの一部は2類に属する可能性もある。早期後葉の粕畑式に比定されるが、34は体部にわずかながら段が認められ、また斜行する爪形文をもつことから粕畑式に先行する八ッ崎Ⅰ式（増子 1983）に近いものかもしれない。

4類（57）…1点のみ出土した。口縁部に三角形の突起をつけ、その両脇の楕円形の区画の中に細かな爪形文を施した土器で、器壁が薄い。中期の北屋敷式と思われる。

5類（58～70）…沈線を施した土器群で15点出土した。61、64は波状口縁の波頂部で、曲線的な太めの沈線を施している。62も波状口縁で、口縁部と「く」の字に屈曲する頸部とのあいだに太い沈線で文様をつけている。65～70は沈線がやや細いものである。この類は、中期末から後期の初頭の土器と思われる。

6類（71、72）…条痕を施したもので6点出土した。71は角ばった口縁部で、器体全体に条痕をもつ土器。72は羽状条痕のようにみえる。晩期に属するものと思われる。

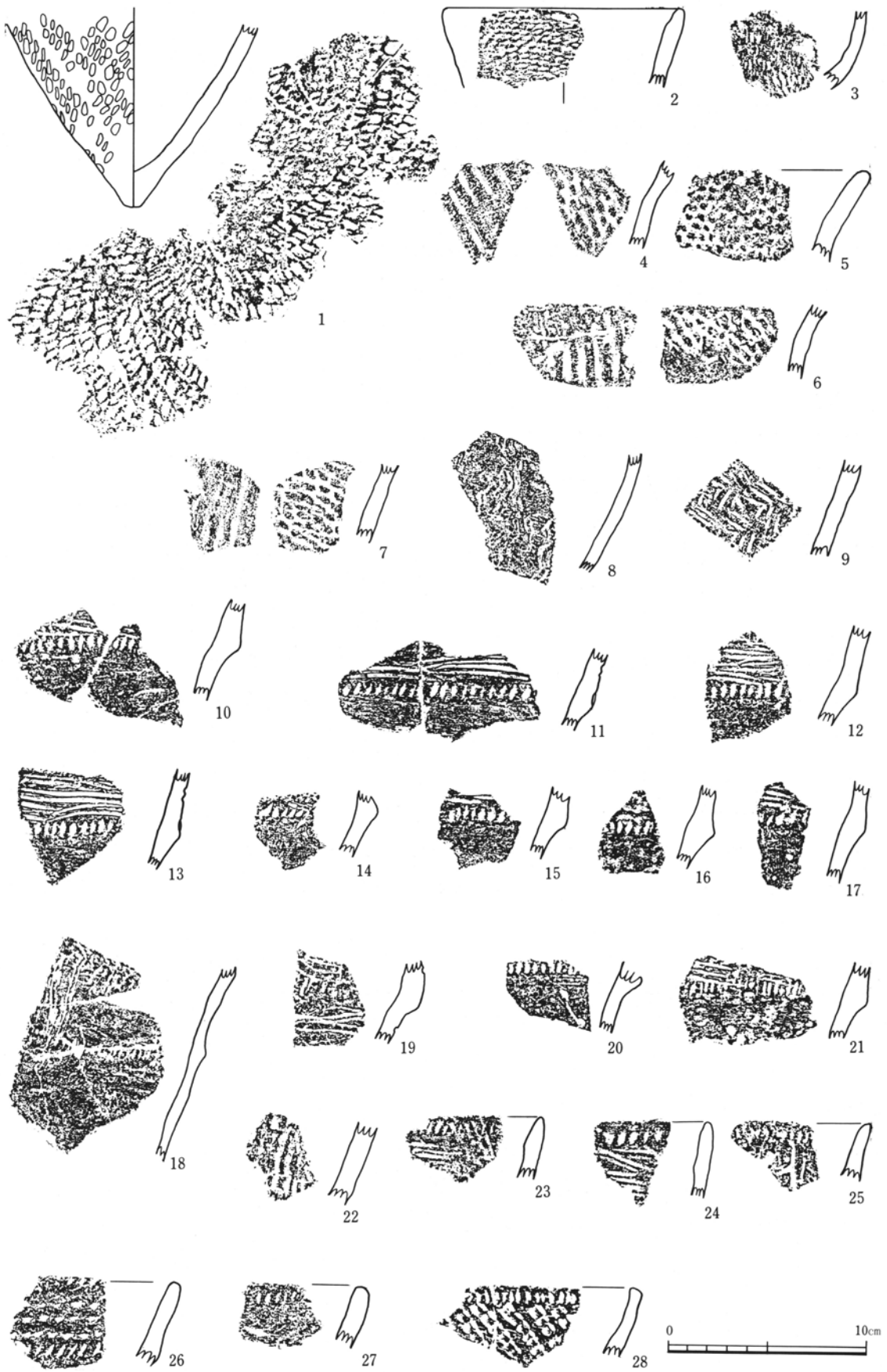
7類（73～81）…その他の有文土器を7類とした。73は口縁部に刻目をもち、その下に斜めに細い沈線と刺突文を3列ずつ施したもので、全体の雰囲気は2類土器に似ている。74は器壁の全体に縄文を施したものである。75は口縁部から縦に縄文帯と無文部分を並べ、また口唇部にも縄文を施したもので、後期初頭の土器かと思われる。76は「く」の字状に折れ曲がった部分に刻目をもち、その上部に斜めの刺突列点文をもつ土器である。77は口唇部に指または棒状器具で押圧を加えた土器である。78は磨消縄文をもつ土器で後期に属する。79～81は櫛状の器具またはヘラのようなもので細い沈線を施したもので、やはり後期に属するものと思われる。

8類（82～86）…底部を8類とした。82は体部の一番下の部分に刻目を施し体部に条痕をもつ。83は丸底である。84は推定底径11.5cmをはかり、器壁も厚い大型土器の底部である。85、86は胎土に繊維を含み、早期の土器の底部と思われる。

#### 参考文献

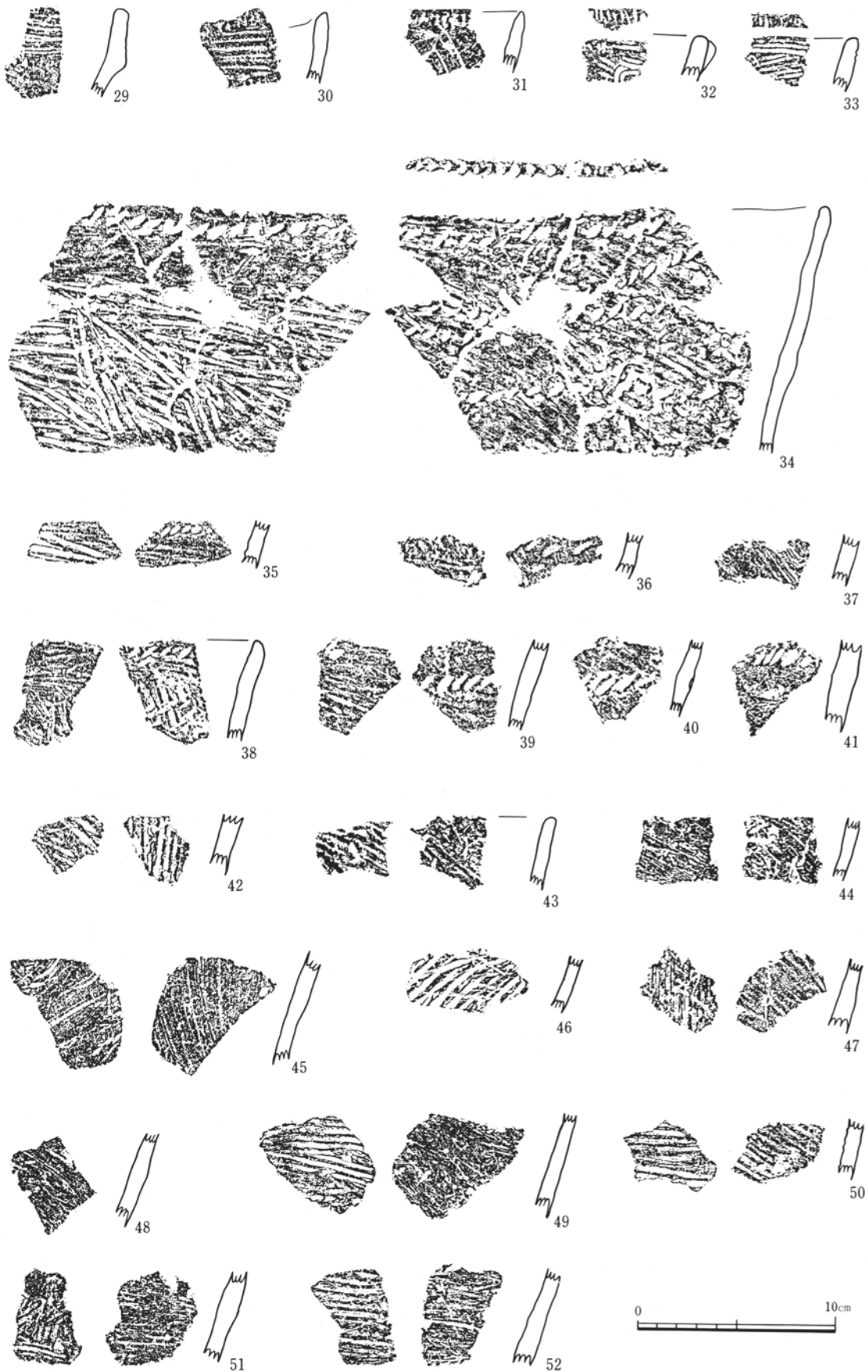
- 鈴木茂夫他 1981 『馬場遺跡概報』 足助町教育委員会  
増子康眞 1983 「八ッ崎Ⅰ式土器をめぐる」『古代人41』 名古屋考古学会  
山下勝年他 1980 『先苅貝塚』 南知多町教育委員会



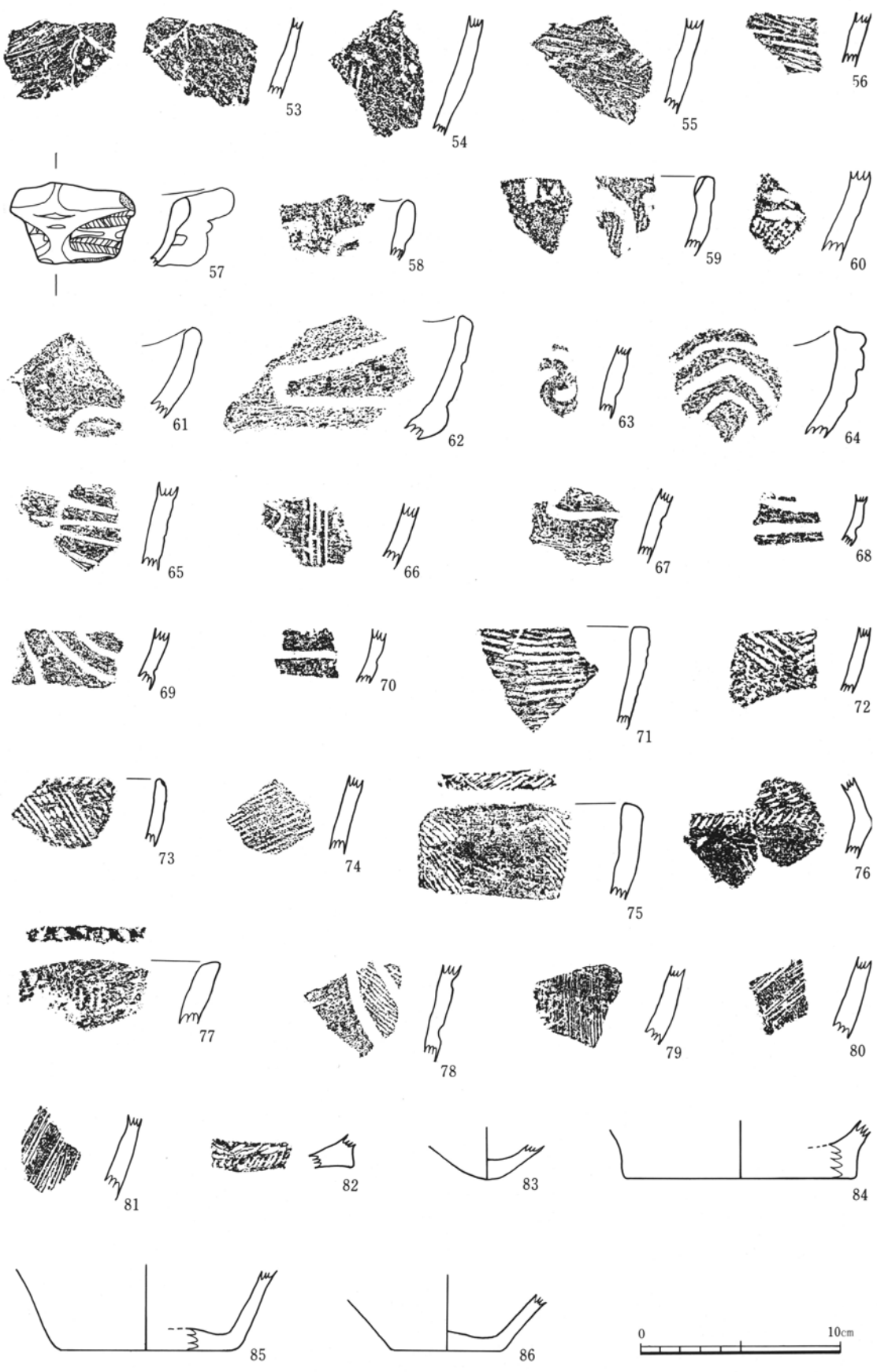


第8圖 繩文土器 (1)





第9図 縄文土器(2)



第10図 繩文土器 (3)



第11図 土器出土地点分布図 (1/200)

## 2. 石器（第12図）

今回の高樋遺跡の発掘調査で出土した石器は、すべて打製石器であり磨製石器は1点もみられない。出土総数は、剥片資料等を含め84点であり、量的には決して多いとはいえない。しかし、帰属時期に若干の問題を残すものの大半の資料が縄文時代早期（中葉から後葉）に比定される可能性があり、やや資料不足の感が拭えない状況にあった当地方の当該期の石器研究の面において、興味深い資料を提供したといえよう。

### 石鏃（1・2）

1は、基部がほぼ直線的に走る平基無茎鏃であり、長さ1.5cmを測る。チャート製。2は、基部が欠損しており、全体の形状は不明である。剥片の片側側縁部分のみに調整を加えた粗悪品であり、石材は安山岩を利用している。

### 尖頭器（3）

3は、基部部分のみ残存し全形は判然としないが、黒曜石製の木葉形尖頭器と考えられる。

### 石匙（5）

5は、横型石匙であり、典型的な形状を呈している。安山岩を石材として利用している。全体的に風化が進行しており、剝離痕等が不鮮明になっている。

### スクレーパー（6～12）

剥片の一端に刃部を形成した石器を一括してスクレーパーとした。大きく以下の2種に分類することができる。

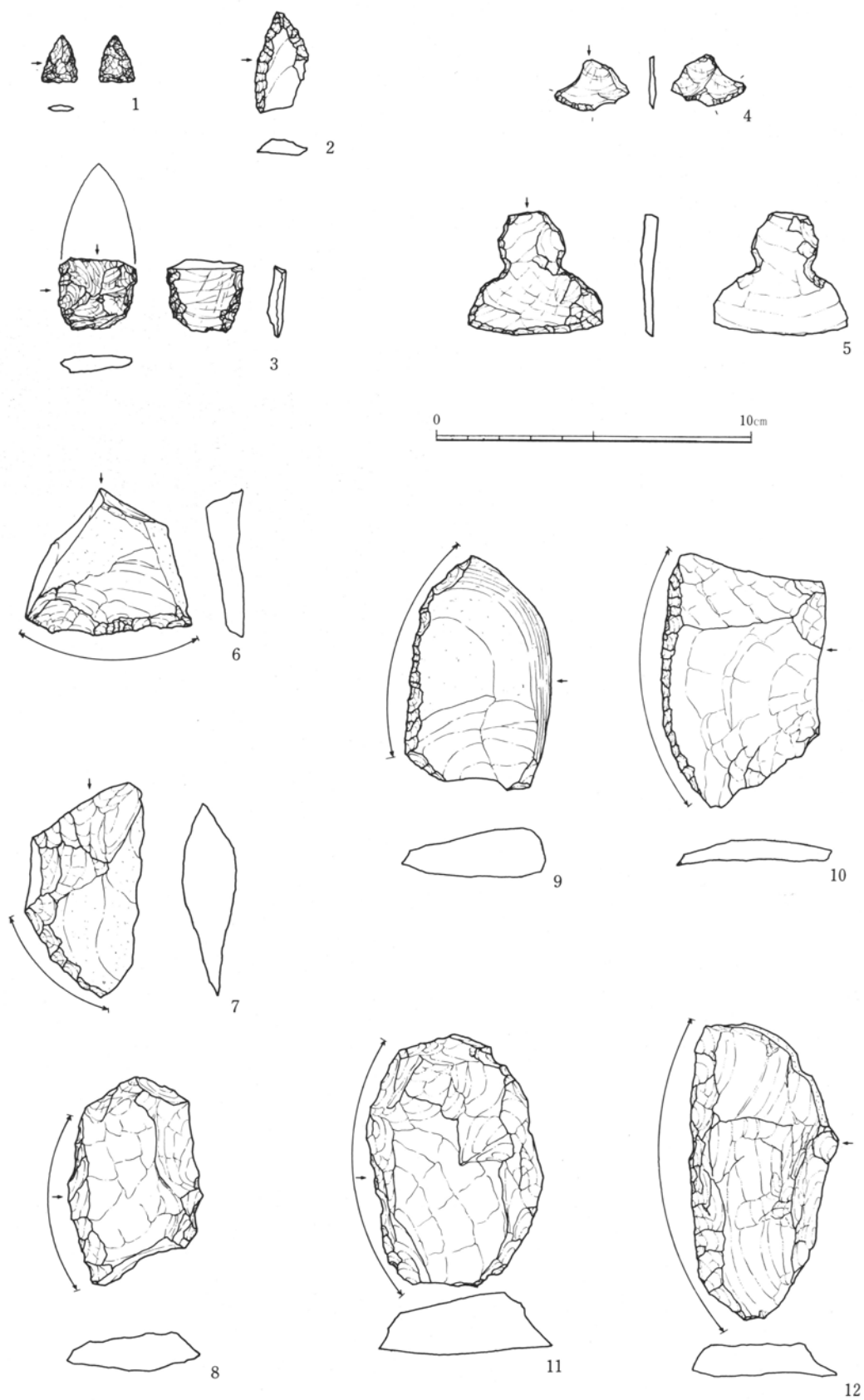
- a 剥片の長軸の端部に連続的に刃部をつくりだしているもの。
- b 剥片の側縁に連続的に打撃を加え刃部をつくりだしているもの。

aには6・7の2点が該当する。6はチャート製、7は凝灰岩を使用しており、いずれも自然面を残す剥片端部に連続的に打撃を加え刃部をつくりだしている。

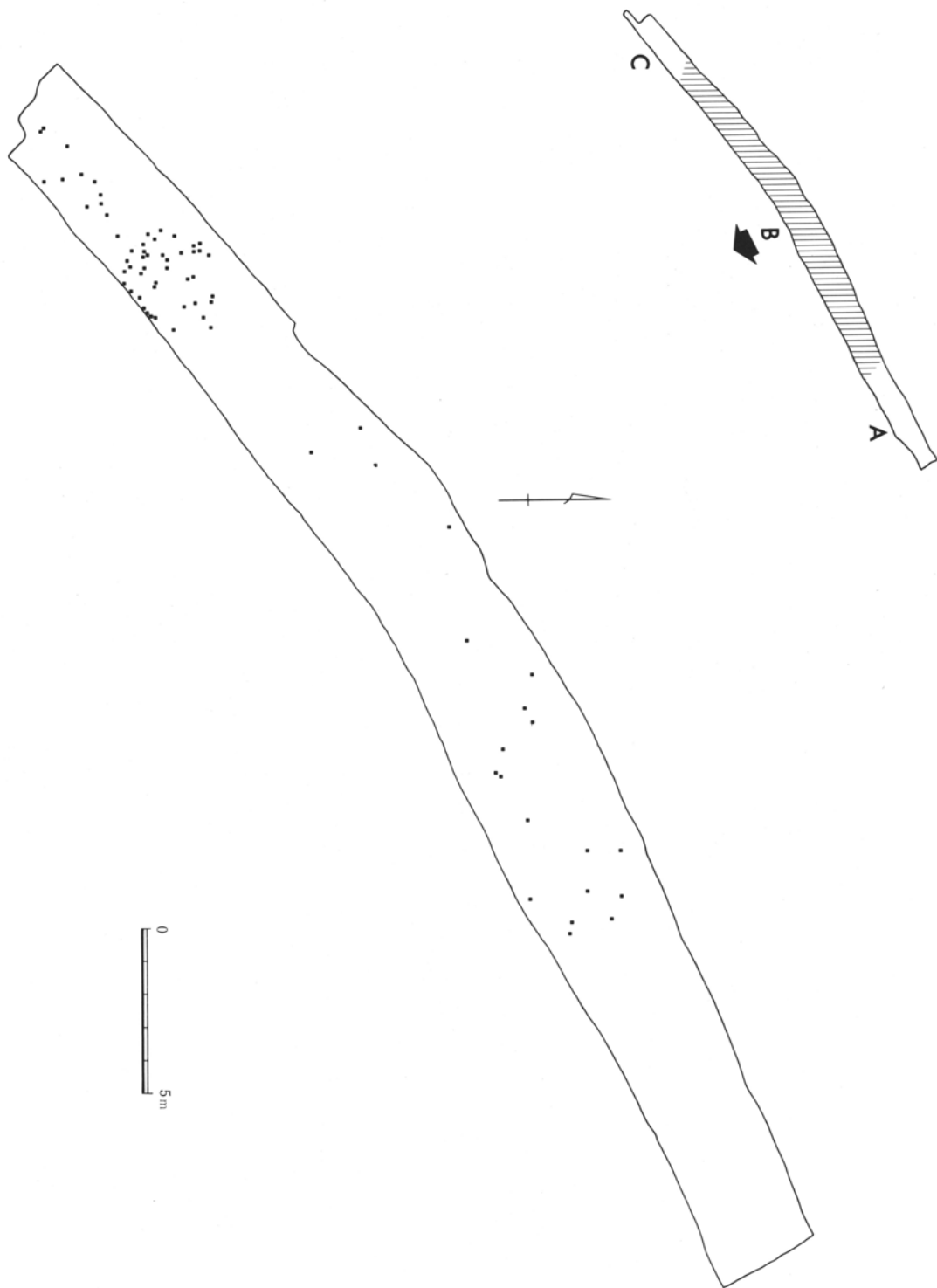
bに該当する資料は、8～12であり、他に図示していないものが3点ほどある。8・9は縦長剥片の側縁に刃部を形成した資料であり、9は自然面を残す側から、細かな打撃が連続して加えられている。8は安山岩、9は極細粒砂岩製。10～12は横長剥片を使用したものであり、いずれも刃部の調整は、片面の側縁部分にほぼ直線的に打撃が加えられている。10は凝灰岩、11は安山岩、12はガラス質石英安山岩（下呂石）を使用している。

### その他（4）

4は、剥片側縁の一部に細部調整が施されたものであり、定型的な刃部をつくりだしていない。石材は、サヌカイトである。



第12圖 石器



第13図 石器出土地点分布図 (1/200)

### 3. その他の遺物

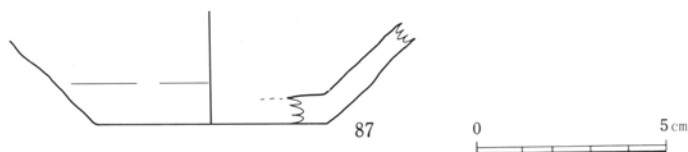
高樋遺跡では、前述した縄文土器や石器の他にⅠ層から中世の灰釉系陶器、近世の施釉陶磁器、金属製品などが数点出土した。灰釉系陶器のうち図示できるものは1点（第14図87）のみで、推定底径が6cmほどの碗である。高台を失っており、胎土はかなり粗い。13世紀後葉から14世紀前葉にかけてのものと思われる。その他の灰釉系陶器は小さな破片ばかりであるが、口縁の破片は直線的な形態をもち87とほぼ同時期のものと考えられる。高樋遺跡が所在する仁王川流域では、従来から灰釉系陶器が散見されており<sup>(1)</sup>、また同じ仁王川流域の三斗目・三本松遺跡<sup>(2)</sup>でも灰釉系陶器がある程度出土している。中世前期にこの地域で人々が生活を送っていたことがうかがわれる。近世陶磁器は碗や挿鉢と思われるが、いずれも小さな破片である。金属製品は小刀と思われるものと煙管の雁首である。

#### 註

(1) 豊田市坂上町 1991 『坂上町誌』

(2) 高樋遺跡とほぼ同時期に本センターが調査した。報告書は1993年3月刊行。

石黒立人・余合昭彦他 1993 『三斗目・三本松遺跡』 (財)愛知県埋蔵文化財センター



第14図 灰釉系陶器

## 第4章 まとめ

高樋遺跡の今回の発掘調査では、住居跡等の人々の生活の痕跡を直接示す遺構を検出することはできなかつた。また土器は早期から晩期にかけてのものが同一層位から出土し、取り上げる際のレベルは古い時期の土器が下層から出土する傾向を示したものの、層位的な区分はできなかつた。遺跡が立地している地点が山裾にそった傾斜地であることから、今回の調査区は河川の氾濫あるいは山腹からの崩落等による、遺物の2次の散布地である可能性が高いと思われる。ただ仁王川流域に縄文時代早期から人々が生活していたことは、すでに足助町教育委員会による馬場遺跡（足助町大字下平）の調査（鈴木他 1981）でも明らかであり、今回の高樋遺跡の調査結果はこれを裏付けるものである。

高樋遺跡から出土した縄文土器には押型文土器が数点含まれる。押型文土器は豊田市に隣接する東加茂郡足助町では出土例が多く、前出の馬場遺跡や大麦田遺跡（足助町大字西檜尾）（鈴木他 1987）などで、神宮寺系のものを中心に100点以上が出土している。豊田市内では酒呑ジュリナ遺跡での報告（大参他 1967）があるのみである<sup>1)</sup>が、豊田市東部地域では足助町と同様に押型文土器の出土がこれからも予想され、矢作川流域での縄文時代早期の様相を明らかにするきっかけになることが期待される。

高樋遺跡の縄文土器は早期後葉の条痕文系土器に位置づけられる2類、3類土器が主体である。茅山下層式あるいはそれに近い土器とした2類土器は、近隣の同時期とされる土器とは類似点が少なく、やや特殊な様相を示している。粕畑式に比定される3類土器は、矢作川流域の山間部で出土例が多い土器である。この地域の縄文時代早期の遺跡からは、押型文土器や条痕文系土器が多く出土するものの、土器形式では粕畑式の時期までで、それに後続する早期末葉の土器の出土例は少ない<sup>2)</sup>。高樋遺跡でもそれは同様であった。矢作川上流域では粕畑式土器の時期が終了した時点で、人々がこの地での生活を断念せざるを得ない事情があったかも知れない。

### 註

(1) 高樋遺跡とはほぼ同時期に本センターが調査した三斗目遺跡（豊田市坂上町）でも、1点のみであるが押型文土器を出土している。平成5年3月報告書刊行。

石黒立人・余合昭彦他 1993 『三斗目・三本松遺跡』 働愛知県埋蔵文化財センター

(2) わずかに紺屋貝戸遺跡（足助町大字中立）で粕畑式から前期の塩屋式にいたる土器が数点出土している（鈴木他 1982）。

### 参考文献

- 鈴木茂夫他 1981 『馬場遺跡概報』 足助町教育委員会  
 1982 『埋蔵文化財確認調査(3)』 足助町教育委員会  
 1987 『大麦田遺跡概報』 足助町教育委員会  
 大参義一他 1967 「酒呑ジュリナ遺跡」『名古屋大学文学部研究論集44』 名古屋大学文学部



附表(1)

土器一覽表

番号	登録番号	分 類	出土層位	色 調	番号	登録番号	分 類	出土層位	色 調
1	E-1	1類 a	Ⅲ層	茶褐色	46	E-38	3類	Ⅱ層	茶褐色
2	E-2	1類 a	SK01	赤褐色	47	E-43	3類	Ⅱ層	赤褐色
3	E-3	1類 a	Ⅱ層	赤褐色	48	E-39	3類	Ⅱ層	赤橙色
4	E-8	1類 b	Ⅱ層	赤褐色	49	E-36	3類	Ⅱ層	濃橙色
5	E-5	1類 b	Ⅱ層	茶褐色	50	E-47	3類	Ⅱ層	赤茶褐色
6	E-6	1類 b	Ⅱ層	赤褐色	51	E-46	3類	Ⅱ層	赤褐色
7	E-7	1類 b	Ⅱ層	赤褐色	52	E-44	3類	Ⅱ層	赤褐色
8	E-9	1類 c	Ⅱ層	茶褐色	53	E-45	3類	Ⅱ層	黒褐色
9	E-10	1類 c	Ⅱ層	薄赤褐色	54	E-51	3類	Ⅱ層	赤褐色
10	E-14	2類	Ⅱ層	茶褐色	55	E-52	3類	Ⅱ層	黒褐色
11	E-11	2類	Ⅱ層	濃茶褐色	56	E-53	3類	Ⅱ層	赤褐色
12	E-15	2類	Ⅱ層	黒茶褐色	57	E-57	4類	Ⅱ層	明茶褐色
13	E-13	2類	Ⅱ層	茶褐色	58	E-60	5類	Ⅱ層	褐色
14	E-14	2類	Ⅱ層	茶褐色	59	E-66	5類	I層	茶褐色
15	E-12	2類	Ⅱ層	黒茶褐色	60	E-68	5類	Ⅱ層	茶褐色
16	E-16	2類	Ⅱ層	明茶褐色	61	E-61	5類	表土	黒褐色
17	E-17	2類	Ⅱ層	茶褐色	62	E-58	5類	Ⅱ層	明茶褐色
18	E-54	2類	Ⅱ層	黒褐色	63	E-62	5類	Ⅱ層	黒灰褐色
19	E-19	2類	Ⅱ層	黒褐色	64	E-64	5類	Ⅱ層	赤褐色
20	E-55	2類	Ⅱ層	黒褐色	65	E-65	5類	I層	黒褐色
21	E-18	2類	Ⅱ層	茶褐色	66	E-63	5類	I層	明赤橙色
22	E-56	2類	Ⅱ層	赤褐色	67	E-59	5類	表土	濃茶褐色
23	E-25	2類	Ⅱ層	黒褐色	68	E-67	5類	Ⅱ層	赤橙色
24	E-28	2類	Ⅱ層	茶褐色	69	E-69	5類	表土	赤橙色
25	E-23	2類	Ⅱ層	赤茶褐色	70	E-70	5類	I層	赤褐色
26	E-24	2類	Ⅱ層	黒茶褐色	71	E-71	6類	I層	明茶褐色
27	E-27	2類	Ⅱ層	茶褐色	72	E-72	6類	表土	黒褐色
28	E-4	2類	Ⅱ層	濃茶褐色	73	E-75	7類	Ⅱ層	黒褐色
29	E-22	2類	Ⅱ層	黒褐色	74	E-77	7類	I層	明茶褐色
30	E-26	2類	Ⅱ層	茶褐色	75	E-74	7類	Ⅱ層	黒茶褐色
31	E-21	2類	Ⅱ層	黒褐色	76	E-76	7類	Ⅱ層	黒褐色
32	E-77	2類	Ⅱ層	黒褐色	77	E-80	7類	Ⅱ層	赤褐色
33	E-73	2類	Ⅱ層	黒褐色	78	E-78	7類	I層	濃茶褐色
34	E-29	3類	Ⅱ層	赤褐色	79	E-41	7類	Ⅱ層	黒灰褐色
35	E-31	3類	Ⅱ層	暗黒褐色	80	E-40	7類	Ⅱ層	黒灰褐色
36	E-49	3類	Ⅱ層	黒褐色	81	E-81	7類	Ⅱ層	濃赤橙色
37	E-37	3類	Ⅱ層	黄褐色	82	E-82	8類	Ⅱ層	黒灰色
38	E-30	3類	Ⅱ層	赤橙色	83	E-83	8類	Ⅱ層	黄褐色
39	E-32	3類	Ⅱ層	明褐色	84	E-84	8類	I層	赤褐色
40	E-33	3類	Ⅱ層	黒褐色	85	E-85	8類	Ⅱ層	赤褐色
41	E-34	3類	Ⅱ層	赤黄褐色	86	E-86	8類	Ⅱ層	黄褐色
42	E-48	3類	Ⅱ層	茶褐色	87	E-87	山茶碗	表土	
43	E-50	3類	Ⅱ層	赤橙色					
44	E-42	3類	I層	明茶褐色					
45	E-35	3類	Ⅱ層	黄橙色					

## 附表(2)

石器一覧表

番号	登録番号	種 別	出土層位	石 質	重 量
1	S-01	石鏃	SK01	チャート	1.4 g
2	S-02	"	Ⅱ層	安山岩	3.0 g
3	S-03	尖頭器	Ⅱ層	黒曜石	4.2 g
4	S-04	剥片石器	SK01	サヌカイト	0.7 g
5	S-05	石匙	Ⅱ層	凝灰岩	7.5 g
6	S-06	スクレーパー	Ⅱ層	チャート	32.2 g
7	S-07	"	Ⅱ層	凝灰岩	39.5 g
8	S-08	"	Ⅱ層	安山岩	41.3 g
9	S-09	"	Ⅱ層	極細粒砂岩	63.2 g
10	S-10	"	Ⅱ層	凝灰岩	42.8 g
11	S-11	"	Ⅱ層	安山岩	114.0 g
12	S-12	"	Ⅱ層	下呂石	60.0 g

# 圖 版



調査区全景  
(東より)



調査区全景  
(西より)

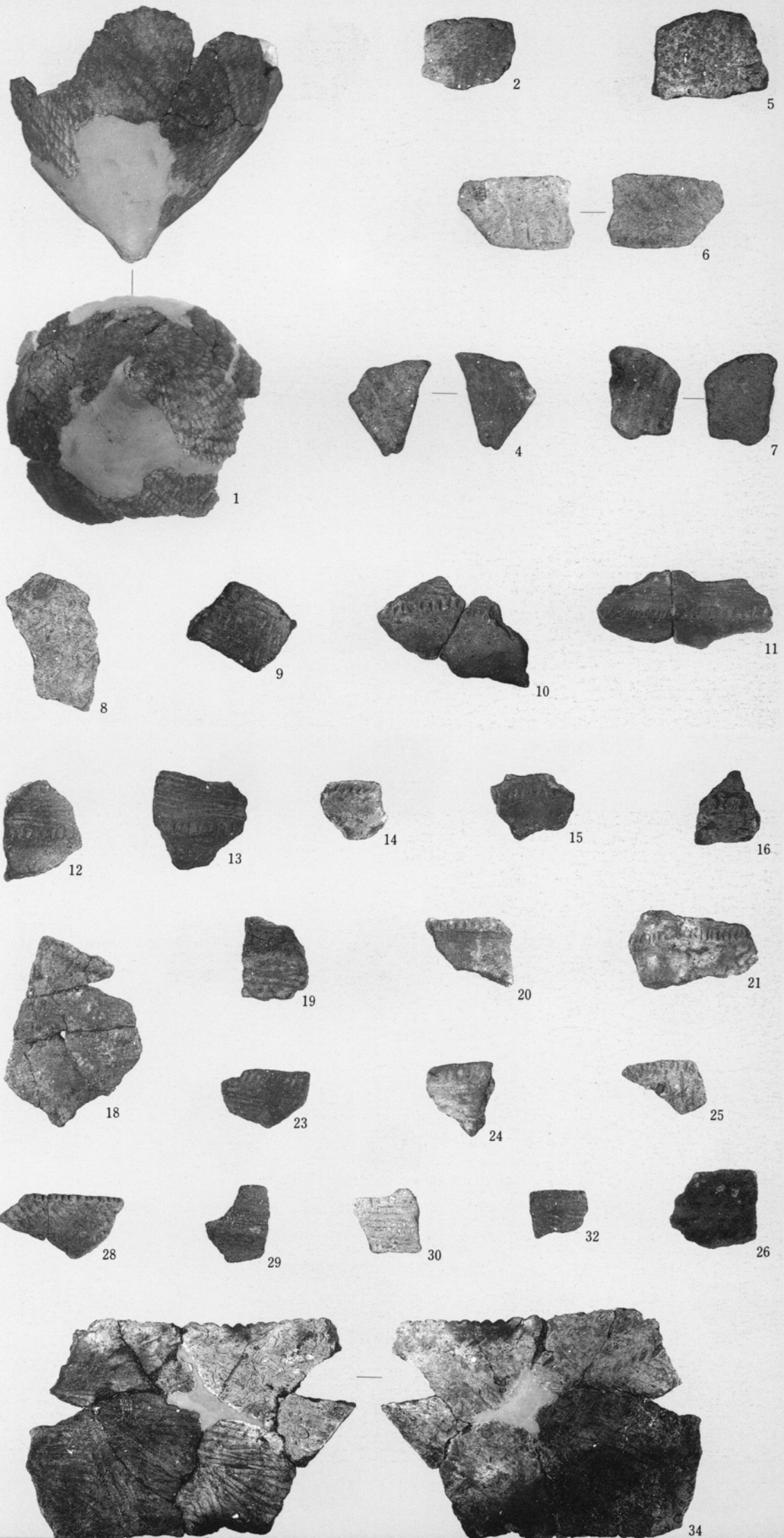


SK01  
(東より)

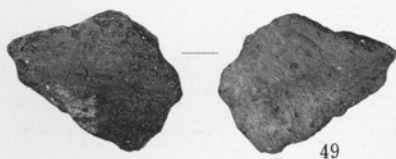
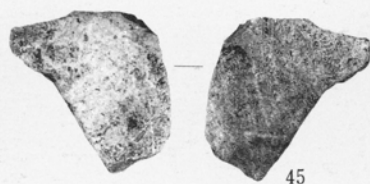
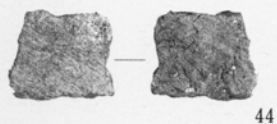
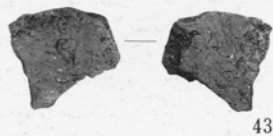
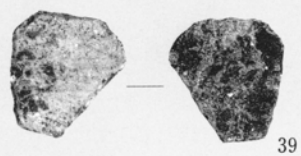
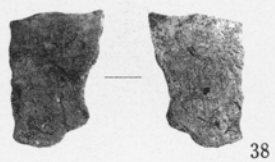


押型文土器  
出土状況





縄文土器  
(1)  
(約 $\frac{1}{3}$ )





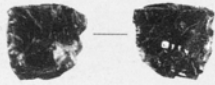
1



2



4



3



5



6



9



10



7



8



11



12



# 報告書抄録

フリガナ	イボイセキ・ネガワ3ゴウフン・サカグチイセキ・タカドイイセキ
書名	伊保遺跡・根川3号墳・坂口遺跡・高樋遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第46集
編著者名	松田訓・赤塚次郎・都築暢也・杉山真二・服部俊之・余合昭彦・服部信博
編集機関	財団法人愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498 愛知県海部郡弥富町大字前々須新田字野方802-24
発行年	西暦1993年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
イボ 伊保	トヨタシヒガシホミチョウ ・ホミチョウ 豊田市東保見 町・保見町	23211	63074	35°30'00"	137°8'30"	19901101 19920731	4442	道路建設
ネガワ3ゴウフン 根川3号墳	トヨタシヒガシホミチョウ ネガワ 豊田市東保見 町根川	23211	—	35°30'00"	137°8'30"	19900601 19900831	300	道路建設
サカグチ 坂口	ヒガシカモグンアサヒチョ ウオオアザイケジマアザ カグチ 東加茂郡旭町 大字池嶋字坂 口	23544	69022	35°12'00"	137°18'37"	19911001 19920110  19920420 19920814	366  455	道路拡幅
タカドイ 高樋	トヨタシサカウエチョウ 豊田市坂上町	23211	—	35°4'00"	137°16'41"	19911105 19920107	500	道路拡幅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
伊保	集落	旧石器 弥生 古墳 平安	自然流路2 掘立柱建物1	尖頭器4 古式土師器 灰釉系陶器	旧石器の遺構なし  集落の縁辺部
根川3号墳	古墳	古墳	古墳1	須恵器	
坂口	散布地	縄文	土坑85	縄文土器・土製品 石器	
高樋	散布地	縄文	土坑1	縄文土器・石器	

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第46集

伊 保 遺 跡

根 川 3 号 墳

坂 口 遺 跡

高 樋 遺 跡

1993年3月30日

編集・発行 財団法人愛知県埋蔵文化財センター

印刷 正 鶴 堂